
PocketMonsters LINK ～迷える少年～

ハビト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P o c k e t M o n s t e r s L I N K 〈迷える少年〉

【Nコード】

N 8 4 3 8 F

【作者名】

ハビト

【あらすじ】

少年はポケモンリーグにでて優勝するという夢があった。しかしある理由で夢を諦めかけていた……。今は届け屋という職業に就いている。

様々な依頼人の頼みを受け、徐々にですが自分の中で答えを探していく。はたして少年はトレーナーに戻るのか、それとも別の道を歩むか？その先に待っている答えとは――？

舞台はジョウト地方

第1話：仕事（前書き）

多分よくわからない小説になると思いますが、よろしく願います。

第1話…仕事

ジョウト地方…コガネシティ

ここ、コガネシティはジョウト地方の中では1番の都会である。空は夕闇につつまれ、星もちらほらと見えてきた。今は夜なのに、そこらじゅうにそびえ立つビルや建物の光で明るく街を照らしている。

「フウ…、やっと帰ってきたな」

いつもより1オクターブ低い声で呟いた。

俺の名はリュウガ、年齢は16歳。今は届け屋の仕事が終わり、俺の家があるコガネシティへ帰ってきたところだ。

ちなみに“届け屋”というのは、簡単に言うと届け先に荷物や資料を届けたりする仕事である。いわゆる“運び屋”だ。

他にもポケモンのタマゴを届けたり、泥棒を捕まえて窃盗した物を持ち主に届けたり、人を目的地におくり届けたりするとか、結構変わった仕事もある。

自宅

「ただいま」

「お帰りなさい。いがいに早く帰ってくるのね」

台所で調理をしている母さんが少し驚いた口調で言った。

「エンちゃんは何？」

「モンスターボールの中にしまってるよ」

エンちゃんというのは、俺のポケモンであり相棒の“ヘルガー”である。

ちなみにモンスターボールというのは、“ポケットモンスター”略して“ポケモン”という生物を捕まえたり、捕まえたポケモンを収納する道具である。

話を戻すが、母さんはヘルガーのことを“エンちゃん”と読んでいるが、俺はエンちゃんとはよばずに普通にヘルガーと読んでいる。

とりあえず俺は疲れていたのでメシを食った後、速攻で階段をのぼって自分の部屋へ行き、ベッドにダイブして、近くにあった時計を確認した。

「21時5分か……」

まだ普通では寝るのは早い時間帯だが、仕事帰りで疲れているので寝ようとしていた……が！

ートゥルルルルルルル トウルルルルルルッー

携帯電話が鳴った。

『誰だよ、寝ようとしてたのに』と心の中で思いつつ電話にでた。

「ああー、もしもし」

不機嫌そうに言う。

『もしもしいく私だよー!』

相手の女の人がウザいくらいに元気いっぱいに言った。

ああ……眠いし電話きりてえ…。

「眠いから電話きつぞ!」

思っていたことをそのまま言った。

『ちよつとまってよー!』

「なんかようか? マアリ?」

こいつの名はマアリ。俺と同じ16歳。

小さい頃からの幼馴染みであり、ジョウト地方のポケモンリーグ本選ベスト8の実力者でもある。今はシンオウ地方のみで販売されている“ポケッチ”という道具を宣伝するアイドル(?)として頑張ってる……らしい。これ以上は詳しくは知らねえけど。

余談だがジョウト地方では、ポケッチは発売されてない。

『前に水タイプのポケモンがほしいうって言ってたでしょ』

前って……つかそれって、2年くらい前の話だぞ! まだトレーナーをやった時期ころだぞ。こいつまだ覚えていたのか…。

「確かに言ったような気がするが……」

『こっちの地方にしか生息していない、水タイプのポケモンをゲットしたのよ。今度、そっちに帰ったらリュウガにあげるわー』

「いらねえよ……もうトレーナーじゃねえし」

マアリに少し悲しげに言い放つ。

『まだ“あのこと”気にしてるの!』

「……」

痛いところを突かれたので何も言い返せねえ。クソ……嫌な事思いだしたじゃねえか!

『そのことはいいとしてーどんなポケモンか楽しみに待っててね。』

おやすみ』

「いや、ちょっと待っ…」

―ツ― ツ― ツ―

き、きられた…。

ハア、俺はこのままで届け屋でいいのか…やはりポケモントレーナーにもどるほうが……
などと考えていたら睡魔におそわれついに……

眠りについてしまった。

翌朝

近所で飼われてるドーリオの鳴き声で目が覚めた。
「…うう……、朝か？ いま何時だ？」

ガサガサガサッ

近くに時計あるのにもかかわらず必死にさがす。

やっと時計が見つかり時間を確認する。

「6時：17分か：、母さん起きてるか？」

階段を降りて一階にある台所に行く。まあ、多分起きているとおもうがな。

「あらあ、おはよう、今日は起きるが早いのね。」

やはり母さんは起きていた。

「ハアア：おはよう、朝ごはんある？」

さすがに眠いので、欠伸をしながら母さんに言った。

「まだよ。でもポケモンちゃん達のは、すぐに用意できるわよ」
すぐにメシの準備にとりかかる。

とりあえず手持ちの3つのモンスターボールのボタンを押して、手のひらサイズにして投げた。

中からヘルガーとオオタチとネイティが出てきた。

「エンちゃん、タっちちゃん、ネイちゃん、ご飯よ」

母さんは俺のポケモン達をあだ名で言う。何故あだ名で言うと聞いたのだが教えてはくれない。まあ知らんでもいいけど。

とりあえず朝ごはん食べて自分の部屋へ戻ってベッドにダイブする。依頼がこないと届け屋は暇なんだよなあ。なんかつまんねえな。

―トウルルルルルルルルルルルルルルルルルッ―

「ん？」

携帯電話がなっているので電話にでた。

「もしもし」

『もしもし、キリコだけどリュウガ君？』

この女の人“コガネ特別宅配センター”（届け屋の本拠地）というところで働いている人である。

依頼が来ると俺や他の届け屋（運び屋）の人に連絡してくれる人だ。
ちなみに年齢は……不明である。

連絡がきたっていうことは依頼がきたのか？

「仕事ですか？」

『いいえ、それがほとんど依頼がこないのよ！だからしばらくは、
休んでいいわよ。それじゃねえ』

―ツ― ツ― ツ―

電話がきれた…ハア…。

しばらくは暇だな…、もう一度寝つか。

俺はそのまま二度寝した。

第1話：仕事（後書き）

まだ人物紹介みたいなことしかしていませんね。

第2話…出発準備!!

あれから1週間がたった。相変わらずキリコさんから電話がこない……。かなり暇である。ここ1週間はほとんど外出せず家にいたりするが…なんか正直引きこもりの人の気持ちが少しわかる(?)…：ような気がした。

ただいまの時刻は丁度9時。さすがに引きこもってばかりもいられないので私服に着替えた。
そのとき…

ピンポーーーーン

家のチャイムがなっている。誰かがきたみたいだ。
台所に母さんがいると思ったのであえて出ていかなかった。
しかし…

ピンポーーーーン

ピンポン

ピンポン

ピンポン

ピンポン

ピンポーーーーン

「チャイムうるせえな！！母さんはいねえのか？」

愚痴をこぼしながらいそいで階段を降り玄関のドアを開けた。

そこには：

誰もいなかった。つてことは……

「こんなことするやつは、絶対に“あの筋肉バカ野郎”だけだ!!」

ヘルガー、出てこい!!」

モンスターボールを投げ、そこからヘルガーが出てきた。

「ヘルガー！今ここにいた奴のにおいをおってきてくれ。抵抗するようなら怪我をしない程度にぶっ飛ばせ！」

「ヘルウウウウ」

ヘルガーが叫びながら庭のほうにむかっていった。

「いでええええええええええ！！！」

庭からとてつもない勢いで叫び声がきこえた。

あの声はやっぱりあいつだ。

とりあえず俺は庭に行ってみた。

「痛い痛いぜえー！、離してくれえ」

ヘルガーが男の人の足を噛んでいた。

「相変わらずだな！ゴウ！いい歳してこんなイタズラすんじゃないよ」

こいつはマアリと同じで昔からの友人であり、2年前俺と同じ時期にポケモントレーナーとして旅だったやつでもある。ちなみにマアリも同じ時期に旅だった。こいつを一言であらわすと“筋肉バカ”である。

「と、とりあえずこのヘルガーを何とかしてくれえええ（泣）」
すぐく泣きそうな顔をしている。筋肉バカなのに……。筋肉関係ねえか。

さすがに少しかわいそうなので

「ヘルガー、離してやれ」

そう言うと、ヘルガーはゴウの足を離した。

「イデデデデ、まったくだぜ……」

「まったくじゃねえよ！筋肉バカが……そんで何のようだ」

「やっと6つめのバッジをゲットしたわけ。7つめのバッジがある
チョウジタウンに向かうため、いったんコガネシティに戻って旅の
準備にきたんだぜ」

「それで？」

「準備のために外出してたらリュウガの母さんに会ってな。リュウ
ガが家にいるって言うからあそびに来たんだよ」

「なるほど」

少し納得する。

「お前が届け屋とかやってる間、俺は6つもバッジをゲットしたぜ」
ゴウが自慢気にバッジを見せてくる。

「やっとバッジ6つか。お前……結構苦戦してんだな」

「いや、途中でトレーナーをやめたやつには言われたくないが」
「う……」

痛いところを突かれた

「それはいいとして、これからどうする？」

とりあえず話をそらす。

「旅の準備をするからコガネ百貨店に行こうぜ。リュウガも届け屋で仕事に行くとき色々必要だろ」

「まあな」

「後、地下通路にある地下商店にも行こうぜ！ あそこは面白いものもあるし」

「わかった。少し準備をするから待っててくれ」

俺はヘルガーをモンスターボールに戻し、自分の部屋に行き準備をした

そして：

コガネ百貨店

ここは他の町にあるフレンドリイショップとは違い、かなり品物が置いてある。しかもポケモンに、技を覚えさせる『技マシン』も売っている。

「相変わらずここは広いな」

「確かにな。俺なんか久しぶりだぜ。でもあんまり変わってないぜ！」

（一時間後）

俺たちは、一通り買い物をすませたあと屋上にある自動販売機でサイコソーダを買い休憩をしていた。

「買い物も終わって休憩もしたことだし行くか？」

ゴウに問いかける

「そんじゃあ地下通路に行こうぜ！」

そう言ったあとコガネ百貨店を出てしばらく地下通路のある場所へ歩いた。

そして…

地下通路（地下商店）

ここは普通の店とは違って、特殊な品物が売っている。たまにかなり珍しい品物が売ってたり、売ってなかったり……。コガネ百貨店があるせいか、あまり人がいない。

「相変わらずあまり人がいないぜ」

ゴウが静かに呟く。

「確かにな」

話しながらあるいていると、俺はある1つの店の前に止まった。なんとそこにはいろいろな技マシンが売っているのだ。

すると

「どうや！珍しいやろ！」

コガネ弁で話す店のおじさんが俺達に話してきた。

「確かに珍しいな。ゴウは買うか？」

「んー……。買いたいけど、百貨店で色々かったからなあ。あまり金がないし……」

どうやら悩んでいるようだ。

俺も正直悩んでいる。

並べてある品物を順番に見ていくと……。

「これは：技マシン13」

これには『冷凍ビーム』が記録されている。

さらに品物を見ていると……。

技マシン19 『ギカドレイン』

技マシン28 『あなをほる』

技マシン40 『燕返し』

技マシン57 『チャージビーム』

などがある。

「今日しか売らへんよ！さあ買った！買ったあ！」

店のおじさんが言う

「それじゃあ：技マシン13と40をください」

「ええ！買うの」

ゴウがものすごく驚く。

「技マシン13が5000円で、40が3500や。合計8500円や。ほんまええのか」

「いいです」

「いやいや、リュウガさんよ…あなたトレーナーをやめたんじゃない…」

バシィイツ

「いでえ!!」

ゴウの頭をおもいつきりチョップをくらわした。

「まいどあり！」

「よく買う金があるな」

ゴウかきいてくる。

「いや、わかるだろ」

と逆にゴウに言った。

そもそも届け屋という職業についているからお金もらってるんだけどな。

「わからん!!」

キッパリ言う

はあ……こいつついに脳まで筋肉バカになったか？
などと思っているとき…

ー トウルルルルルル トウルルルルルルッー

電話だ。しかもキリコさんからだ。ということは、依頼か!?

「あー、もしもし」

『あ、リュウガ君。依頼がきたわよ。内容は明日、宅配センターで
ゆうわ』

「了解ッス」

「じゃあね。また明日」

ー ツー ツー ツーー

「仕事の依頼か？」

ゴウがきいてくる

「まあ そうだ」

「場所は？」

「明日言うってよ」

「そうか…。俺も明日出発予定なんだ。もし行く方向が同じだった
ら一緒に行こうぜ」

「当たり前だ。行くにきまつてるだろうが！」

「じゃあな」

ゴウが手をふってきた。

「じゃあな」

俺も手をふりかえす。

久しぶりの依頼だな。正直アイツと行く方向が同じだったらしいなあ。ま、照れくさいしこんなこと言えないけどな。さて家に帰って明日の準備をして風呂にでも――

「そっか！お前！届け屋（運び屋）だし金あるんだな！」
遠くでゴウが大声で叫んできた。

「今さらかよ！！」

おれも大声でゴウにツツコンだ。

第2話：出発準備！！（後書き）

この作品はゲームで言うと『ポケットモンスター金、銀、クリスタル』の3年前と『ポケットモンスター赤、緑、青、黄』を合体させたものです。さらに作者のオリジナル要素も含まれます。

ポケモンはカントー地方とシンオウ地方のポケモンが登場します。正直微妙ですがよろしく願います。

第3話：やっと出発だ！！（前書き）

タイトル通りやっと出発です。

第3話..やっとう発だ!!

36番道路

「疲れたあゝ」

「さすがに疲れたな。ヘルガー休むぞ」

「ヘルルウ ヘルルヘルウ」

ヘルガーが何かを言っている。多分こいつは『俺は元気だぜ!』って言うてる...:ような気がする。わからないけど。でもヘルガーは疲れてなさそうだ...:さすがポケモンだな。

話しはかわるが、なぜヘルガーがモンスターボールから出ているのか説明しておこう。理由は2つある。

1つめは届け屋の仕事で荷物を運んでいるとき、盗人や泥棒などに荷物を盗まれないようにするためだ。ヘルガーは嗅覚が良いので近くに人がくるとすぐにわかってしまうのだ。

2つめは、ただヘルガーがモンスターボールに入るのがあまり好きじゃないからだ。

届け屋の仕事がいではなるべくは出さないではいるが、あんまりボール入っていると勝手に出てきてしまうのだ。ポケモントレーナーだったころも常にヘルガーを出していたのだ。

でも俺は、あまりヘルガーを出しっぱなしにはしたくない“理由”がある。

それは...:

旅をしていると後ほどわかる。

そして休憩も終わり、歩いて40分後。

「ポケギアのマップだと37番道路だ。そろそろじゃないか？」

「そうだな、さて依頼された物をさがすか。」

俺は依頼の物をさがす。ゴウも協力してくれるようなので、すぐに見つかると思うが…。

ちなみにどんな依頼だったのかというと……。

（2日前）

俺はバックを持ち途中で合流したゴウと一緒に特別宅配センターに向かった。宅配センターに着くとすぐにキリコさんがいる2階の部屋へ向かった。

「部外者は禁止よ」

ゴウに指をさした。

「ええ!!」

ゴウがかなり驚くが

「それでキリコさん、依頼の内容は？」

「俺の事シカトかよ」

ゴウが小声で呟いた。

とりあえずこいつは放っておいてと。

「そうあわてない。依頼人はヒワダタウンの“ガンテツ”さんというかたよ」

「ガンテツさんといえば、あのボール作り職人の人か!？」

ゴウびっくりしながら言う。

ガンテツさんと言えば、ジョウト地方ではけっこう有名なボール作りの職人である。

でも頑固なので、作ったボールは気に入った人しかくれないらしい。トレーナーのころ、俺とゴウ（俺は強制的）でボールをください!と言ったが速攻で断られた。

「部外者は黙ってて!」

ゴウにきつくしかる。

「あの……、いいですか? キリコさん」

「え……? ええ……? いいですよ!？」

何故かすごくあわてている。

「何を、いってんすか!」

この人は相変わらずだな…

「えっ……と、依頼内容は、37番道路にある黒ぼんぐりと赤ぼんぐりと青ぼんぐりをとってきてヒワダタウンにいるガンテツさんに届ける依頼よ」

「具体的に何個ぐらいとってくればいいんすか?」

キリコさんに質問する。

「特に言われてないし…。何個でもいいんじゃない?」
適当だな

「あの……俺も質問が…」

ゴウがそう言う

「部外者は出ていきなさーい!」

近くにあつた資料やペンなどをゴウに投げまくっている。

ヒューー ヒューー (投げている効果音)

グサア

グサア????

「いたい……、ギアアアアア 頭から血があ!! ペンがああ!
! 止血止血止血止血ウ!!」

後は、ご想像におまかせします。

依頼内容はこんな感じである。
依頼いがいのことは気にしないでくれ。

「見つからないな」

しばらく歩いてはいるが、周りは木や草むらしかない。ぼんぐりの木などある気配がまったくしないんだが…。

「見つからないなあゝ。つーか疲れたあ」

ゴウが弱音をはいている。

「確かに見つからないしな。少し休憩するか？」

「賛成！！」

しかし休憩をしているとヘルガーいきなりほえだした。するとまるで何かに引き込まれたみたいに走って行ってしまった。

「ゴウいくぞ！ヘルガーが何か見つけたみたいだ」

「休憩中だが、しかたないか」

俺達はいそいでヘルガーが後を追った。

第3話..やっとう発だ!! (後書き)

次回でヘルガーを出しっぱなしにしたくない理由がわかります。少しくだらないかもしれませんが。

第4話…このぼんぐりの木は僕のものだ!? ゴウVS虫取り少年

今、俺とゴウはいきなり走りだしたヘルガーを追っている。

多分ヘルガーが自慢の嗅覚でぼんぐりのあるところを突き止めたに違いない。俺達はヘルガーを信じてついていくしかない。

しかしヘルガーはあしが速すぎる……。正直…休みてえ…疲れた。やっとヘルガーが止まってくれた。

そしてヘルガーの前にはちよつとした広場みたいになってあり、周りにはほとんど行く手を阻む草や木がない。そしてその広場の真ん中ふきんに3つの木があった。

こいつは黒、赤、青ぼんぐりの木。

「やっとなついたあー！ー！！」

ゴウが大声で叫ぶ。

「それじゃあとりにいくか」

俺が木に近づいたとき…

「ヘルウウウウ！！」

またいきなりヘルガーが叫びだした。

今度はなんだ！と思いいヘルガーの方向を見た。しかしヘルガーの目の先には少年？……いや虫取り少年が立っていた。すると

「そこで何しているんだ！その木は僕のものだ！！近寄るな」

いきなり訳もわからず叫んでいる。

いや…この木って自然のものだよな？アイツのものじゃないだろ。などと思っていると…

「おいそこのガキ！それはお前のものじゃないだろ！」

ゴウが言った。

「うるせえ！ここは僕が先に見つけたんだ！だから僕のものだ」

ゴウに反論すると、虫取り少年はモンスターボールを出しボールを投げた。

中からは、大きい蜘蛛のようなポケモンがでてきた。

アリアドスである。

俺は今ポケモントレーナーではなく届け屋という立場なので、無駄なバトルはさけてえがな。

「俺はお前とポケモンバトルするつもりはねえぞ」

俺は右手で頭を掻きながら言う。
すると虫取り少年が

「うるせえ！お前ら悪党だろ！だいたい悪タイプのポケモンもっているやつは、悪い奴なんだよ」

さっそくきたよ。この発言。これが俺がヘルガーを出しっぱなしにはしたくない理由だ。

ヘルガーを『悪タイプだから悪党が持っているポケモン』とか『見た目が怖い』などと外見で判断する奴がクソ多い。

なので子供は恐がったりするし……下手したら警察を呼ばれることもある。

「ヘルガーを見た目で判断すんなよ。少なくともお前よりは1000倍はマシだ。クソ虫野郎が！」

俺は少し怒った口調で言う。

俺は、どうしても身内や友達を傷つけられたり、悪口を言われたりする、どうも少し熱くなってしまう。自分でも直したいところな

んだがな。

「うるせえ！うるせええ！！アリアドス！ナイトヘッド」

虫取り少年がいきなり攻撃をしてきた。

「しまった！？」

油断してた。ヘルガーは今俺の近くにはいない。このままじゃナイトヘッドが当たる！

当たると思い目を瞑った。
すると…

「アサナン！念力だ！」

ゴウである。間一髪でナイトヘッドを止めた。そしてそのまま念力でナイトヘッドを返し、アリアドスに当てた。しかしまだアリアドスはピンピンしてる。

「すまないな」

「なあゝに、気にするな。それにアイツは俺が倒す！」
ゴウがすごくかつこよく見える…：：：：：のような気がする。

「アリアドス、サイコネシスだ」

強い念力がアサナンを襲おうとしている。

「みきりだ」

みきりは相手の技をかわしてしまう技だ。

さすがだ。いとも簡単に相手の技をかわしてしまった。

「アリアドスに接近しろ」

アサナンがアリアドスに近づいてくる。

「なめるな！糸を吐くだ。そいつの動きを封じろ！」

「ジャンプしてかわせ！」

相手の糸を吐くを簡単によけた。

「そのままとびひざげりだ！」

相手のアリアドスにモロにくらって少しひるんだ。ゴウはそれを見

逃さない。

「これでフィニッシュだ。念力！」

アリアドスを空中にもちあげ、地面に叩きつけた。相手のアリアドスは目を回して気絶している。

虫取り少年はアリアドスを戻してそして

「くそお！覚えていろ！」

と発言しどこかにいってしまった。

「まったく：かっこつけやがって」

「照れるなあ、でも相手のポケモンはあまり強くなかったしな。このくらいは倒せて当然だ」

少し自慢気に言う。

「しかし“アサナン”だけ？こっちでは見かけないポケモンだよな？」

「まあな、旅の途中にハウエン地方からきたトレーナーにポケモン交換してもらったんだ」

「そのポケモン：たしか念力ととびひざげりを使っていたから、エスパーと格闘タイプか？」

ゴウに質問をする

「さすがだなりユウガ。これならポケモントレーナーに戻っても大丈夫だ」

「“あのこと”に決着がついたら考えるよ」

「まったく、素直じゃないんだから」

ゴウが呆れた口調で言う。

「それじゃぼんぐりをとりにいくか」

そう言うともンスターボールからオオタチを出した。

「なんでオオタチを出した？」

ゴウが疑問そうに言う。

「こいつは、どれがいいぼんぐりか見極めることができるんだ。なるべくいいぼんぐりのほうがいいだろ」

「それはそうだな、アサナン！俺たちも手伝うぞ」

「ヘルガーも手伝ってくれ」

「ヘルウ」

ヘルガーが返事をした。

みんなが手伝ったおかげですぐにぼんぐりを集められた。

ヘルガーが返事をした。

みんなが手伝ったおかげですぐにぼんぐりを集められた。
集めたぼんぐりをもっていたバックに限界までいれた。

そして：

「そろそろお別れだな、リュウガ。俺はそろそろ行くぜ」

「じゃあな。元気でいろよ」

「ヘルウウウ」

ヘルガーがほえている。ヘルガーも『じゃあな』って言ったんだと思う。

「もしポケモントレーナーに戻ったら俺とバトルしろよ。いや絶対にポケモントレーナーに戻れ」

すこし命令口調で言う。

「いつかな。もしそうになったら速攻でお前にポケモンバトルを挑んで勝ってやるよ」

「そのいきだ。じゃあな！」

ゴウと別れてしまった。少し別れるのが辛いがまた会えるしな。

俺はぼんぐりがたっぷり入ったバックをもち、来た道をヘルガーと一緒に歩きだした。

目指すは、ガンテツさんがいる：ヒワダタウンだ。

第4話：このぼんぐりの木は僕のものだ！？ ゴウVS虫取り少年（後書き）

ちなみにリュウガはカントー〜ジョウト地方のポケモンしかわからず、しかもポケモン図鑑ももっていない。という設定なので正直小説書くのが難しいです（笑）

第5話：ウバメの森へ黒い服の2人組（前書き）

ついにあの『組織』の人が現れます。

第5話：ウバメの森と黒い服の2人組

俺はぼんぐりの木がある37番道路から2日間かけてコガネシティに戻ってきた。この間にポケモントレーナーと何回バトルを仕掛けられそうになったか……。今はトレーナーではないため、断ったのだが、断ってもなおバトルをしかける糞トレーナーもいたがヘルガーでボコボコにした……。つもりだ。ぼんぐりをとりに行ったときはバトルを仕掛けられてもゴウが対処してくれたからな。

話しを戻すが、コガネシティに戻ってきて一度自分の家に帰った。とりあえず1日休んだ後、ヒワダタウンに行くため出発したのだ。

そして今は、ウバメの森というところにいる。ここを抜けるとヒワダタウンに着くのだ。

――ウバメの森――

ここは草ポケモンと虫ポケモンが多く生息しており、日が出てる昼間でも薄暗いところだ。俺もトレーナーのころここでゴウと一緒に迷ったことがある。今は迷わずいくことができる。

しばらく歩いているとほこらが見えてきた。ちょうどウバメの森の中間地点でもある。このほこらには100年に1回、ときわたりポケモンの『セレビィ』が来るといふ噂がながれている。多分デマだと思うが。

そしてまたしばらく歩いているとヘルガーが少し叫び出したのだ。

「ヘルウウウ」

「何か近くにいるのか」

とヘルガーにきいてみるとヘルガーが頷いた。

どうやら何かがいるのは間違いなさそうだ。俺は警戒しながら森をすすむ。

すると…

「私のヤドン離してよ!!」

いきなり女の人の声が聞こえた。

何かヤバそうだ。

「ヘルガー急ぐぞ!」

俺とヘルガーは急いで走った。

少し走ると俺とヘルガーの目の前に、黒い服を着ていて、胸のあたりに『R』とかいてある2人組の男と5、6歳ぐらいの少女がヤドンを引っ張りあっている。相手は2人組（しかも大人）で引っ張っている。少女は引きずられている。

「おいガキ! 離せ!」

「離せ! こいつはボスの土産にするんだ!」

「嫌だ! ヤドンは私の大切な家族なの! 離してよ」

少女が必死に抵抗している。さすがに放っておけないので

「その2人組のおっさん! いい歳して何してんだよ」

俺は呆れた口調で黒い服の男にいった。

「我々はおっさんではない!」

2人して声がハモっている。

「それじゃお兄さん達は誰だ?そこで何をしている」
黒い服の2人組に質問した。

「我々は見れば誰もが恐れると噂されている…」

「噂かよ!」

リュウガが突っ込む。

「最後まで言わせろ!!もう1回最初からだ」

「めんどくさいな」

「お願いだから最後まで聞いてあげて」

もう1人の黒い服の人が言った。

なんだ…この人らは…

「我々は見れば誰もが恐れると噂されている闇の組織……その名も

『ロケット団』……フウ、決まった」

「ロケット団?なんだそれ?」

俺がそう言うと、ロケット団の2人組がおもいきりズッコケる。

「まあ…わからなくて当然か。何故なら我々ロケット団は、カント
1地方でしか活動していないからな」

「何故おっさん…いやお兄さん達はこっちの地方にいる」

俺がそう言うと

「私たち2人は、ある幹部の命令でこちらの地方に視察しに来てい
るのだ」

つまり…こっちの地方にはまだこの2人しか来てないわけか…

「後もう1つ質問する。こっちの地方つまりジョウト地方に視察し
に来ているということは、今後こっちの地方にもロケット団が来て
活動するのか?」

「それはだな…」

何か言おうとしたが

「それ以上は言うな!」

もう1人のロケット団の人が止めてしまった。

チッ……もう少しで聞き出すことができたんだけどな。

「話を戻すがそのガキ！そのヤドンを渡してもらおう」

「嫌だ！嫌だあ！」

少女が騒ぐ。

「しかたがないな……少し痛めつけてやらないとな」

ロケット団の1人が言った

「まったく、いい歳して人のポケモンをとろうって訳？」

リュウガは呆れた口調で言う。

「うるせえ！こうなったら力づくだ！」

するとロケット団の2人組はモンスターボールを取りだし投げた。

中からはアーボと言う蛇のポケモンが出てきた。

もう1人のほうからは、ズバットと言うコウモリみたいなポケモンが出てきた。

「さあどうする？ヤドンを渡す気になったか？」

ロケット団が言ってくる。

「まったく、めんどくさいがおっさん達の相手は俺がやる」

「「だからおっさんじゃない！！」」

なんか……シンクロ率高いなあ……この2人。

「今はトレーナーじゃないし、やりたくないんだけどな。しかたない、ヘルガー戦うぞ！」

でもさすがにヘルガー1体じゃきつそうなので、モンスターボールを取りだしボールを投げてネイティを出した。

久々のダブルバトルである。

「我々の邪魔をするということは、どうなるかわかってるよな？」

「知らねーよ」

「なら……思い知らせてやる。いけアーボ！毒針だ」

口から紫色の針を数十個出してきた。

「こっちもだズバット、エアカッター」

自分の羽を降って刃を飛ばしてきた。

「ネイティ！念力で毒針を止めてはねかえしてくれ。ヘルガーは火炎放射でエアカッターを相殺してくれ」

念力で毒針を返したがアーボはほとんどダメージをくらっていない。ヘルガーのほうはエアカッターを相殺したせいか爆発が起こり、煙が発生した。

チャンスだな。

「くそ、煙で相手のポケモンがみえねえ」

ロケット団が悔しそうに言う。

「よし相手は煙で何もできない。ヘルガーはかぎ分けるを使え。見つけしだいアーボに火炎放射。ネイティはズバットの背後にテレポートしてから念力だ」

そう言うヘルガーはアーボを見つけ火炎放射をくらわせて1発で気絶させ、ネイティもズバットに念力をくらわせこっちも気絶させた。

もう相手は戦えるポケモンがない。

「ちつくしよー！！！」

「くそ、覚えていろ！」

まさに悪役の人が負けた後に言うセリフだ。ロケット団の2人は何処かに言ってしまった。俺はネイティをボールに戻した。

「あの：ありがとうございます」

少女がお礼を言ってきた。

「別にたまたま通りかかったただげだ。それに聞きたいことがあったな」

「なあに？あ、後私：千草ちぐさっていいいます」

「俺は名前リュウガ。話を戻すけど聞きたいことと言うのは、ガシテツさんの家ってどこにあるか知ってるか？」

前にゴウと行ったのだが、ヒワダタウンに行くのが久しぶりなので
ガンテツさんの家を忘れてしまったのだ。

「ガンテツって私の父ちゃんだよ」

「ええ!？」

俺は正直驚いた。

前行ったときは家にガンテツしかいなかったしな……。

「父ちゃんに何か用？」

「依頼されてた物を届けにきただけだ」

「じゃあ父ちゃんが言ってた届け屋さんだね。家まで案内するわ。
ヤドン、行くわよ」

俺とヘルガーはガンテツさんの娘(?)の千草について行くことに
した。

ウバメの森を抜ければヒワダタウンだ。

第6話：ガントツさんの家にて（前書き）

ガントツさんの家にぼんぐりを届けにいきます。

ですがガントツが暴走します。

第6話：ガンテツさんの家にて

俺とヘルガーはウバメの森を抜け出し千草にガンテツさんの家まで案内してもらっている。

ーヒワダタウンー

ここはコガネシティとは違って都会ではない。ビルなんてどこにもない。簡単にいうと田舎なんだけどな。

でもここは他の町とは違うところがある。それは……『ヤドン』が町中にかなりいることだ。ポケモンセンターの近くにもヤドン、人ん家の屋根の上にもヤドン、そして……ご老人と一緒に散歩している……ヤドン。

何故こんなにもヤドンがいるか……それは町外れにある『ヤドンの井戸』からヤドン達が遊びにきている(?)かららしい……。

ヤドン達はかなり無表情なので……遊びにきてるのかはさだかではない。つか何を考えているかわからない……。

「ここ私の家だよ」

「今ガンテツさんいるの？」

「いるよ。だって父ちゃんは引きこもりみたいなもんだし」
引きこもり……って。

リュウガの微妙に呆れた表現になる。

千草と一緒に家に入る。とりあえずヘルガーをモンスターボールにもどした。さすがに家にヘルガーを入れるわけにはいかないからな。

「父ちゃん帰ったよ」

千草は元気に言う。

「お邪魔します」

千草の後を追う。

すると

「千草！お前、ヤドンと何処へいった！」

少し怒鳴っている。

この人がガンテツさんか？しかしこの部屋は俺の知らないモンスターボールが大量に置いて（飾って）ある。

「えっと…ウバメの森」

千草がそう言うのとガンテツさんが

バゴオン

近くにあったちゃぶ台をおもいつき叩いた。

「オメエ！ウバメの森は危険だから行くなって言っただろうが！変な奴らに襲われたらどおすんだあ！！」

（いや実際に襲われましたよ…貴方の娘…）と俺は心の中で思う。

「お前はまだ5歳なんだぞ！俺はもう心配で心配でえ……」

ガンテツさんが泣いている。

つか貴方はどんだけ親バカだよ…。

「大丈夫だよ。襲われたけどそこにいるお兄ちゃんに助けてもらっ

たから」

あ…

襲われたって言っちゃたよ。見たところガンテツさん…相当親バカだから…。

まさか…。

「オメエ！襲われたのかよ！千草、お前無事か？怪我ねえか？後オメエ襲ったの誰だああ！今すぐ成敗してやらああああ！！！」
かなりの勢いで冷静さを失っている。やっぱりこうなったよ…。

「父ちゃん落ち着いて」

「これがああ！落ち着いていられるかあああ！……つかお前だれだ

あ？」

ようやく俺の存在に気づいてくれたよ。

「俺はリュウガ、貴方が依頼人の……」

「お前かああ！俺の娘を襲った奴わああ！」

「ええ！？」

おい！娘を襲ったやつがここにいる訳ないだろ。それに千草が『そこのお兄ちゃんに助けてもらった』って言っただろ！

「覚悟しろおお！」

やべえええ！殺される！

と思ったとき

「そこのお兄ちゃんは助けてもらった人よ！」

千草が大声で言った。

「え…そうなのか？」

やっと落ち着いてくれたよ。

やっと落ち着いてくれたのでガンテツさんに今まであったことを説明した。

俺が届け屋でガンテツに依頼されて、荷物を届けにきたこと

荷物を届けにいつている最中、千草が襲われていたこと

そして千草を襲っていた2人組のこと

全てを話した。

「それじゃあ娘を襲っていたのはその『なんとか団』っていう奴か？」

「そういうことですよ。後、これが貴方に依頼された物です」

そういうと、俺はバックに入っていたばんぐりをガンテツさんに渡した。

「こんなにとつてこなくてええんだけどなあ」

ガンテツが笑いながら俺に言った。

「あと一ついいですか」

俺はガンテツに質問をする。

「ああ別にええがよお、何だ？」

「ばんぐりを届けるのは届け屋の仕事ですが、37番道路にあるばんぐりをとりにいくのは届け屋の仕事ではないんですけど」

「そんな細かいことは気にするな」

キッパリ言った。

まあ別にいいけど。

「ほらあ報酬金だ。受けとれ」

俺にお金を渡してきた。

「後、この紙にサインをお願いします」

俺はバックからいろいろ書かれている紙をだした。

「めんどくさいなあ」

するとタンスからペンをとりだしサインをした。

「ありがとうございます。またご利用してください」

「ちょっと待て」

俺は帰ろうと玄関に行ったがガンテツさんに止められた。

「お前もう帰るのか？」

何故かはわからないが俺にそう言ってきた。

「いや：これからポケモンセンターで泊まって明日は観光する予定ですけど」

「じゃあ明日俺ん家に来てくれねえか？渡したい物があるんだ」
まさか渡したい物って…ボールか？そんなわけないか。

「わかりました」

そういつて玄関の戸をあけて帰ろうとしていると千草がいた。

「フツ、父ちゃんに気に入られたみたいだね」

「それはどうのことだ？」

「明日になればわかるよ。じゃあね、次来たらヤドンと一緒に遊ぼう！」

「次…来たらな」

俺は千草と別れた。

「出てこいヘルガー」

モンスターボールを取りだしヘルガーを出した。

「わりいなボールの中、狭かっただろ」

「ヘルルルルウ」

こいつ『狭かったよ』とでも言ってるのか？

まあいいか。とりあえずポケモンセンターに泊まりにいくか。

俺とヘルガーはポケモンセンターに向かった。

つか『次来たら遊ぼう』って千草が言ってたけど…明日ガンテツの家に行くんだよなあ…。

と疑問に思った。

第6話：ガントツさんの家にて（後書き）

学校がはじまったので、すいませんが更新が遅れます。

後、ガントツさんをこんなキャラにして…すまない。

第7話：観光？…そしてヒワダジムへ

「ヘルウウウウ！！」

ガブッ

「いでえ……ヘルガー、噛みつくのやめろ……。もう少し寝させろ」
どうやら勝手にモンスターボールから出てきたようだ。
俺はポケモンセンターの宿泊施設に泊まっている。ここは何故か無料で泊まることかできる。

「ヘルガー…携帯取ってくれ…」
ヘルガーは充電器にさしてある携帯を噛みついて（口で）取って俺に渡した。

当然だがヘルガーのよだれでぐちよぐちよである。

俺は携帯の時計を見た。

「8時15分か」

俺はパジャマ（ジャージ）を脱いでいつもの私服に着替えた。

とりあえずポケモンセンターで朝ごはんを食べ、ヒワダタウンを観光している。

観光というかただウロチョロしてるだけなんだけど……。

—4時間後—

腹がへったのでフレンドリイショップで昼ご飯（ヘルガーの分も）を買って近くにあった公園でご飯を食べている。
この町のほとんどを歩いた（観光した）のでこれからどうするか考えている。

すると…

「お前…リュウガか？久しぶりだなあ」

男の人が俺に話しかけてきた。

「おい、俺を覚えているか？」

俺は男の人の顔を見た。

あっこの人！…

「貴方はヒワダジムのジムリーダーのススキさん！！」

「ようやく思い出したか」

「なんでここにいんすか！？」

「別にいたっていいだろう！そっちこそなんでここにいるんだ？」

「それは…」

俺は今はポケモントレーナーを辞めたこと

今は届け屋をやっていること

仕事でヒワダタウンにきたと言うことをススキさんに話した。

「お前さんがトレーナーをやめちまったのか……少し残念だ。けどお前さんが決めたことだし俺は特に何も言わねえ。だけど少しでもトレーナーに戻りたいと思ってるなら戻ったほうがいいと思うぜ」ススキさんが真剣に語る。

「俺は正直ポケモントレーナーに戻りたいと思っている……。だけど生半可な気持ちで戻るわけにもいかない。俺が今届け屋をやっているのは、俺自身の答えを見つけるためだけです」

「そっかぁ、頑張れよ『迷える少年』よ」

「俺は……迷える少年……ですか」

リュウガは小声で言う。

確かに今の俺にはぴったりかもしれない。

「そうだリュウガ、ちよつとジムに来ないか？」「別にいいけど」

俺とヘルガーはススキさんとともにジムに向かった。

ーヒワダジムー

ここは、ポケモントレーナーがポケモンリーグに出場するために、必要な『バッジ』をてにいれるところだ。でもそのバッジをてにいれるにはジムにいる『ジムリーダー』を倒さなければいけない。

もちろんジムリーダーは手強い。ここのジムは主に虫タイプのポケモンを使う。

俺はこのバッジとキキョウシティのキキョウジムのバッジ合わせて2つ持っている。

「おい帰ったぞ！」

「父さん、お帰りなさい」

7、8歳ぐらいの少年が出迎えた。父さんって言ったから息子だろう。

「リュウガ、紹介するぞ。こいつは俺の息子の『ツクシ』って言うんだ。」

ススキさんがそう言うが、俺はここに何で連れてきたかわからないので

「ススキさん。何故ジムに俺を連れてきたんすか？」

と、ススキさんに尋ねる

すると：

「それは、我が息子、ツクシとバトルしてもらうためだ」

ススキさんがそう言うのとツクシが

「僕がこんな奴と戦うんですか？」

そう言ってきた。生意気なガキだな。

「いずれこのジムを継ぐんだろ？そのための修行だ」

「父さん、僕と僕のポケモン達はこんな奴には負けないですよ」

（こいつ生意気だが：自信に満ちている目をしてやがる）と心の中
で思う。

ツクシがそう言うのは、こんな奴に負けない！ここで負けたらジム
を継ぐのなんてまた先のことになるかもしれない：そういう気持ち
からだろうか。

「どうやらリュウガとバトルするみたいだな」

「ススキさん。誰が戦うなんて言いましたか？」

リュウガは少し呆れている。

「別にいいだろ！気にするな」

「いや気にするよ！」

俺がそういうと

「僕とバトルしないの？」

ツクシが言った。

「いや今の俺はトレーナーじゃ…」

「いいからやれ！」

ススキさんが怒鳴る。

「わかりましたあ」

ああめんどくせえ。

俺達はバトルフィールドに移動する。

ここはまるで森のようなフィールドである。フィールドの所々には木がはえている。

相手はこの場所に慣れているからこっちが不利……だがこっちにはヘルガーがいる。

相手は虫タイプのポケモン使いなはず！相性ならこっちが有利。

「これからバトルを開始する。使用ポケモンは1体だ。

バトルスタート」

ススキさんの合図とともに俺は

「いけ、ヘルガー」

俺の指示とともにフィールドに走っていった…

が

「ヘルガー禁止ね」

いきなりスキが言う。

「ええ!？」

俺はかなり驚く。

「何ですか!？」

「だってそれじゃツクシが相性わるいし、それにヘルガーじゃツクシが負けちゃうよ」

「僕はヘルガーなんかには負けない!」

ツクシが強気で言う。

「やめとけ!見たところお前のポケモンよりレベルが高いし、相性も悪いしな」

「わかりました!ヘルガー戻ってこい!」

「へ…ヘルウ!？」

ヘルガーがめっちゃくちや驚いてる。

そして

ガブツ

「いてええ!やめろ!ヘルガー!」

ヘルガーが俺の足に噛みついた。多分キレていやがる。やる気満々だったのに戻したからな。

「じゃあ仕切り直しだ。バトルスタート!」

やっとツクシとのバトルが始まる。

第8話…ヒワダジム！リュウガVSツクシ　そして…

（どうするか？ヘルガーは使えないしな。ネイティとオオタチ……どっちを使うか…）

「リュウガ！早く決めろ！」

いや、あんたせいで悩んでいるんだよ！突然ヘルガー禁止とか言いやがって！

「しかたないこいつに決めた」

「よーし！両者ポケモンを出せ」

ススキさんの合図と同時に俺とツクシはボールを投げた。

俺はオオタチを出した。

相手は両手に鋭いカマを持つカマキリみたいなポケモン、ストライクをだしてきた。

「バトル開始！」

審判をやっているススキさんがそう言う

「ストライク！近くにある木に飛び移って」

このバトルフィールドにある数十本ある木の一本に飛び移った。

「高速移動だ」

ストライクは木から木へ素早く移る。これを繰り返すことで、何処から攻撃くるかわからない。

「オオタチ、『あの技』だ。集中しろ」

オオタチは一步も動かない。

そして…

「いまだ！辻斬りだ」

オオタチがいる右方向から攻撃を仕掛けてきたが……。オオタチはストライクの方角を向いてる。

「何！？」

ツクシは驚く。

「今だ！水の波動」

オオタチの口周辺に球体の水が現れ、ストライクに攻撃した。無論ストライクにヒットした。

「何故だ？……何故ストライクの動きがわかる！？」

驚いてる。何故ならストライクは目にも見えないスピードで木から木へ移っていた。普通ならストライクの行動が読めないはず……。そうツクシは思っている。

「ストライク今やったことと同じことをして」

冷静にストライクに指示をした。もしかしたら今のはたまたまヒットしたのかもしれない。ストライクは今やったことと同じように木から木へ移動する。

「ついでに影分身だ」

かなりの数のストライクが目に見えないスピードで動く。

「これならわからないはず！一斉にオオタチに辻斬り！」

かなりの数のストライクがオオタチに襲おうとしている。しかし

「『本物』に水の波動だ」

そう指示すると本物のストライクに命中した。ストライクの影分身は全部消えた。

「何故だ」

ツクシはかなり驚く。

「簡単なことだ。『見破る』っていう技を使っただけだ」

見破るは回避率に関係なく攻撃が当たる技、つまり影分身を操る

が煙幕で命中率を下げようが関係ない。

「小細工は無しだ！連続斬り」

「乱れひっかきだ」

お互いの技がぶつかった。しかし連続斬りは使えば使うほど技の威力が上がる。なので少しずつだがオオタチが押されている。

これはヤベエな

「ストライクから離れろ」

ストライクからオオタチを離れさせた。

「水の波動だ」

近距離では勝てなそうなので、遠距離から攻撃を仕掛けた。

「高速移動で技を回避しながら敵に接近して」

そう言うのと水の波動を簡単にかわし、オオタチに近づいていく。そして、あつという間にオオタチに近くにきてしまった。

「ヤバいな（ストライクのスピード速すぎだし、辻斬りでも使われたらかわせなさそうだ。こうなったらあれだ）」

「これで終わりだ！辻斬り」

オオタチに斬りかかった。

「ギャンブル技だがしかたない！猫の手だ」

「何!？」

猫の手は自分以外のオオタチのでもちのポケモンの技をランダムで1つ使う技だ。まあ指をふるよりはギャンブルじゃないが。

（できればヘルガーの火炎放射がでてくれ）と心の中で思う。

辻斬りが当たる寸前にストライクの動きが止まった。するとストライクが空中に持ち上がった。

「念力か：よしそのまま地面に叩きつけろ」

意外にもネイティの技が発動した。ストライクはおもいつきり地面

に叩きつけた。

「ストライク体勢を立て直して」

「遅い、水の波動だ」

地面に叩きつけられて動けないストライクにとどめをさした。

ストライクは目を回して気絶している。

「ストライク戦闘不能だな。リュウガの勝ちだ」

「負、負けた…」

ストライクをモンスターボールに戻した。ツクシはかなりショックを受けている。

するとススキが

「ツクシ…そんなショックを受けんな！お前は勝つことにこだわらずいだ。それにジムリーダーは挑戦者に勝つことが仕事ではない」

「父さん……じゃあジムリーダーの仕事って何？」

ツクシがススキさんに疑問をぶつける。

「それは……俺から言っただって意味がない。自分で見つけるしかないんだ。それに……今回はリュウガに負けたけど今度、ツクシが強くなったらまた勝負すればいいんだよ」

「グズッ…と、父ざー^{どう}ーん（泣）」

泣きながら父さん（ススキ）に抱きついた。

「今の気持ちを忘れるな！お前なら立派なジムリーダーに慣れるさ」

「グズッ…父さーーん」

この後2時間もこの親子愛(?)の光景を見たが省略する。

そして

「リュウガさん！僕が立派なジムリーダーになったらバトルしてください」

ツクシが元気に言う

「俺がポケモントレーナーに戻ったらな」

「じゃあねえ」

「またな！リュウガ！遊びにこいよ」

俺はツクシとススキさんと別れた。

その後忘れずにガンテツさんの家に行った。

—ガンテツさんの家—

「ガンテツさん何の用ですか？」

「ああこれをプレゼントだ」

するとボールを2つを俺に差し出した。

「これは？」

「これはお前さんがとってきた黒ぼんぐりのできる『ヘビーボール』じゃ。あと俺ん家の裏に生えている白ぼんぐりの木があるんだ。その白ぼんぐりのできる『スピードボール』じゃよ。受け取ってくれ」

「いいんですか？」

「もちろんだ、私の娘を助けてくれた礼じゃ」

「ありがとうございます。ところで千草は？」

「ヤドンと遊びに行ったよ」

「そうですか、なら帰ります」

「じゃあな、また依頼するかもな」

「あまり変な依頼しないでくださいよ」

俺は帰ろうとして玄関を開けるとそこには千草がいた。

「もう帰るの？」

「ああ帰るつもりだ」

「ええー！帰っちゃうのー？遊ぼうよ」

「さすがにもう夕方だし、またこの町に来たとき遊びにくるよ」

「それじゃ約束だよ」

「ああ」

「じゃあねー、お兄ちゃん」

「またな」

俺は千草と別れた。

そして

「もしもし母さん」

俺は母さんに電話をしている。

「どうしたの？ リュウちゃん？」

母さんが少し心配そうに言う。

「明日家に帰ってくる。それだけだ」

「フフッ、わかったわ」

「それじゃ母さん。電話切るよ」

「わかったよ」

―― ツー ツー ツー ―

電話を切った。

さて依頼も終わったことだし帰るか。

俺とヘルガーはヒワダタウンをでてウバメの森へ入って行く。
目指すは俺の家があるコガネシティへ。

第8話：ヒワダジム！リュウガVSツクシ　そして…（後書き）

3年後（金、銀、クリスタル）ではツクシは立派なジムリーダーになっています。

しかしツクシの親父の名前を『ススキ』にしましたが…。

もう少しいい名前の方がよかったかも（一・一；）

第9話：マアリストリー（マアリ視点）（前書き）

今回はこの作品のヒロイン的（？）存在のマアリが中心です。

ちなみにリュウガがヒワダタウンをでてから（8話）1日後の話し
です。

一応マアリは1話にでてきましたが、覚えていますかね：（一・一；
）

第9話：マアリストリー（マアリ視点）

ーテレビコトブキー

「はあ、やっと終わったわ」

私はマアリ、ピチピチの16歳です。今はシンオウ地方でアイドルやってます。

一応、1話で私のことがでしたが、あらためて説明します。

シンオウ地方で、『ポケモンウォッチ』略して『ポケッチ』を宣伝するために作られたアイドル、『ポケッチガールズ』として頑張ってます。

「まだ終わりじゃないわよ。まだ1つ、番組の収録が残っているわよ」

ロングヘアの女の人と言う。

この人の名前はリク。ポケッチガールズのリーダーで、冷静でとても頭がよく、仕事にとってもまじめな人である。ちなみに同い年です。

「私も疲れたあー、速く仕事終わらして、お風呂入りたーい！」
この人はアイカ。ファンの前では元気で可愛いキャラだけど、いつもはわがままで自己チューな性格である。つまり裏表が激しいキャラですね。この人も私と同い年。

「この収録が終われば、1週間……休みよ」
小説を読みながら私たちの会話にまぎってきた。

この子の名前はセシナ。普段はとても大人しいけど、ポケモンバトルのときはとても厳しい性格になる。年齢は私の2つ下で14歳である。

「リーちゃん、次の番組って何？」

ちなみにリクのことをリーちゃんとよんでいます。

「次は『バトルガールズ』よ」

「『ええ〜』」

私とアイカが同時に言う。

バトルガールズという番組は、私たちポケッチガールズとゲストがポケモンバトルをするだけなんだけどねえ……

「この番組やーだあー！」

アイカが大声叫ぶ。

確かにこの番組は好きではないわね。さっき言ったようにポケモンバトルするだけなんだけど……、ルールが酷いの。例えば私がポケモン1体で、相手は手持ち3体だったり……酷いときは、ポケモンの技を1つしか使ってはいけないっていうのもあるのよ……。私のポケモンが可哀想だわ……

「ハァ〜」

私はため息をする。

『もうすぐ移動してくださいさーい』
マネージャーさんが言った。

「移動するわよ」

リーちゃんがそう言う

「わかったわよ！」

アイカが大声で言う。顔の表情が少し怖い。

「わかった」

セシナが小説をもっていたカバンにいれ、小さく呟いた。

私達はとりあえず収録場所に移動する。

そして…

「戦闘不能、勝者セシナ！」

「くそおおお、負けたあ」

挑戦者の男の子の人が、両手をグーにして地面に叩く。相当悔しそうね。

挑戦者があんなに有利だったのに負けちゃったからね……。

「貴方…1対4で私とバトルして勝てないの？まだ私のポケモン元気よ」

「リーちゃん、相変わらずセシナちゃんは強いね」

私がそう言う

「私達の中で一番強いしね、当然だ」
腕を組んで冷静に言う。

ちなみに私達ポケッチガールズのメンバーは、みんなが各地方のポケモンリーグの本選出場者なんです。

私はジョウト地方のポケモンリーグでベスト8、リーダーのリーちゃんはカントー地方で3位、アイカはハウエン地方でベスト8、そしてセシナちゃんは14歳にしてシンオウ地方で準優勝の実力者です。

『これで最後です。エンディングに入りまーす』
スタッフが言った。

そして

「これから1週間の休日に入るけど、怪我だけはしないように」
マネージャーが心配そうに言う。

「わかりました」

4人同時に言う。

「それじゃ解散」

私達4人はテレビコトブキから出て、この街のホテルに泊まった。

そして

ーコトブキ空港ー

朝6時

私達は地元に戻ろとしている。私はジョウト地方へ、リーちゃんは

カントー地方へ、アイカはハウエン地方へ飛行機で帰る。

セシナちゃんは自分の家があるマサゴタウンに飛行タイプのポケモンに乗って帰るらしい。

「私、そろそろ行かなくっちゃ」

「ところであの『ポケモン』あげちゃうの？」

アイカが言う。

「確かに…野生では珍しい…ポケモンなのに」

セシナが小声で言う

「別にいいでしょ！」

「それはマアリの自由だけど、私が欲しかったー！」

アイカが大声で言う。ここは空港ですよ、そんな大声で言ったら記者にバレるよ。私たち一応有名人だよ。

「じゃあ…みんな1週間後ね」

「じゃあね」

とアイカが

「またな」

とリーちゃんが

「……………ね」

セシナちゃん！聞こえないよー！。

私はみんなと別れた。

―飛行機の中―

フツ、このポケモン…リュウガ気に入るかな？速くコガネシティにつかないかなー。

私は飛行機に乗って、自分の家があるコガネシティへ帰る。

第9話：マアリストリー（マアリ視点）（後書き）

次回はリュウガ中心に戻ります。

あともう少し話が進んだら『ゴウ編』も書きたいと思います。

第10話：デ…、デート？

―リュウガの家―

夜9時

「た…ただいま…」

やや疲れぎみの口調で言う。ちなみにヘルガーは、モンスターボー
ルにしまつてある

「おかえり、あら！？服汚れているわよ。どうしたの」。

母さんが驚いていている。確かに俺の服は汚れてるけど…：つかこ
れはヘルガーのせいなんだけどな。昨日の夜、ウバメの森に生息し
ている『スピアー』に喧嘩を売られて、ヘルガーがスピアーをボコ
ボコにしたせいで、仲間を呼ばれ、スピアーの集団に襲われたから
な。実際に服の汚れ以外に体に何カ所か怪我もしている。

「いや…ちょっといろいろあつて」

「いいわ、お風呂もわいているから入ってらっしゃい」

「わかった」

そう言う俺は服を洗濯機に突っ込み風呂場にいった。

そして：

風呂をあがりパジャマに着替え階段をのぼり自分の部屋へ行く。

「はあゝ（ため息）、風呂に入ったせいか傷がしみたなあ、ああい
てえ」

独り言を言う。

夜ご飯を食べに下（一階）に行こうとしたが、疲れのせいか眠たくなったので、ベッドにダイブしてそのまま寝てしまった。

―次の日―

午前11時ぐらい

ピンポーン

家のチャイムがなった。

「はいはい」

リュウガの母さんが玄関を開けると：

「あのーリュウガいますか？」

女の人がリュウガの母さんに言う。

「あら、久しぶりね。リュウちゃんならまだ寝てるわよ」

「わかりましたー、お邪魔しまーす」

すると：

「ヘルウウウ」

ヘルガーが女の人のところへ走ってきた。また勝手にモンスターボールからでたようだ。

「ヘルガー久しぶり、元気にしてた」

ヘルガーはその女の人になついているようだ。

「リュウガってまだ寝てる？」

質問をするとヘルガーが軽く顔を縦にふった。どうやらまだリュウガは寝ているみたいだ。

「じゃあ部屋に行こー」

ヘルガーと女の方は、なるべく音をたてないように静かに二階へへぼって行く。

そして…

「スー スー」

リュウガはまだ寝ている。

「おーい、起つきろー!」

女の方がリュウガの腹の当たりをバシバシと叩きまくる。

すると

「ああ…うるせえ」

やっと起きたようだ。

「おっはよー!」

「ああ…『マアリ』か…おやす…ZZZ」

「久しぶりの登場なのに…寝るなー! ヘルガー! リュウガの顔に噛みつく攻撃」

ガブウ

「いてえいでえー! わかったから起きるよ! (いてえ、何で顔面に

やるんだよ！そしてヘルガーよ……何故マアリの言うことをきくんだ！俺のポケモンだろ！」

とりあえずパジャマだったので私服に着替えた。（もちろん部屋からマアリを出して）

「んで何かよう」

「久しぶりに戻ってきたし、遊ぼう！」

「めんどくせえ」

「何でー？」

「届け屋の仕事してきて、昨日帰ってきたばかりだし」

「私だって昨日までアイドルの仕事してたわよ。やっと1週間休暇もらえたのになあ」

「がっかりしているようだ。しかし約1名（1体）凄い勢いで俺を睨にらんでる奴がいる。」

「そう…ヘルガーである。」

『何女の子を悲しませているんだよ』って言う感じで睨にらんでいる。

（こいつはどんだけ女好きなんだ！お前ポケモンだろ！しかも俺のポケモンだろ！なんでマアリの味方すんだよ）
「と言いたかったが、心の中で思うだけにした。」

「わかったよ、とりあえずどっか行こうぜ（このままだとヘルガーに襲われそうだしな）」

「じゃあ行こー」

切り替え速いな。

「じゃあ母さん、マアリと出かけてくる」

「フフツ、つまりデートってことね」

「何いってんだよ！ただ出かけるだけだ」

俺は少し慌てる。

「なーに、若い男女が2人で出かける㍿デートじゃない」

㍿（イコール）にするなよ、それにヘルガーも一緒に行くんだけど。

「私みたいな可愛い子とデートできるんだから感謝しなさいよ（笑）」

」

マアリ：悪ノリするなよ！

自分で可愛いって言うなよ！！

なんだよ！（笑） って！！！！

心の中で突っ込みまくる。

すると

「私も昔は『リュウドウ』さんと一緒に……………」

ハア：このままだと話しが終わりそうもないので母さんの話をスルーし、玄関に向かい靴を履き出かけた。

―コガネ百貨店―

「ヘルガー、一旦戻れ」

とりあえずヘルガーをモンスターボールに戻した。さすがにここで

出しっぱなしにするわけにはならないので。

「久しぶりね」

「少し前にゴウときたけどな」

「へえ、今はゴウどうなの？」

少し心配そうに言った。

「6つ目のバッジをゲットして、今は7つ目のバッジをとりチョコウジタウンに向かってる。多分もう着いてると思うけど詳しくはわからない」

「ふうん、そうなんだ」

「電話でもすれば？」

「気がむいたらするわ」

気がむいたらかよ。

「よし、まず服をいっぱい買うわよ」

「俺も服を買うか」

とりあえず服を売っている場所に移動した。

「うわぁーこれもいいなー、これ可愛いー」

マアリは目をキラキラにして、かなりの勢いで服を選んでいる。

「これにするか」

俺は紺色のジャケットを手を持ち：そして

「お会計8500円でーす」

俺は財布からぴったり8500円を出した。

「ありがとうございますー、またおこしくださいませー」

俺はすぐに服を選んだが：奴は：

「いいのがたくさんありすぎー、どうしよう」
まだ悩んでいやがる。

「まあいっかー、買っちゃおう」
自分が選んでいた服を全て買った。

この後、俺たちは腹が減っていた（俺は昨日の夜から食べていない）ので、コガネ百貨店の中にある飲食店でご飯を食べて腹いっぱいになり、とりあえずここからでようとしていた。

俺は今日も平和（？）な1日が終わるなーと思っていた。

しかし

「お、重い」

「そんなに買ったからだよ」

ちなみにマアリが買った服が入った袋が5つあり、俺自分の分を合わせて袋を3つもっている。つまりマアリのやつを2つもっている。

「やれやれめんどいな」

と小声で呟く

コガネ百貨店を出たとき……いきなり

「あれ？弱虫のリユウガ君じゃない？」
いきなり目の前にいた女の人がいった。

こいつに会ったことにより、この後…俺は、ヤバい状況に…。

第10話：デ…、デート？（後書き）

なるべくはやく更新したいのですが……いまはテスト期間中なので…。

あと、どーでもいいかもしれませんがリュウガが、ガントツにもらったボールを紹介します。

スピードボール

よく逃げるポケモンが捕まえやすくなる。

ベビーボール

体重が重ければ重いほど捕まえやすくなる

以上です。

第11話：過去

「あら？弱虫のリュウガ君じゃない？」

いきなり目の前にいた女の人が言った。

「お、お前は…」

リュウガは少し驚く。

「まさかうちの名前を忘れたわけないやろ」

女の人はコガネ弁で喋る。

「忘れるわけではない。コガネシティのジムリーダーの『アカネ』…」

冷静に答える

「あれ？アカネちゃん」

マアリが話に混ざってきた。

「あ、マアリ先輩、お久しぶりです。ところで何でコイツと一瞬に
いるんすか」

コイツって言うな！確かお前は14歳だろ！マアリだけじゃなく俺
にも敬語使えよ！

「買い物に付き合ってもらってるの。アカネちゃんはどうしたの？」

「うちは…ちょっと……道に迷ってんねん」

「「……………」」

シー————ン

一時の沈黙が流れた。リュウガとマアリは顔は呆れた表情になって

いる

「どんだけ方向音痴だよ。お前はここに何年住んでんだ」
やつとリュウガはアカネに突っ込んだ。

「別にええやろ、それよりリュウガ、ちゃんと『約束』は守ってんやろ」

「別に約束はしてない。賭けに負けたただけだ」

「あまり変わらないわよ…それは」

マアリが呆れながら言った。

「あの時は無様やったな。うちにジム戦で9回連続で負けて、また懲りずに挑んだ時………」

―1年4ヶ月前―

「あんたも懲りずにうちに挑むなあ」

アカネが言った。

「当たり前だ。お前に勝つまで諦めはしない。今日こそお前を倒してバッジをゲットする」

負けじとリュウガも言う。

「確かうちにジム戦を挑むの10度目やったな」

「確かにそうだが」

「正確に言うとな、ジムリーダーになる前も、うちとポケモンバトルして勝ったことないやろ」

「そ、それがとうした」

リュウガは慌てている。かなり痛いところを突かれた。

「もう終いにしようや。もし今やるバトルでうちに負けたら……そ

うやなあ、ポケモントレーナーを辞めろや」

アカネは突然とんでもないことを言った。

「ハア：アホかお前は」

リュウガはかなり呆れている。

「正直言ってな、才能ないんじゃない？ いままで一度もうちに勝ってないしな。これは親切で言うてんねん」

「何が親切だよ、迷惑だ」

「わかったわ、ならもしリュウガがうちに勝てたら、うちはジムリーダーを辞めるわ」

「興味ないね、それにお前：正気か？」

冷静に言い返す。

「正気や！ それにうちはお前に勝つ自信が……ってちょっと待ってや」

リュウガはバトルフィールドにある扉を開け帰ろうとしていた。

「そんな賭けにはのるつもりはない！ また明日くる」

リュウガが帰ろうとしたとき

「逃げるの？」

アカネはリュウガに挑発をする。

「挑発のつもりか？ もう一度言う。そんな賭けにはのるつもりはない」

「弱いから仕方ないやな」

さらに挑発をする。

「……………」

リュウガは無言でアカネを少しの間睨み付けた後、今度こそ帰ろうとしていた。

「まあトレーナーが弱いなら、パートナーのポケモンも当然弱いよね」

すると…

「おい！それ以上言うな」

帰ろうとしていたリュウガが突然振り向き、アカネに怒鳴る。

「もっと言うと、あなたのポケモンは雑魚……」

すると

「デルウウウ！！」

突然リュウガのモンスターボールからデルビルが出てきた。
ちなみにこの時はまだヘルガーの進化前のデルビルだった。

どうやらボールの中で話を聞いてたらしい。バカにされたせいかなんかなり怒っている。やっぱり悔しいのだろう。

「勝負してやるよ。確かに俺らはまだまだ弱いかもしれない…、
けど俺のポケモンをバカにしたことは許さねえ。それに俺はこいつ
らを信じている。ポケモンの信頼なら誰にも負けない！」

「やっとやる気になったやな。今言うたこと覚えてるよな」

「覚えているよ。その賭けに絶対に勝ってやる」

「ただどうちに勝つことはできへんかったな」

「……………」

今でも俺はあの事を鮮明に覚えている。あの時悔しさと同時にトレーナーとして自信もなくしてしまった。俺は拳をグーにして力をいれている。正直今でもあの事を悔やんでる。

「リュウガ…」

悔しがっているリュウガを見てマアリが声をかける。

すると突然

「なんなら、最後のチャンスをやるか？勝負してあげる？」
いきなりアカネがそう言ってきた。

「勝負するつもりはない。あの時は賭けで負けたからポケモントレーナーを辞めたが、今はそうはおもっていない。あんな賭けに負けようがいつでもポケモントレーナーに戻れからな。それにその挑発にはのら……」

「勝負するわよ！リュウガ」

いきなりマアリが言ってきた。

「勝手に言うなよ！」

「だって悔しくないの！」

マアリが怒鳴る。

「だけど…」

すると

「そしたらもしうちに勝ったら1つだけ言うことをきいてあげるわよ」

アカネがそう言う。

「わかった、勝負してやる」

「じゃあうちが勝ったら……そうやな……確かりュウガは今届け屋やってたよな？」

「そうだが、それがとうした？」

「簡単な話しや、うちが勝ったら届け屋を辞めてもらうわ」

「ええ!？」

リュウガは驚く。

「やらへんの？」

「上等だ! やってやる」

「わかったわ、3日後ジムでバトルするわよ。まあバトルするだけ無駄やと思うけど…、ほなさいなら」

アカネは何処かへ言ってしまった。

「いいのリュウガ？」

「お前が言ったんだろ。それにあの過去と決着をつけたいしな。それにマアリ…お願いがある」

「何？」

「ポケモン達を今まで以上に強くしたいから手伝ってくれないか？正直言って頼むのは好きじゃないがそう言ってもらえないしな。」

「あつたり前じゃなくいい!…あつそうだこれ」

マアリは俺にモンスターボールを差し出してきた。

「これは？」

「前言ったじゃなくいい、水ポケモン欲しいって」

「そういえば言っていたような」

俺は正直あまり覚えていないけど、でも今は戦力が1つ増えるから嬉しい限りだ。

「よし! 今から修業するわよ」

「その前にこの荷物（服）なんとかしろよ」

「あ、忘れてた。それじゃあいったん家に戻るわ。リュウガは？」

「俺も家に帰って準備する」

「わかったわ、じゃあ準備できしだいウバメの森に集合ね」

「わかった」

俺はいったんマアリと別れ家にもどる。

そういやアイツ…方向音痴だけど大丈夫か？

その頃アカネは…

「ここどこや〜」

やっぱり道に迷っていた。

第11話：過去（後書き）

アカネの性格をゲームとアニメを足して2でわったものにしようと思いました。が、微妙ですね。

第12話…コガネジムへ

―ウバメの森付近―

「遅いぞ」

「リュウガが速すぎなのよ！それでどんなふうにするの」
マアリはリュウガに質問する。

「まずは実戦に近い感じでポケモンバトルをしたい。なるべくは同じタイプのポケモンがいい。それにマアリのポケモンのほうがレベルが上だし、そのほうが俺のポケモン達も良く育つしな」

「OK」

「後1ついいか？」

「なに？」

「ヘルガーや他のポケモン達に新しい技も覚えさせたいんだけどどうだ？」

「ん…確かに新しい技は覚えさせたほうがいいわね。どうせ前にアカネちゃんとバトルして負けて以来、ポケモン育ててないでしょ」

「う……………」

リュウガは苦い表情になる。

「凶星ね」

「うるせえ」

リュウガは少し慌てる。

「それより私があげたポケモンって使うの？」

「もちろんだ！だから3日でアカネのポケモンと互角ぐらいの力にする」

「いや…3日じゃさすがに無理でしょ…」

マアリはリュウガに聞こえないように呟いたが

「なんか言ったか？」

「な、なんでもないわよ、それよりコガネジムって3VS3だよな。」

私があげたポケモンは使うとして他の2体は何にするの」

ちなみにマアリはリュウガの手持ちのポケモンは全部知っている。

「ヘルガーとネイティを出そうと思う」

「……………」

その一言あとマアリは目を瞑り、腕を組み何かを考えているようだ。

そして

「本当にいいの？ 実力やポケモンとの信頼関係を考えれば私のあげたポケモンより、絶対にオオタチを使ったほうが確実よ」

マアリが真剣な表情で言った。

確かにそうである。実力やポケモンとの信頼関係だけじゃない、ほとんど全てにおいてオオタチのほうが確実に上と言える。マアリはあまり納得がいかない様子だ。

しばらく沈黙が流れ、リュウガが口を開けた：そして放った言葉は「確かにオオタチを使ったほうが確実だ。だけどそれだけでは多分勝てない。アイツは……アカネは確実に俺のポケモンを研究している。だからマアリにもらったポケモンならアカネはこのポケモンについては研究してないし、うまく対応できないはずだ」

確かにリュウガが言うことにも一理ある。

でもそれは正直いってあぶないのだ。このもらったポケモンは一度

もバトルで使っていないし、多分オオタチよりレベルが低い。ある意味ギャンブルに近い。

「本当にそれでいいの？」

マアリは真剣に言う。

「ああ、それにお前が捕まえたポケモンを使うんだ。少しは信頼しろよ」

リュウガがそう言うのとマアリが微笑みそして…

「まったく…自慢じゃないけどジョウトのポケモンリーグベスト8の可愛い女の子のアドバイスを無視しちゃうし…でもそのほうがリュウガらしいわ。私も協力するから絶対にアカネちゃんに勝つてよ」

「当たり前だ！絶対勝ってやる！（そして自分で可愛いって言うんじゃないよ）」

と心の中で叫んだ。

そして

「まずヘルガーからやるか」

「ヘルウウウ！！」

ちなみにはヘルガーは俺とマアリの会話を黙って聞いてた。別にモンスターボールにしまってたわけではない。

「いくわよ！マグマラシ」

ボールからマグマラシがでてきた。

ちなみにマグマラシはジョウト地方で最初にもらえる（御三家）、ヒノアラシというポケモンの進化形である

「いくわよヒノアラシ火炎放射」

マグマラシは口から火炎放射をだす。
「ヘルガー、こっちも火炎放射！」

ポケモンバトルで経験値^{レベル}を上げる



新しい技の習得

この繰り返しで3日修業した。

そのおかげでヘルガーとネイティはかなり育ってさらにヘルガーは2つ、ネイティも2つ新しい技を覚えた。

さらに新しいポケモンも上手くバトルできるようになった。

オオタチは……ジム戦には出さないのであまり育ててはいない。

――コガネジム玄関前――

俺とヘルガーとマアリは今コガネジムの前にいる。

俺は今：1年4ヶ月前のアカネとバトルした時を思いだしていた。

アカネに挑発され：

そしてバトルを挑み

アカネと俺のポケモンが1体ずつになった。俺は最後のポケモン、デルビルを出した。

しかしアカネの最後のポケモン『ミルタンク』にボコボコにやられ、立つので精一杯だったデルビルを見て俺は：

「頑張るんだ！まだ俺も諦めていない！まだまだ勝機はある。だから諦めるな！！」

と大声でデルビルに言った。

「もうデルビルは限界や、これで終わりやミルタンク！転がる！」
アカネそう言う突然：

「デルウウウウ！！」

デルビルがおもいつきり叫ぶ。

するとデルビルが光に包まれた。そしてデルビルの体が大きくなり
そして

「ヘルウウウウ！！」

デルビルはヘルガーに進化した。リュウガの強き『想い』がデルビル：いやヘルガーに届いたのだろう。

「何！？」

アカネは驚く。

「ヘルガー！フルパワーで火炎放射！！」

ヘルガーの火炎放射とミルタンの転がるがぶつかった。

そして徐々にヘルガーの火炎放射は押していきミルタンを吹っ飛ばした。

「とどめだ！火炎放射！」

火炎放射が吹っ飛ばされ倒れているミルタンに直撃した。

この時点で俺は勝ったと思った。

しかしミルタンはなんと耐えていた。

「残念やな『こらえる』を使ったんや」

こらえる：攻撃を受けてもHPを1残して耐えてしまう技。ただし連続で使うと失敗しやすい。

「くそう…」

俺がそう言った瞬間ヘルガーが倒れてしまった。もう本当に限界だったんだ。

『ヘルガー戦闘不能。よって勝者ジムリーダーアカネ』

「惜しかったけど負けは負けや！トレーナーを辞めてもらうで」

「ヘルガー……くそおおお！！」

ジム内にリュウガの声が響いた。

このバトルに絶対勝って、そして過去に決着をつける。

「リュウガ行くよー、私も精一杯アドバイスするから絶対勝つよー！」

マアリが元気良く言った。

「ヘルルウ！」

こいつ『勝つぞ』とでも言ってるのか？

「それじゃ行くぞ」

俺はコガネジムの扉を開けた。

第13話..挑発対決?リュウガVSアカネ(前書き)

リュウガ「なんかポケモンバトル多いな、届け屋の仕事も書けよ」

天の声「それは作者の実力がないんだよ」

リュウガ「お前作者だろ」

天の声「違う!!私に神だ」

マアリ「それは置いといて、13話はじまりはじまりー」

第13話：挑発対決？リュウガVSアカネ

俺達はとりあえず扉を開き中へ入った。

すると

「リュウガさんですか？」

近くにいた女の人が言った。

「そうだが」

「アカネさんがお待ちしているバトルフィールドへご案内します。ついてきてください」

女の人がそう言って、歩きだした。このジム：コガネジム内は女の人しかない。正直ジム内には女の人しかないのだから……ものすごい違和感(?)があるな：何度きても慣れねえな。

バトルフィールドのほうへ移動中

「バトルの対策考えてる？」

マアリが心配そうに言う。

「もちろん考えてるに決まってるだろ」

「ふーん、本当に？昔は何も考えないで行動してたでしょ！何か心配で」

「何年前の話だよ！（つかどんな心配だよ）」

と心の中と思う。

「じゃあ何？」

なんかウゼエな…。

「対策というより戦法だが、相手は格上だ。だから、頭で奇策を考えて相手を混乱させようと思っている」

「奇策って……ていうかだいたい誰でも思いつくわよ」

マアリが呆れた表情になる。

こんな話をしているうちにバトルフィールドについた

そして

「よく逃げずにきたわね。その勇気だけは誉めてあげるわ」
相変わらずアカネが挑発してきた。

ものすごくウゼエ、ウザさだったらマアリ以上だな。

「話はそれだけか？」

リュウガは心の中では呆れながらも表情にださず、冷静に言い返す。

「まあそれだけや、ほな始めようか。マキちゃん審判お願い」

『はい』

マキちゃん(?)らしき人物がこっちに來て審判台にたった。

「えーっと、これよりチャレンジャーリュウガVSジムリーダーアカネのジム戦をは…、はじめた…はじめますう…」

「大丈夫かこの審判」

リュウガは小声で呟く。なんかとてつもなく心配だ。ちゃんと審判の資格持つてるのか？

「使用ポケモンは3体です。なおポケモンの交代はチャレンジャーのみ…です」

「よく言えたわねーマキちゃん」

「は、はい」

「なんか心配だなあ」

マアリも心配そうに言う。くどいようだけど本当に心配だ。だけどバトルに集中しねえとな。

「それでは試合開始！」

審判が言うと同時に

「いけヘルガー」

最初からリュウガの切り札と言えるポケモンをバトルフィールドに向かわせた。

一方相手はボールからピッピを出した。外見はとても可愛らしいポケモンである。

「先攻は俺だヘルガー！」

するとヘルガーは突然かなり驚いた表情になり天井のほうを向いた。

「何？何や？？」

「ピィ？」

いきなりのことなのでアカネとピッピも当然天井のほうを向いた。

するとそこには…

何もない…

「何もないやねん！」

アカネが大声で叫んだ瞬間、ピッピがヘルガーの攻撃をくらって吹っ飛ばされた。

とりあえずピッピは体勢を立て直す。

「何や！卑怯や」

アカネはリュウガに怒鳴る。

「誰が卑怯だ！ただ『騙し討ち』を使っただけだよ」

これがヘルガーの新しい技の1つである。

騙し討ちは相手に近づき油断した隙をみて攻撃する技であるが……
今のは騙し討ちと言えるのだろうか？

「騙し討ちはこんな技じゃないわよ……普通は」

マアリがリュウガに向かって言う。

「細かいことは気にするな」

そこは気にする部分だが……でも充分な不意打ちだ。アカネは歯をくいしばり、顔を赤くしている。多分相当怒っているみたいだ

「もう怒った！ピッピ！コメントパンチや」

「戻れヘルガー」

ヘルガーはリュウガのほうへ戻っていく。この微妙なタイミングで戻したが、そのせいでアカネはさらに怒っている様子だ。

「なんで戻すねん！！」

かなり大声で叫ぶ。

「これも戦略のうちだ。それに『ポケモンの交代はチャレンジャーのみ』って言っただろ」

アカネにおいうちをかけるように挑発する。

「リュウガ、いくらなんでも言いすぎよ！」

マアリが言った。

確かに言いすぎたかもな。

ヘルガーを戻したのでモンスターボールをとりだしボールを投げ、ネイティを出した。

「バ、バトル再開」

「ピッピ！メロメロや」

ピッピはネイティに向かって投げキッスをしたが、ネイティに特に異常はない。

ちなみにピッピは♀でネイティも♀なので効果はない。

「何や！ネイティは♀なのかい！？」

「そうだよネイティ、念力だ」

「ちいさくなる」

ピッピはちいさくなるを使って回避した。

つかちいさすぎてどこに行ったかわからない。

「コメットパンチや」

ネイティはどこらやったかわからないコメットパンチを、普通にくらってしまった。ちいさくなくても技の威力は変わらないみたいだ。

正直かなりヤベェな。

どこにいやる

「コメットパンチや」

「サイコキネシスで自分の周りを吹き飛ばせ」

ネイティの新しい技の1つである。

多分サイコキネシスで吹き飛ばしたおかげか、ちいさくなったピッピが元の状態に戻った。

「こうなったら指をふるや！」

「何!？」

指をふるは、全ての技の中から1つだけくりだす…いわゆるギャンブル技だ。

「ネイティ念力で止めろ」

「もう遅い」

アカネがそう言うともう技が発動してしまった。

するとネイティは突然動かなくなった…いや痺れてうまく動けないみたいだ。どうやら電磁波が発動したみたいだ。

「とどめや!コメットパンチ」

しかしピッピが技をやろうとしない…いや痺れていてうまく動けないのだ。ネイティの特性の『シンクロ』が発動したのだ。

シンクロのおかげで、相手も麻痺の状態になったのだ。

「だけどあんたのネイティも麻痺状態や。同じ条件や」

確かにそうだが

「リフレッシュだ」

ネイティの新しい技の最後の1つである。

リフレッシュは自分がおっている麻痺、火傷、毒の異常状態を治す技である。当然麻痺も治ってしまう。

「とどめだ!サイコキネシス」

「光の壁でガードして」

しかし麻痺のせいで体が痺れて技がだせない。そのままサイコキネ

シスでジムの壁におもいつきりぶつけた。
ピッピは目を回して気絶している。

「ピッピ、戦闘不能…です」

「やったねーリュウガ、だけどまだ油断しちゃ駄目よ」

「当たり前だ（まだ奴の切り札のミルタンクが残ってるしな）」

「まだや！まだバトルは始まったばかりや」

「そうだな」

確かにまだ油断はできなねえな。

第13話..挑発対決? リュウガVSアカネ(後書き)

えーっと……これが終わったら届け屋の仕事を中心に書きたいです。

とりあえず後編に続く。

第14話：新しいポケモン登場！そして決着へ！！（前書き）

天の声「ハハハハハ！！この小説など我の力を使ってぶっこわし…」

リュウガ「ヘルガー、そいつに噛みつく攻撃」

ヘルガー「ヘルウウウウウ！！」

天の声「ギイヤアアアア！！」

マアリ「すいません。もう『前書き』でこんなことをさせないよう
にします。それでは14話はじめます」

第14話：新しいポケモン登場！そして決着へ！！

「ピッピ、ご苦労様」

アカネは目を回して気絶しているピッピをボールに戻した。

「ネイティ、まだやれるか？」

リュウガはネイティにそう言うがネイティは反応しない。

ネイティは何もないところを見ている？ いや何か別のものを見ているのか？ その様子を見ると他の人には見えてない『何か』を見ているようにも見える……。

するとネイティは目眩がしたのかふらふらしはじめた。

俺はネイティに近寄り

「大丈夫か？ ボールの中で休んでいてくれ」

そう言いネイティをボールに戻した。

「ピッピのコメントパンチが相当きいたみたいね、それと……」

「それと…何だ？」

リュウガはマアリに言う。

「今リュウガが声をかけたときネイティが反応しなかったじゃない。私にはこの先の未来を見てたように見えたの」

「未来を？」

「予想だけだね」

「予想かよ（まあもし未来を見てたらこのバトルの勝敗もわかってるんだろうな）」

「あの…試合再開したいんですけどおマキちゃん」
審判が困った表情でリュウガに言ってきた。

「すまない、再開していいぞ」

「は、はい…バトル再開です」

「なら私はこのポケモンよ」

アカネはおもいつきりボールを投げた。ボールからはリングマというポケモンを出した。かなり凶暴そうだ。

「このリングマはミルタンクと同じぐらいの実力や。リングマに勝てきゃミルタンクにもかなえへんよ」

アカネは腕をくみ自信満々に言った。相当自信があるようだ。

「本当はここで出したくなかったけどしかたねえ。ヘルガー出番だ」
ヘルガーをバトルフィールドへ送る。

「リュウガ、気をつけて。リングマはかなりの攻撃力をもっているわ。ヘルガーは防御力が低いからなるべく攻撃があたらないようにして」

マアリはリュウガに向かってアドバイスをする

「わかってるよ。ヘルガー！火炎放射」

「リングマ避けて」

ヘルガーの火炎放射を簡単に避けた。なかなかスピードがありそう
だ。

「火炎放射を連発だ」

「ヘルガーに接近しながら避けて」

しかし火炎放射を連発するも、難なく避けていく。そしてヘルガーの近づいた。

「きりさくや」

「避ける！」

しかしヘルガーは完全には避けられず攻撃がかすってしまったが、その代わり相手に隙ができた。

「そのままリングマに噛みつく攻撃」

ヘルガーはリングマの右腕を噛みついた。その後右腕を噛みついたまま自分より体重が重いリングマを投げ飛ばした。しかしまだリングマは元気そうだ。

「リングマ捨て身タツクルや」

リングマはおもいきり突っ込んできた。

「火炎放射だ」

しかしリングマはヘルガーの火炎放射をくらいながら無理矢理突っ込んでくる。

「くそ：無理矢理かよ」

リュウガは小声で呟く。

「そのままきりさく」

「避ける！」

しかし避けられずヘルガーは攻撃をくらい、吹っ飛んでしまった。「くそ、モロにはくらってないがきりさくの威力がアップしやがった」

「火炎放射をあたりながら捨て身タツクルをしたせいで火傷状態になって、リングマの特性『根性』が発動したみたいね」
マアリが冷静に言う。

根性は異常状態のとき攻撃力が上がる効果がある。

これは厄介だな。しかもヘルガーもかなりのダメージをくらったしな。

「これでどうや！影分身から捨て身タツクルや」

かなりの数のリングマがヘルガーに向かって突っ込んできた。

「どうや、たとえば本物がわかってても火炎放射じゃ私のリングマは止められへん」

くそ：確かに火炎放射じゃ止められねえ。ハア：本当はミルタンクに『あの技』を使いたかったが仕方ねえ。

「ヘルガー、かぎわける」

これで本物は分かる。

「リュウガー！ いまだよー」

マアリはリュウガに向かって言った

「わかってるよ！ くらいやがれ！ オーバーヒートだ！！」

「何！？」

かぎわけるのおかげで、本物にオーバーヒートをくらわした。

「グマアアアア！！」

リングマは苦しそうに叫ぶ。

オーバーヒートは火炎放射よりかなり強力な技だが、特殊攻撃が下がるので連発はできない。

火炎放射より強力なオーバーヒートをくらったリングマは、オーバーヒートの勢いに負け吹っ飛んで

そして

ズガアアアアアン

壁におもいっきりぶつかった。

リングマは目を回し気絶している。

「えーっと、リングマ戦闘不能…です」

「ご苦労様や」

アカネはリングマを戻した。

「さすがに疲れただろ。戻れ」

ヘルガーをリュウガのほうに戻っていく。

「まあ手持ちは1体しかないがヘルガーもネイティもかなりのダメージを受けたはずや、それに最後のポケモンはオオタチやろ？」
前ならそうだが残念ながら今は違う！

「いけえミルタンク！」

アカネは最後のポケモンミルタンクをだした。

「出番だ！」

リュウガはボールを投げた。中からはペンギンポケモンのポッタイシをだした。

ポッタイシはシンオウ地方の初心者用のポケモンの3匹のうちのポツチャマというポケモンの進化形である。

「ポッタイシだと」

オオタチ以外のポケモンをだすなんて予想をしてなかったか、アカネは相当驚いている。

「俺の新しいポケモンだ。まさかオオタチ以外出すとは思っていなかっただろ」

「少し驚いたけどうちには勝てへん。ミルタンク！転がるや！」

ミルタンクはポッタイシのほうへ転がっていく。

「アクアジェットだ」

ポッタイシは水にまとい、かなりのスピードでミルタンクにぶつかっていった。しかしミルタンクのほうがパワーが強いためポッタイ

シは吹っ飛んでしまった。

ポッターシはすぐに体勢を立て直すが、転がるを使っているミルタンクがかなりのスピードでこっちにきた。転がるはターンごとに威力がアップしていく技なのでとても厄介だ。

「アクアジェットで上に避ける」

アクアジェットの勢いを使ってなんとか空中に逃げたが

「着地するところに転がる攻撃」

ヤベェな…こうなったら

「ポッターシ、れいとうビーム」

れいとうビームがミルタンクにあたり、体が徐々に凍ってきた。

ちなみに【2話】で地下商店で買った技マシン13を使いポッターシに『れいとうビーム』を覚えさせた。

「ミルタンク転がるをやめて、いったん離れて」

しかしその時にはもう遅くミルタンク完全に凍りついた。

すると

「おいアカネ、何でいままで俺に勝ててたか考えたことあるか？」
いきなりリュウガがアカネに言った。

「えっ！？そんなの…ん」

アカネは腕を組み必死に考えている。

「教えてやる、ミルタンクの転がるのパワーとスピードに対処することができなかったからだ」

「何!？」

「そういうことだ、ポッターシ、アクアジェットだ！」

ミルタンクにアクアジェットをくらわすがミルタンクはほとんど吹っ飛んでいない。

くそ、ミルタンクは想像以上に体重が重いな。

「うちのミルタンクはほとんどダメージをくらってなさそうやな、氷がとけるのも時間の問題やで」

くそ、こうなったら

「アクアジェットだ！そしてドリルくちばし！」

ポッターシがアクアジェットで水にまとい、かなりのスピードをつけ、ドリルくちばしをした。アクアジェットにドリルくちばしの体の回転を加えることによって通常のアクアジェットやドリルくちばしより、威力を数倍にする。あの修行をしていた3日で完成させたポッターシの超必殺技、その名も……

「いっけえー『ドリルアクアジェット』よー！」

マアリがおもいっきり叫ぶ。ちなみにこの技はマアリが名付けたのでネーミングが微妙だ。

ミルタンクにこの技があたった衝撃で氷状態は治ってしまったがミルタンクを吹っ飛ばした。しかしまだミルタンクは倒れない。

「なかなかやるわねえ。これならどうや、ミルクのみで回復や」

ミルクのみは自分の体力を回復させる技だ。

「させるか！渦潮だ！」

ミルクのみをしていたので簡単に渦潮が命中し、ミルタンクを渦潮の中に閉じこめた。

ミルタンクはあまり回復ができなかったはずだ。

「くらえ！ドリルアクアジェット！」

ポッターシがミルタンクにおもいっきり突っ込む。

渦潮の中に閉じこめたから身動きは出来ないはずだが

しかし

「ミルタンク！その技を受け止めて」

なんとあのドリルアクアジェットを受け止めてしまった。

アイツ：どんだけパワーあるんだ！？

「ポッタイシ逃げろ！」

リュウガは大声で叫ぶが

「逃がさへんや！アームハンマーや」

ミルタンクは自分の重い拳をふるってポッタイシに攻撃した。ポッタイシは目を回して気絶している。

「ポッタイシ：戦闘不能です」

ここで始めてリュウガのポケモンが戦闘不能になった。やはりポッタイシじゃ3日間修行しただけじゃミルタンクには勝てるほどあくはなかった。

「ボールでゆっくり休んでいろ、ポッタイシ」

ポッタイシをボールの中に戻した。今まではリュウガのほうに流れがあったが今ので流れが少し変わったかもしれない。

「大丈夫よ、相手は後1体だしまだリュウガのほうが有利よ」

マアリがリュウガを励まそうとする。

「当たり前だ！まだ手持ちは2体残ってんだからな。それにミルタンクにも結構ダメージを与えたつもりだ」

「それはどうかな？まだミルタンクはピンピンしてるよ」

いちいち人の話しに首突っ込んでくんないよ！

「ネイティ出てこい」

ボールからネイティをだした。ボールの中で休んでいたので、少し

は回復してるだろう。

「ミルタンク転がる！」

相変わらず転がるばかりやってくる。

「ネイティ、サイコキネシスだ」

しかしサイコキネシスが発動しない。

「くそ、発動しねえ！」

「まだ使いこなしてないみたいやな（助かった〜）」

アカネはそう言いつつ、本心を心の中で言う。

ネイティはサイコキネシスに使いこなせるレベルにはいたってない
せいか、修行中でも2、3回しか発動しなかったからな。念力じゃ
ミルタンクのパワーが強すぎて動きをとめられねえし

「飛んでよけろ」

ネイティは空をとび回避したかにみえたが

「転がるをしながらジャンプして」

なんと転がりながらジャンプしたのだ。

「そのままネイティに転がるや」

「レポートで逃げろ」

しかしレポートが発動する前にミルタンクの転がるが命中しネイ
ティは吹っ飛んでしまった。

ネイティは目を回している。

「ネイティ戦闘不能……です」

とりあえずネイティをボールに戻す。

「最後のポケモンか……いけヘルガー」

リュウガは最後のポケモンであるヘルガーをバトルフィールドに送
る。

「これでお互い最後のポケモンやな」

「これで決着をつける」

「いくよミルタンク！ 転がるや」

「火炎放射だ」

火炎放射と転がるがぶつかりあった、しかし火炎放射が若干押されている。

「くそ：あの時は火炎放射のほうを押してんだけどな」

リュウガは悔しそうに言う。

「そのまま転がるや」

「こうなったら賭けだがしかたねえ、ガードしてダメージを最小限におさえろ！」

ミルタンクの転がるがヘルガーに命中してしまった。しかしリュウガはある賭けにでた。

「ヘルガー今だ！ ミルタンクの口の中にスモッグだ！」

なんとヘルガーはミルタンクの転がるのダメージを耐えたのだ。

ミルタンクの転がる攻撃が終わる隙を見てスモッグを放ったのだ。スモッグは相手にガスをふきつけて攻撃する技である。ちなみにヘルガーがもともと覚えてた技である。

「ミルタンク！ いったんそこから逃げて！」

ミルタンクはそのまま逃げようとしたが

「逃がすか！ オーバーヒートだ」

ヘルガーはオーバーヒートをミルタンクにくらわし、ミルタンクを吹っ飛ばした。しかしミルタンクは耐えていた。

「こらえるを使っただんや。どうやら結果は前と同じようやな」

アカネが勝利を確信したのか、少し笑みをこぼしながら言った。

ヘルガーは4本の足をぶるぶる震わせながら立っている。もう限界を超え気力で立っているようにみえる。

「とどめや！ ヘルガーに起死回生や」

起死回生は自分の体力が少なければ少ないほど相手に大ダメージを与える技だ。

しかしミルタンクがヘルガーのほうへ行こうとした瞬間

バタッ

いきなりミルタンクが倒れてしまった。

「ミルタンク戦闘不能…です。よって勝者はチャレンジャーリユウガ…です」

審判がそう言う

「よし！」

リユウガはちいさくガッツポーズをした。

「やったねーリユウガ！」

マアリも自分のことのように喜んでいる。

すると

力が抜けたのかヘルガーが倒れてしまった。

俺とマアリはヘルガーのところへ駆けつけたが、見たところ大丈夫みたいな素振りを見せているので少し安心した。

「なんでうちが負けたんや」

悔しいのか、めっちゃめっちゃ声がふるえている。今にも泣きそうな表情をしている。

「それは…」

「私が説明するー」

マアリがいきなり言ってきた。

「大丈夫か？」

「大丈夫！」

「じゃあなんで、うちのミルタンクの転がるを耐えられたんや！」
アカネは少し怒鳴るように言う。

「ミルタンクの転がるを耐えた理由は最小限にダメージをおさえたというのもあるけど、最大の理由はヘルガーに『ヨロギの実』を持たせていたからよ」

ヨロギの実持たせると効果抜群の岩タイプの技を受けたときダメージを半減させることができる効果がある。
ちなみに転がるは岩タイプの技である。

「最後にこらえるを使ったのに倒れてしまった理由は…」

「マアリ先輩…それくらいはうちでもわかるや。こうみえても一応ジムリーダー…やからな。」

理由はヘルガーのスモッグをくらって毒状態になったんや、そうやろ」

アカネの声がさっきよりふるえている。

「そうだよ、あとこのバトルは俺の勝ちだ。約束どおり何でもいうことをき……」

「わーんー!! (泣) ……ぐっすん…ひっぐ………酷いよー!! ……ぐす………」

アカネはその場で泣いてしまった。

「マアリ……俺なんかしたか？」

リュウガは罪悪感(?) みたいなものがあるのか、少し汗をたらし慌てながら言う。

「ただバトルに負けたから泣いちゃったんじゃないかな? アカネちゃん結構負けず嫌いだし…」

「あのー」

さっきまで審判をやっていたマキちゃんが声をかけてきた。

「こうなったらもうダメですので……また明日きてください……です」
(また明日くるのかよ)
と心の中で思った。

とりあえず俺とマアリはコガネジムを出てポケモンセンターへ向かっている。

もちろんポケモン達を回復させるためである。

「ああ、なんか疲れたぜ」

リュウガは疲れたせいかもしれない。いつもより声が低い。

「まあいいじゃない！アカネちゃんに勝てたんだから」

「そうだけど……この後が厄介なんだよ」

リュウガは小声で言う

「何？」

「何でもねえよ（アカネの野郎に勝ったのは嬉しいんだけど、『3日間修行に付き合うんだから残り4日間は遊びに付き合う』なんて約束しなきゃ良かった……ハア……）」
と心の中で思う。

アカネに勝って嬉しいが、マアリと約束をしたのを後悔しながら、ポケモンセンターへ向かっていく。

第14話：新しいポケモン登場！そして決着へ！！（後書き）

『ドリルアクアジェット』は、アニメのポケットモンスターダイヤモンド&パールにでてくるブイゼルの『氷のアクアジェット』を少しパクリました（一・一；）

つかアカネのキャラが本当に微妙になってしまいましたね。どうしよう。

第15話：親父登場！新たな仲間、そしてアカネのもとへ……（前書き）

リュウガ「更新が遅れているな」

マアリ「それは作者が忙しかったからじゃない？」

リュウガ「本当か？このままだと更新されないんじゃない？」

マアリ「あり得るわね。まあとりあえず15話、はじまりまーす」

第15話：親父登場！新たな仲間、そしてアカネのもとへ……

ーポケモンセンターー

俺達はポケモンセンターにいる。もちろん傷ついたポケモンを回復させるためにきている。

「まだか？」

「結構傷ついたからね。まだでしょ」

マアリが言った。ポケモンセンターにきて1時間ぐらいがたつ。

すると

「あのーリュウガさーん。ポケモンが回復しましたので来てくださーい」

ジョーイさんが言った。

この人は簡単に言うとかポケモン専門の医者である。ジョーイさんはいろんな町のポケモンセンターにいるが……全員が同じ顔である。親戚らしいのだが……似すぎだろ！影分身でも使ってたのか？

俺はモンスターボールを受け取りポケモンセンターを出て、自分の家に帰る。途中でマアリと別れた。ちなみにマアリの家は、俺の家から歩いて3分ぐらいでつく場所にある。

「ただいま」

俺はそう言った後、母さんがいるであろう台所にいく。しかし意外な人物がいたのだ。俺は化け物でもでたかのように驚く。

「お、親父!？」

「おうリュウガか？3ヶ月ぶりだなあ。元気にしてたかあ！ああ！」

この人は口は悪いが俺の親父だ。一応【10話】でチラっと名前はでてきたが紹介しよう。この人の名前は『リュウドウ』。

凄く犯罪者(?)みたいな顔をしているが、別に悪人ではない。母さんいわく、『ダンディーなおじさま』らしい。

職業は……何故か教えてくれない。

いろんな地方を旅してまわってるらしい。昔はポケモントレーナーをやっていたらしい。一応給料は貰ってはいるようでニートではない。

「ちなみに好きなことは人より目立つこと！よろしく！」

「親父、勝手に入ってくんなよ！読者に説明してんだから」

「別にいいだろ！なあマドカ」

マドカとは母さんの名前である。

「フツ、そうねリュウドウさん」

まあ別にいいか。

「ああそうだ、リュウガこっち来い！」

俺は親父のほうへ向かう。するとモンスターボールを差し出してきた。

「これは？」

「どう見てもモンスターボールだろうが！」

それくらいはわかるわ！

「なんのポケモンが入ってんだ？」

「それはお楽しみってやつだ！なんなら外にいった（ポケモンを）出してこい」

「わかった」

そう言い俺は家からでて、庭に行く。

「よし、出てこい」

俺はモンスターボールを投げた。

そして出てきたのは……

『バーカ』と書いてある紙だ。

「…………くそ！あの親父！！」

悔しそうにそう言い、俺は家にいる親父のところへ走っていく

そして

「ハハハハア！引っ掛かった！引っ掛かったぜ！」

親父……いやこの糞親父は腹をかかえて大笑いをする。

「騙しやがったな！出てこいヘルガー！！その糞親父に噛みつく攻撃！！」

モンスターボールを投げてヘルガーをだした。

「ヘルウウウウ！！」

ガブッ

「ギィヤアアアアアアア！！いでえええ！！」

親父はヘルガーに右足を噛まれ、ものすごい声を出しながら叫んでいる。かなり痛そうだ。

「エンちゃん、もうやめてちょうだい」

母さんがそう言うと、ヘルガーはピタッと噛むのをやめた。

「いい子ねえ、エンちゃん」

母さんはヘルガーの頭をなでる。なでられたヘルガーはなんか凄く嬉しそうな顔をしている。

「テメエはどんだけ女好きだよ」

呆れながらヘルガーにツツコミをいれる。

「いててて、たく…何すんだよ！」

「次殺^やられたくなきや黙れ！」

俺は親父に向かってにらめつけながら言った。

「マドカアア…リユウガが反抗期にいいい！」

いい歳して親父は母さんに泣きつく。

「あなたが悪いんでしょ。だけどリユウちゃんをもやりすぎよ」
確かにやりすぎたな。

「それにリュウドウさん。ちゃんと渡すポケモンいるんだから素直にわたしたら？」

「おい、言うなよな」

親父は少しがっかりした表情をしている。

「いるなら最初から言えよ」

俺は呆れた表情で親父のほうをにらめつける。

「たく…まあいい！リユウガ！外にでろ」

「ヘルガーもいくぞ」
しかし

「エンちゃん、ご飯よ」

母さんがそう言う俺のいうことを無視し、ご飯をガツガツと食べている。

（だめだなこれは…）

俺は呆れながら口にはださず心の中でそう思った。

俺と親父は庭にいる。

「ほらよ」

親父は俺に向かってモンスターボールを投げた。俺はそれを見事にキャッチする。

「またあんなのじゃないよな？」

「残念ながらそれはねえよ！いいから投げてみろよ」

俺は半信半疑でボールを投げた。

すると中からは頑丈そうな鎧につつまれた、よろいどりポケモンのエアームドがでてきた。

「どうだリュウガ。プレゼントだ！」

「いいのか？」

「ああ別にいいぜ。最近捕まえたポケモンだし、それに育てるつもりなかったし」

「いや、それは俺に押しつけただけだろ！捕まえたんだから自分で育てろよ！」

俺は親父に向かって激しくツツコム。

「だってよお、そいつを育てる暇ねえし！俺は先に家に戻るぞ」
「ちょっと待て！」

しかしきこえてないのか親父はすんなりと家に戻っていく。

「なんか……最近無視されるの多いな……ハア、まあ俺を乗せて空をとべそうだし、まあいいか。エアームドよろしくな」

「エアアア」

エアームドも『よろしく』とでも言ったのかそう返事する。

俺はエアームドをモンスターボールの中へ戻した。

そのあと家に帰り晩ごはんを食べ、風呂に入り、そして10時ぐら
いまでゲームで遊び、そのあとベッドに横になり眠りについた。

ーコガネジム前ー

9時ごろ

朝8時ごろに起きて朝食を食べ、身支度をしてヘルガーと一緒にコ
ガネジム前まできた。

昨日、一応アカネにバトルに勝ったのだが、バトル後アカネがあん
な状態（大泣き）になってしまつて、審判の人に『また明日きてく
ださい：です』って言われたのでここにきた。

正直来たくはなかったがな。

俺はコガネジムの扉をあけた。

その後近くにいた女の人にアカネがいる応接室へ案内された。

「アカネさん、リュウガさんを連れてきました」

応接室のソファアに座っているアカネのほうをみて女の子が言った。
「ありがと。あとリュウガと話したいからちよつと出ていってくれへん？」

「わかりました。リュウガさん、どうぞソファアにお座りください」
そう言つて女の子の人は部屋から出ていった。
俺はとりあえずソファアに座る。

「何のようだ？泣き虫野郎」

「だれが泣き虫野郎ねん！それにここにヘルガーを連れてくるな！ボールに戻して！」

アカネがそう言ったので、特に反論せずヘルガーをボールにしまった。

まあ反論するとめんどくせえことになりそうだしな。

「んで何のよう？」

「これを受け取ってや」

アカネは俺に向かってレギュラーバッジを投げる。

「もうトレーナーに戻ってええよ」

アカネが言う。

「いらねえよ、まだ戻る気ねえし」

俺はアカネに向かってバッジを投げかえす。

「ええ！？リュウガ、ポケモントレーナーに戻らへんの！？」

アカネは相当驚いている。

「なんかポケモントレーナーをやっている自信がないんだ。もちろんトレーナーには戻りてえけど……生半可な気持ちでトレーナーに戻っても、続けていけなさそうだしな。それに届け屋も悪くねえ

しな」

少しの沈黙のあとアカネが

「わかったわ……けど受け取ってや」

再び、アカネは俺に向かってバッジを投げる。

「だからいらねえよ！」俺は少し怒鳴るような口調でいったが

「いいから受け取ってや。でも勘違いはすんなよな。ただ預けるだけや！自信を取り戻し、トレーナーに戻ったらうちとバトルや！バトルに勝ったらくれてやるわ」

アカネも言い返す。

「ハア……わかったよ、預かっておくよ。あと『うちに勝ったら1つだけ言うことをきいてあげるよ』とか言ってたよな」

「え……？まあそんなこと言ったような……あ……ヤバイや！わすれてたや！どーしよおー！」

アカネかなり動揺し、少し汗をたらし慌てている。

「まあこの件はチャラにしてやるよ」

「まあ……さ……サンキューな」

『助かったー』とでも思っているのか、アカネは目をうるうるさせている。

「おい……泣きそうだぞ」

「泣いてないやねーん！」

アカネはさっきより目をうるうるして泣きそうになりながら大声でさげんだ。

「うるせえ！俺は帰るぞ！」

俺は速やかに部屋をでて歩いていき、コガネジムの扉を開け外にでた。ついでにボールからヘルガーをだした。

「さて帰るか」

といった瞬間

ー トウルルルルルル トウルルルルルルッー

電話だ。しかもマアリからだ。

「もしもし」

「リュウガー！約束忘れてないわよねえー！」
マアリは大声で言う。

「覚えてるよ！（マアリは相変わらずうるせえな）」

「ふうん本当に？まあいいか。それじゃ1時に3丁目にある『プリンの喫茶店』に集合ね」

ちなみに『プリンの喫茶店』とはポケモンのプリンの形をした喫茶店のことである。

「ちなみに俺とマアリの2人だけか」

「何期待してんのよー友達も誘うわよ。だからリュウガも友達を誘ってきてねえーじゃあねー」

ー ツー ツー ー

電話がきれた

「別に期待してねえよ」

電話はもうきれているのだが、電話に向かって小声で呟いた。その後携帯をズボンのポケットにしまった

「いったん家に戻るぞ。いくぞヘルガー」

「ヘルウ」

ヘルガーが返事をする。

俺とヘルガーはとりあえず家に帰る。約束しないほうがよかったかもしれないと心の中で思いながら家に向かって歩いていく。

第15話：親父登場！新たな仲間、そしてアカネのもとへ……（後書き）

2月14日の日に資格試験があり勉強してたのと、このあとのス
バレンタインデー
トーリーをどうするかかなり考えてたので……更新が少し遅れまし
た。

第16話：マアリとの約束1日目（前書き）

リュウガ「ストーリーが進まないな」

マアリ「確かに、ちょっとヤバいかも……」

第16話：マアリとの約束1日目

俺はマアリと『3日間修行に付き合うんだから残りの4日間遊びに付き合う』という約束をしてしまった。

とりあえず俺は友達を2人さそって目的地である『プリンの喫茶店』に向かって歩いている。ちなみにヘルガーは母さんと一緒に家にいる。

「僕を誘うなんて、珍しいじゃないか！クールボーイ！」

金髪の野郎が言った。

「相変わらずうるせえな」

こいつの名前は『一茂^{かずしげ}』、皆には『カズ』とよばれている。年齢は俺と同じ16歳。こいつの特徴を一言でいうと『金髪ナルシスト』だ。

ちなみにホウエン地方でポケモンコーディネーターをしているらしい。今はリボンを5つゲットして『グランドなんたら』に出場できるようにになったらしく、グランドなんたらまで1ヶ月あるので、地元に戻ってきたらしい。

「おい！クールボーイのリユウガ君。『グランドなんたら』じゃなくて『グランドフェスティバル』だよ。ちゃんと説明しろよ。あとこの『金髪ナルシスト』って僕のことかい！」

カズが少し慌てながら言った。

俺は当然のように一言も喋らずカズの方角を『なんて痛い子なんだろう』と思いながら見る。

「なんか喋ってよ（泣）」

弱々しくカズが言った。

「実際に金髪ナルシストは当たっていると思うわ」

この女の人の名前は『リコナ』。年齢は16歳。カズと同じでポケモンコーディーネーターで、グランドフェスティバルに出場できるようになったらしく、カズと一緒に地元に戻ってきたらしい。どーでもいいが、カズとリコナは恋人どうしだ。

「ところでクールボーイ。なんで僕達を誘ったんだい」

「お前らが暇そうだったからだ」

「実際にあたし達は暇でしたけど」

「リコナ、一応もうすぐグランドフェスティバルだよ」

カズが少し慌てながら言った。

「大丈夫ですよ、まだ1ヶ月もありますし」

「リコナの言うとおりで。そうあわてるな、ナルシスト」

「僕はナルシストじゃない！」

カズが大声で叫ぶ。

「じゃあ実際にナルシスト意外何が当てはまるんだよ」

俺は呆れながらカズに言った。

「たとえば……かっこつけとか」

「あまり変わらないわよ」

カズにリコナがツツコミをいれる。

この後、カズやリコナにハウエン地方のことやコンテストのことなどをきいた。話をしているうちに目的地につき、喫茶店の中に入った。喫茶店内を見るとすでにマアリとマアリの友達と思われる2人、計3人が椅子に座ってパフェを食べていた。

俺達はマアリ達のほうへいく。

「リュウガ遅い！」

マアリが大声で叫ぶ。

「マアリ……大声で叫ぶのはいいが、ここ喫茶店だってことわかってるよな」

周りにいたお客さん達が一斉にマアリの方向を向いた。

「す……すいません」

顔を赤くして頭をペコペコしている。

「ハッハッハ、久しぶりだな。プリティガール！」

カズがかっこつけながら言う。ちなみにプリティガールとはマアリのことだ。

「久しぶり〜リコナちゃん。元気だったー！」

「あ、うん、元気ですわよ」

マアリはカズのことを完璧にシカトしやがった。

「まあキャラが悪いんだ。顔は十分かっこいい。元気だせ」

「クールボーイ……それはなぐさめているのか？」

「そのつもりだ。（ウソだけどな）」

とりあえず俺達はマアリ達が座っている席の近くにあった席に座り、ケーキやらパフェやらを注文した。

「僕のことをシカトしないでくれよ。プリティガール！」

カズはまたかっこつけながらマアリに言った。

「ならその呼び方はやめてよ！」

マアリは周りにいるお客さんを気にしているのか、怒り口調ながらも小声で言った。

「マアリ、こいつは昔っからこうなんだし気にすんな」

「それはそうだけど、何か嫌なのね」

「まあカズのことは病気だと思えばいいんだ」

俺がそう言っていると、カズが机を叩き、いきなり立って

「誰が病気だ!!」

と大声で怒鳴った。

しかし周りにいたお客さん達はそれに驚き、一斉にカズの方角を向いた。

さっきのマアリと同じパターンだよ。

こんなことをしているうちに注文したケーキやらパフェやらがきた。一応全部食べて店から出ていった。

その後俺達は強制的にマアリ達に連れていかれ、いろんな喫茶店を巡っては、パフェやケーキを食べまくるということをしていた。

これで6件目だ…。俺は正直……かなり苦しい。

俺達はマアリ達により強制的にパフェやケーキを食べさせられた。しかしなぜマアリ達はこんなに甘いものを食べても平気なんだ。見たところカズも顔を青くして苦しそうな表情をしている。

「よーし7件目もいくよー!」

マアリが元気に言った。

「俺はもういかねえし、いったとしても食べねえぞ」

俺はマアリ達に向かって言った。

「マアリちゃん。あたしもさすがにちよつと……それにカズ君が危ないことになっているし」
リコナが小声で言う。

まあ分かりやすく言うと、カズはいつでも吐きそうな顔をしている。

「仕方ないわね。それじゃ解散しよー！皆、明日は『ムウマの秘密の部屋』に集合ねー！」
ちなみに『ムウマの秘密の部屋』というのはカラオケ屋だ。

「じゃあね、マアリちゃん、リュウガ君。また明日」
リコナが元気にそう言い、俺達に手をふっている。

「じゃ……じゃあな……」

カズは相当ヤバそうだな、大丈夫か？

俺達はカズとリコナとマアリの友達と別れた。俺とマアリは帰る方向が同じなので一緒に帰っている。

「いやー楽しかったねーリュウガ」

「いや…楽しかったけど…それより疲れた」

正直かなり疲れたよ。なんでマアリは元気なんだよ。

「明日はカラオケだよー！楽しみだなー！」

「俺は音痴だから嫌なんだがな」

「大丈夫だよ！リュウガは歌上手いって」

（大丈夫じゃねえよ）

と俺は心の中で思う。

こんな感じであと3日間大丈夫だろうか……。

第16話：マアリとの約束1日目（後書き）

ポケモンコーディネーターとは『ポケモンコンテスト』に参加するポケモントレーナーのことをいいます。

ポケモンコンテストで優勝するとリボンが貰え、5つ集めると『グランドフェスティバル』に出場できるようになります。

なんか説明が下手ですいません。

第17話：虫取り大会　～開会式～（前書き）

リュウガ「報告がある。作者が『このままじゃストーリーがすまないのでマアリとの約束の2日目と3日目はかなり省略した』だつてよ」

マアリ「えー！？」

リュウガ「しかたねえよ。まあそういうことだ。とりあえず17話の始まりだ」

マアリ「それ私のセリフ！」

第17話..虫取り大会　　（開会式）

マアリとの約束で2日目は、1日目と同じメンバーでカラオケに行った。朝の10時〜夕方5時までカラオケ屋にいたが、まあ予想通りほとんどマアリが歌ってたけどな。おかげで俺は歌わずすんだけど、金が無駄にかかったのだけが少し痛かったな。

3日目はまた同じメンバーでコガネ遊園地で遊んだ。この遊園地にはジェットコースター4つありめっちゃ行列ができてたが、全部乗れたのですごく楽しかったのだが……最後に観覧車に乗ろうとしたとき、リコナが高所恐怖症のせいか『観覧車嫌ですー！』って大騒ぎして、さらには大泣きして……

まあ結局はマアリとカズがリコナを説得して乗せたが、観覧車の中でもとにかく大泣きしやがっているろと大変だった。『コガネシティまで飛行機で帰ってきた』ってカズが言ってたが、大変だったんだろうな。

そして4日目

―自然公園―

午後1時ごろ

今俺達は自然公園に来ている。

ちなみに自然公園はどうところかというと、まあ名前の通りだ。公園の真ん中には多くの木や草がはえており、森みたいになっている。そこには主に野生の虫ポケモンがいて、時々虫取り大会などもひらかれている。今日はちょうど虫取り大会をやる日なので、俺とマアリとカズとリコナ、計4人で虫取り大会に参加することとなった。ちなみにマアリの友達は何人とも用事でこれなかったらしい。言い忘れたが相棒のヘルガーはモンスターボールの中で静かにしている。

「始まりは1時だよな？もう1時こえてるぜ」

「確かに始まらないわね」

只今の時刻は1時15分。大会は1時に始まる予定だが15分くらいオーバーしてやがる。

俺達の周りにいるこの大会に出場するであろう30〜40人ぐらいの人々もざわざわしはじめている。

すると

「え〜〜すみません。少し遅くなりましたが私がこの大会の委員長です。今日も雲1つない快晴！まさに虫取り大会をやるにはうってつけの天気ですね。え〜〜それではルール説明をします。審査員長お願いします」

大会委員長が話しを終えると持っていたをマイクを審査員長に渡した。

「ルールを説明したいと思います。今回は子供の部ですので18歳以上の方は参加しないでください」

「いや、そんな奴いねえだろ」

俺は審査員長に聞こえない程度の声で言ったつもりが

「その少年！そういう奴がいるから言っているのです！最後まできちんと話をききなさい！」

俺に指をさして少し怒った口調で審査員長が言った。当然周りにいた人々は一斉に俺の方向を見る。

「うわーリュウガ恥っずかしー」

とマアリが

「確かにプリティガールの言うとおりだな。実に恥ずかしい！」

とカズが

「他人のフリでもしましょうか？」

とリコナが言った。

「おい！お前ら、素晴らしいすぎだぞ！」

俺はすこし怒った口調でいった。

「ゴホン、若干邪魔が入りましたが…」

「俺は邪魔扱いだよ」

と本当に審査員長に聞こえない程度に言っただけつもりだが

「黙りなさい！何回注意されれば気がすむのですか！」

また審査員長に怒られた。マアリ達は俺から半径5メートル程度離れ、俺の方向をちょこちょこ見て3人で何かひそひそ話している。

マアリ、カズ、リコナ……お願いだから他人のフリだけは辞めてくれ！

あと審査員長、アンタはどれだけ地獄耳だよ！

そして『何回注意されれば気がすむのですか』の問いに答えてやる。
2回目だ！！

と口にだすと審査員長に注意されるので心の中でツツコミをいれた。

「ええ本当に邪魔が入りましたがルール説明を再開します。まず参加者皆さんにパークボールを渡します。それ以外のボールやアイテムは使用禁止です。あと大会に使用できる手持ちのポケモンは1体のみです。制限時間は1時間です。ルール説明は以上です」

審査員長がそう言うと、その後大会委員長にマイクを渡した。

「えゝゝ予定より遅れましたが、今から10分後つまり1時35分
から開始します。準備をしてください」

やっと長い説明が終わった。俺はマアリ達に近づく。

「やあクールボーイ、先ほどは恥ずかしいかったね」

カズが言った。

「ああ、本当に恥ずかしかったよ。つか他人のフリは酷いだろ！」

「いやだって君と一緒にいる僕達だって恥ずかしいし」

「まあカズの言うとおりよ」

「マアリまで言うなよ」

俺は弱々しく言う。なんかすげえ泣きそうな気分だよ。

「あの……カズ君、一緒に行動していい」

リコナがもじもじしながら言った。いきなり話が変わったな。

「そんなこと言わなかったって一緒に行動するよ！僕達恋人どうし
だろ」

超かっこつけながら、リコナに向かってカズが言った。こいつ…完

全にナルシストだな。

「カ：カズ君」

おいおい：リコナが凄く幸せそうな顔してるよ。

するとマアリが小声で

「いいなく、この展開。相手かカズじゃなかったらもったいいのに」

「マアリ、それは同感だ」

俺もカズ達にきこえないよう小声で言った。

「じゃあ僕はリコナと一緒に行動するよ。だから君たちも2人で行動すれば？」

「じゃあそうするー。いこーリュウガー」

「わかったよ。じゃあまた会おうぜ」

俺達はカズ達に手をふり、カズ達から離れていった。

「リコナ、あいつらを見てると恋人に見えなくもないよな」

「私は恋人というよりは、しっかりした姉マアリとできの悪い弟リュウガを見ているみたいだわ」

「なんか微妙だな」

当然この会話は俺達にはきこえていない。

「よーし！じゃんじゃん捕まえるわよー！」

マアリは相変わらず元気だな。

「そうだな」

俺はそう言った後、いったん携帯の時計を見る。

「1時34分か……もうすぐ始まるぞ」

「OK！」

『これから虫取り大会を始めます。初め!』

どこからかわかんが放送がきこえた。それと同時に周りにいた参加者が一斉に自然公園にある森へと走っていく。みんなやる気満々だな。

「いくぞ、マアリ」

「もちろんいくわよー!」

俺達も自然公園にある森へ走っていった。

第17話：虫取り大会　（開会式）（後書き）

最近新しく買ったゲームにハマっちゃって……更新が遅れました。
多分今後も更新が遅れます。

あと言い忘れましたが、虫取り大会はゲームのほうでは制限時間が20分ですが、この小説では1時間にしました。20分だとさすがに短いので。

第18話：虫取り大会　く優勝は誰の手にく（前書き）

マアリ「題名がかっこいいわね『優勝は誰の手に』だって」

リュウガ「ちなみに今回はいつもより、話が長いらしい」

マアリ「それに私とリュウガが少し進展するかもね」

リュウガ「なんじゃそりゃ」

マアリ「そういうことで18話始まりまーす」

第18話..虫取り大会　　ゝ優勝は誰の手になゝ

俺達は自然公園の森に入った。ここはウバメの森とは違い人工的につくられた森なので、昼間から薄暗くないし、この地図が書いてある案内板や看板が森に多くあるため普通は迷わないが、意外にこの森は広い。

そして森に入ってから10分後――

「強そうなポケモンが現れないな」

「そうねゝ」

虫取り大会は、なるべく強そうな虫ポケモン（カイロスやストライクなど）を捕まえれば確実に上位には入れる。しかし今のところ、キャタピーやビードルなど、言っではいけないが弱々しいポケモンにしか出会ってない状況だ。

「手持ちのポケモンは1体だけよね。リュウガって何のポケモンを使うの？　やっぱりヘルガー？」

マアリは腕を組みながら言った。ルール説明にもあったが、基本的に手持ちのポケモンは1体しか使っはならない。したがって他のポ

ケモンはパソコンに預けるか、係員の人にポケモンを預けなければいけない。

「残念ながら不正解だよ。正解はこいつだ。出てこいエアームド！」「モンスターボールを取りだし、それを投げた。」

「ええ！？　いつゲットしたの！？　ていうか持ってるならアカネちゃんとのバトルの時、使いなさいよー！！！」

「やめ○×#£※！」

俺は『やめろ！』と言いたいのだが、マアリに俺の胸ぐらをつかみ、おもいつき揺すられてるせいでわけわかんねえ発言をしている。とりあえず状況が状況なので腕を少し上げ、マアリの頭部に軽めにチョップをくらわす。

「いったーい！　何するの！？」

マアリはその場に座りこみ、頭を両手で押さえ、俺に向かって怒鳴る。

「それはこっちのセリフだ」

とりあえずらちがあかないので、めんどくせえが、エアームドのことについて説明をする。もちろんポケモンを探し、歩きながらだ。とりあえずエアームドをボールに戻す。

「へえー、あの後、リュウガのお父さんからもらったポケモンなんだ」

「まあそういうことだ」

「昔から疑問だったんだけどさ、リュウガのお父さんって何をしている人なの？」

「それはこっちが聞きたいぐらいだよ。わかるのはいろんな地方を旅をしているぐらいか？」

「自分のお父さんの職業もわからないの！？」

「何故か教えてくれないんだよ。母さんに聞いても『わからなく』って言うし」

「何よ、それ…」

マアリが若干呆れながら言った。

「多分ポケモントレーナーだと思うが、ちゃんと給料はもらってるんだよ」

「それじゃ探偵とか国際警察とかだったりして」

「まさか…」

俺とマアリはこんな話をしながら歩いていた。そして更に10分後

――

「あそこには何かいそうだな」

「そうね」

俺とマアリの目の前に、周りに生えている木よりも、ひとまわりやふたまわりくらいでかい木がある。その木から10メートルぐらい離れている場所にいるが、見れば一目瞭然だ。俺とマアリはそのでかい木に近づく。

すると

「あれってカイロスじゃない」

マアリがカイロスがいる方向をに指を差し、小声で言う。カイロスはそのでかい木からでている樹液を吸っているようだ。見たところ気づかれてないみてえだ。チャンスだな。

「おい、マアリ。俺はアイツをゲットするつもりだがどうする？」

「私もそのつもりよ」

「どっちが捕まえるかアレで決めるか？」

「そうね、負けないわよー！」

俺とマアリは右の拳をグーにして左手で押さえて、構える。

「「最初はグー、ジャンケンポイ！」」

俺はグーをだしたが、マアリはパーを出した。クソッ！ 負けた！

「私の勝ちねえー。カイロスちゃん、待っててね、私が絶対に捕まえるんだからー！」

「マアリ！ 声がでかい！」

マアリが大声で叫んだせいでカイロスが気づかれました。こちらをギロリと見たあと、木から降り、こちらを凄く鋭い目付きで睨み付ける。

「あのカイロス、絶対強いわね。ここのボスよ」

いや：何故あれだけでここのボスとわかる？

「本気で行くわよ、いっけー！ バンちゃん！」

マアリはベルトに着いている、モンスターボールをてにとり、それを投げた。

バンちゃんってなんだ？と思ったがすぐにそれはわかった。

「ギラアアアス！」

ボールから全身岩の鎧につつまれた、体長が2メートルを越えるであろう、怪獣みたいなポケモン……鎧ポケモンのバンギラスだ。しかしかいな。

ギロッ…

バンギラスはカイロスを鬼のような恐い顔で睨み付けた。

それを見たカイロスはびびったのだろうか、後ろに1歩後退してしまうが、10秒ぐらいたった直後『こんな野郎に負けてたまるか』と言わんばかりに、凄い気迫でバンギラスに突進してきた。

「負けないわよ！　バンちゃん破壊光線！」

「マアリちよつと待て！　こんなところでそんなの放ったら」

「ギラアアアアス！！」

ドガアアアアアン！！

衝撃音とともに爆風がおこり、煙につつまれた。
少したった後、煙がはれたがその光景を見た瞬間、俺は唾然とした。
なんとあのでかい木がバンギラスの破壊光線により跡形もなくなっ

ていた。多分カイロスを破壊光線に巻き込んだ後、あのでかい木に命中したのだろう。ちなみにカイロスは死んだ？ ……いや気絶している。

マアリはすかさずカイロスにボールを投げた。カイロスがボールの中に入り、ボタンの部分が赤く点滅し左右に少し動く。数秒たつと赤い点滅が消え、ボールは動かなくなった。ゲットしたようだ。

「カイロスゲットよ〜♪」

マアリが嬉しがっているが、今はそういう状況じゃない。

「お前あれどうすんだよ」

俺は冷静にそう言い、でかい木があつた場所を指差す。

「あ…：：：：：跡形もなくなっちゃったね…：」

マアリが若干焦っているようだ。

「あれバレたら確実に怒られるぞ…：：：：：ってあれ」

その場にマアリの姿はない。逃げたな。

「速く逃げるわよ〜」

マアリは既にその場から10メートルぐらい離れていた。完全に逃げる気だな。

「待て！」

俺はマアリの後を追った。

残り時間、8分ぐらい――

「残り時間が少ねえ！ ヤベエ……」

「キヤタピーでもいいから捕まえれば？」

「それじゃ上位にすら入れねえだろ（クソッ、あそこでジャンケンに勝ってればな……）」

と心の中で思い後悔している。

すると

「あれ、スピアーじゃない」

マアリが斜め上の方向に指をさす。指を差した方向には、スピアーが飛んでいる。しかも1体だ。

「リュウガ、チャンスよ」

「そうだな（でもスピアーには、ウバメの森で襲われたしな……あんまりスピアーと関わりたくないが、仕方ねえ）」

俺はモンスターボールを投げエアームドを出した。

「先手必勝だ。エアームド、スピアーにスピードスター」

無数の☆（星）の形をしたエネルギーを口からだし、それがスピアーに命中した。しかしまだ倒れない。

「スピーィィ」

スピアーは右腕の針の部分を紫色に光らせた。毒突きだ。

「鋼の翼だ」

互いの技がぶつかりあった。毒タイプの技は鋼タイプには効果がないので、当然鋼の翼が押し勝ち、技がスピアーに命中し空中から地上へ落下して地面に叩きつけられた。スピアーは気絶したみたいなので、俺はここぞとばかりにモンスターボールを投げ無事にスピアーをゲットできた。

「よーし、やっとゲットしたぜ」

俺は投げたボールを拾った瞬間

『スピイイー』

周りから数十体スピアーが現れ、俺とマアリを囲んだ。

「リュウガ…この展開はまさか……」

マアリが焦りながら言った。

「そのまさかだ…逃げろー！」

俺とマアリは全速力で自然公園の森の出口に向かってはしる。エアームドは空をとび、俺達の後を追いつながら逃げる。しかしスピアーの集団は俺達を追ってくる。

「クソッ、なんでこーなる！」

「それはこっちのセリフよー！」

「つかバンギラスでなんとかならないのか？」

「あの数じゃバンちゃんだけじゃ無理よー！他のポケモンもいればなんとかなるけど、預けちゃってるしー！」

クソッ！なんで手持ちのポケモンが1体しか使っちゃいけないんだよ。大会委員長のバカ野郎！！

『スピイイー』

スピアーの集団が一斉にミサイル針や毒針を放ってきた。

「エアームド俺達を守ってくれ、鉄壁だ」

さっきから空をとんでいたエアームドが俺達をミサイル針と毒針の雨から守った。

「なんとか防いだみたいだけど、どうすんのよー」

マアリが走りながら叫ぶ。

「今考えてんだよ（クソッ、なんで追ってくる。どうすればいい…冷静に考えろ！）」

「もう私…ハア ハア 限界……」

どうする…このままじゃ本当にヤバイ……クソッもうこうなったら賭けだ！これしかねえ！

「あっ…」

バタッ

マアリが転んでしまった。スピアーの集団がマアリを襲おうとしている。

クソッ！ 間に合え！！

「出てこいスピアー」

俺はボールを投げスピアーを出した。スピアーはスピアーの集団の方へ戻っていくと、俺達を追うのを辞め、どこかへ去っていく。多分俺がスピアーを捕まえたせいで俺達を敵だと思い、襲ってきたのだろう。俺がスピアーを逃がして、仲間の元へかえたので俺達を追うのを辞めたんだと思う。

「た、助かったー（泣）」

マアリが半泣き状態で言った。

「そういや

「転んだけど大丈夫か？」

「今日スカートだし、足すりむいちゃったし、全然大丈夫じゃないわよ！ だ・か・ら、おんぶして」

「うん全然大丈夫だな」

「コラー！ 可愛い女の子がケガしてるのよ」

「自分で可愛い言うな、ボケ！（それにおんぶなんて恥ずかしくてできるか！ 恥ずかしくて死ぬわ！ そういうのは、恋人同士でやれ）」

と心の中でツツコム。

『ピンポーン 虫取り大会終了です』

アナウンスになった。とりあえずエアームドをボールに戻す。スピ

アー逃がしちゃったし、結局1体も捕まえてねえし……ハア……しやあないし戻るか。俺は歩きだす。

「まってよーリュウガー」

マアリが走ってきた。

「お前：歩けるじゃん」

俺は冷静に言う。

「リュウガのバーカ！」

マアリが大声で叫ぶ

「誰がバカだよ!？」

「本当にいたいだよ、それに明日からアイドルのお仕事しなきゃいけないのに」

「御愁傷様だ」

「リュウガのアホー！」

またマアリが大声で叫ぶ。

「誰がアホだ！」

こんな話をしながら森から出て、カズとリコナに合流した。

「そろそろ審査が始まりそうだな」

「ところでクールボーイ、君はどんなポケモンを捕まえたんだい」
カズが言った。

「あたしも見たいですわ」

リコナも言う。

「そういうお前らは、何を捕まえたんだ」

俺は話をそらした。正直1体も捕まえてねえなんていえないしな。

「あたしはこのポケモンよ」

腰についているモンスターボールを取りだし、それを投げてポケモンを出した。リコナはそのポケモンをだっこする

「あたしはコンパンを捕まえたの、可愛いでしょ」

リコナはコンパンか：

「僕はこいつさ」

モンスターボールを投げバタフリーをだした。

「クールボーイ！君は何のポケモンを捕まえたんだい？」

まさか

捕まえてないの？」

そのまさかだよ。捕まえたけど逃がしたんだよ。

「それは…」

「私が言うよ」

マアリはいままで起こったことを説明する。

「…てなわけ」

「そうか、クールボーイ、彼女のために自分の捕まえたポケモンを犠牲にしたってことか、かっこいいじゃないか」

ほめるのはいいんだが

「彼女ってなんのことだ？」

「カズ、それってからかってるつもなの？」

俺とマアリは冷静にカズにツツコム。

「いいじゃないか別に」

カズが言った。

「そろそろ審査が始まるみたいですよ」

リコナが言った。

「これから審査を始めます。エントリーナンバー1番のかた」審査委員長が読んだ。

しばらくたち審査終わり——そして発表へ

「発表します、今回の優勝者は……」

「エントリーナンバー25番、カイロスを捕まえた。マアリさんです」

大会委員長が言った。

「やったー！」

マアリが飛びはねて、両手をあげ喜んだ。

「はい、これが優勝者に贈られる太陽の石です」

大会委員長がマアリに太陽の石を渡した。

ちなみに3位はバタフリーを捕まえたカズで、黄金の実をもらった。
俺とりコナはランク外だったけど。

俺とマアリは自宅へ帰っている。ちなみにカズとりコナとは一緒に帰っていたが、家の方向が違うので途中で別れた。今は俺とマアリ二人っきりだ。

「あゝなんか疲れた」

「リュウガ、あの時は助けてくれてありがとうね」

マアリがちよっと照れながらいった。

「礼はいらないよ（それにあそこで助けてないと、マアリに後に何

言われるかわからんからな)」

「それと私を助けるために、リュウガがスピアーを逃すことになるし……ゴメン」

マアリが手を合わせて謝る。

「別にいいけど、謝るなんてお前らしくねえよ。言ってることが重いし。それに謝るのは俺のほうだよ。もしスピアーを捕まえてなければ、あんなことにならなかったし」

俺がそう言うと、マアリが少し微笑み

「フフツ、それもそうね」

と言った。いつものマアリに戻ったな。

「話は変わるけど、明日朝7時に飛行機に乗る予定だけど、リュウガは見送りに来るの？」

「カズもリコナも見送りに行くって言ってたし、俺だけ行かないわけにはいかないだろ」

「ありがとね、じゃあね。また明日」

マアリが手をふってきたので、俺も軽く手をふる。こんな感じでマアリと別れた。

「出てこいヘルガー」

モンスターボールを投げヘルガーをだした。

「ありがとな、ずっとボールの中で大人しくしてて」

「ヘルウ」

ヘルガーは返事をする。

「さて行くか」

俺とヘルガーは自宅へ帰って行く。

そういやあのデカイ木をバンギラスの破壊光線で跡形もなく粉碎したせいかな、しばらく虫取り大会がひらかれなくなったのは別の話だ。

第18話：虫取り大会　く優勝は誰の手にく（後書き）

更新が遅いのと、あまり主人公が活躍が目立ってないことと、ストーリーが進まないことが今の悩みです。

脇役に力がいれすぎかもしれませんね。

第19話：別れ…それぞれの目標へ（前書き）

マアリ「私の目標はシンオウ地方で知名度をあげ、いろんな番組で活躍すること」

リュウガ「俺は……今はないな」

ハビト（作者）「僕はなるべく更新をはやくしてこの物語を終わらせたい」

マアリ「作者さん、いたんだ」

リュウガ「いやまだ状況的には終わらなそうだぞ、この小説」

ハビト（作者）「そうなんだよね、しかも最近忙しいし更新のほうがちよつと…」

マアリ「頼みますよ。作者さん」

リュウガ「作者…大丈夫かよ……」

第19話：別れ：それぞれの目標へ

ーコガネ空港ー

朝6時20分ぐらい

「ようマアリ」

「おはよーリュウガ、来てくれたのね。あれ？
やんは？」

カズトリコナち

「そーいやあいつら来てないな。」

「わからねえな」

「じゃあ、来てないのかしら？」

「でもあいつらに限って寝坊はないと思うが……まああいつらのことだ。俺達を2人きりにさせて、どっかで隠れて見てる可能性もありそうだが」

「確かにそれはありそうね。カズに監視されるのは嫌だし調べて」

「まだ見られてるかどうかもわかんないけどな。調べてみたいが一応空港だしな」

「体長が0、8メートル未満のポケモンは出して連れていくのはいいらしいが、基本的に空港ではポケモンの出すのは禁止されている。そのせいで体長が1、4メートルあるヘルガーは出すのは禁止だなら」

「ネイティ出てこい」

俺はモンスターボールを投げネイティをだした。

「ネイティは体長が0、2メートルという超小型なポケモンなので空港内で出すのはOKだ。」

「探すのね」

「まあな、ネイティ、一応空港だから人に迷惑をかけないように、カズトリコナを捜してくれ」

ネイティが空港内をとび周り、カズとリコナを搜索しに行った。

「ねえリュウガ、ポケモントレーナーに戻るの？」
いきなりだな。

「いや…まだ戻らないつもりだが…」
「どうして？」

マアリが首を傾げる。

「アカネにも言ったけどポケモントレーナーに戻ってもやっていける自信がないんだ。アカネに勝ったことにより自信を取り戻せると思ったけど結局は変わらなかったしな」

俺はそう言うともマアリが目を瞑り、腕を組み何かを考えこむ。

しばしの沈黙が流れる。

そしてマアリは口を開き

「それは……私は神様が与えた試練だと思うの」

「はあ……？ 試練？」

「神様は乗り越えられない試練はけして与えたりしない。その試練を乗り越えることにより、新たな道ができる……そして失った自信も取り戻せる……。私はそうおもうの」

「マアリは物凄く真剣な表情だけど……すまないがあえてツツコム！」

「お前……マンガの見すぎだろ……」

俺は少し呆れながらツツコム。

するとマアリは

「リュウガのバカー！ 真剣に答えているのにー！ 正直これ言うのに恥ずかしかったんだからー！」

言葉通り恥ずかしかったのか顔を真っ赤にして怒った口調で言った。まったく……バカらしい発言だけだな。

「でも真剣に答えてくれてありがとな」

俺は微笑みながら言う。

「なんかリュウガからお礼言われるなんて、なんか照れるわね」。

どういたしまして、相談ならいつでもきいてあげるよ」

調子に乗るなよな。やれやれ……でも

「まあ……その時は頼……」

「あっネイティが戻ってきたよ」

マアリがネイティに向かって指を差す。俺の声はマアリの声によってかきけされた。つか俺の言葉無視かよ！ まあ最近慣れたけど。

「あいつらいたか？」

俺はネイティにそう言ったがネイティは首を横にふる。とりあえず

俺はネイティをモンスターに戻した。

あいつら本当に寝坊したのか？

「本当にいないみたいだな」

「カズはどうでもいいけどリコナちゃんとは別れの挨拶はしたかったな」。しばらくはみんなバラバラになるし」

カズどうでもいいのかよ。なんか少しかわいそうだな。

「まあそうだな」

「そろそろ時間だし行くね」

そう言っただけでマアリが歩き出したとき

「ちょっと待ったー!」

カズが大声で叫びながら走ってくる。リコナもカズを追って走ってきた。

「ごめんなさい。遅れちゃって」

リコナが頭を下げ謝っている。

「遅いぞ……あれ、その荷物、まさかお前……もうハウエン地方に行くのか」

カズとリコナの手には、『何をそんなに入れてきたんだ』とききたくなるぐらいに、パンパンになったバックを持っている。

「まあな、僕とリコナはそろそろグランドフェスティバルがあるしな」

「まだ1ヵ月ありますけど、いろいろと準備したいから」

「もちろん目標は優勝だぜ!」

カズは張り切ってるな。

「あたしもね」

リコナは普通だな。

「そうか……カズ、リコナ頑張れよ」

「リコナちゃん、グランドフェスティバル頑張ってるね。応援してるわ」

マアリが元気よく言った。

「あの……僕は?」

カズは自分に指を差し、慌てながら言った。

「あなたはもういいわ。嫌いだし」

マアリ……いくらなんでも少し酷くねえか?

「それに可憐でプリティーなリコナちゃんと恋人だなんて私は認めないから!」

「お前はガンコ親父か！」

俺は少々呆れながらマアリにツツコミを入れる。

「ガンコ親父じゃないわよ！ 女の友情よ！ 私は心配なの！ こんな奴がリコナの彼氏だなんてー！」

「僕がリコナの彼氏で悪いのかい？ プリティガール！」

カズが反論する。

「ええ悪いわよ！ あんたみたいな奴にリコナちゃんを渡すもんですか！」

「なんだと！ 君はリコナの親かい？ 親でもないやつに口出しする権利はない！ それがプリティガールでもな」

「私は認めないわ！」

「やめようよ、カズ君、マアリちゃん」

マアリとカズが口喧嘩しているところを、リコナはとめようとしている。俺はそれを観戦している。

「あいつらは相変わらず仲が悪いな」

俺は小声で呟く。

「あのー、見てないでリュウガ君もとめるのを手伝ってください」
リコナは困った表情で言った。さすがに喧嘩は終わらすか。

「マアリ、そろそろ飛行機が発するぞ」

「あー！ もう時間がー！」

マアリが慌てながら言った。

やれやれだな…。まあこれで喧嘩は終わったしいいか。

「もう時間だから行くよ、リュウガ、リコナちゃん……じゃあね……この4日間楽しかったよ」

マアリが泣きそうになりながら言う。まるで一生会えないみたいな言いかただな。つかカズが入ってねえな。

「そのうちまた会えるんだから、そんな顔すんなよ。お前らしくも

ねえ」

「次はゴウ君も含めて5人で遊びましょう」
リコナが言った。

「ういやゴウの野郎はバツジ集め、頑張ってるのかな？」

「そうよね、また会えるんだし…」

「そうだよプリ…」

バシッ

「いてえ！ 何すんだよ！」

俺はカズの頭をおもいつき叩いた。

「お前が余計なことをいうと、また喧嘩になるから黙っとけ」

「カズ君、あたしもリュウガ君の意見に賛成よ」

「リコナまでー（泣）」

カズが凄く泣きそうになりながら言った。

「じゃあねーリュウガがリコナちゃん」

「マアリが手をふってきたので、俺とリコナも手をふりかえす。カズは目立たないよう小さく手をふる。俺達はマアリと別れた。シンオウ地方での活躍を期待して…」

「クールボーイ何をするんだ！」

「いやだって喧嘩始まりそうだし、つかお前らって飛行機でハウエン地方に行くんだよね」
とりあえず話を変える。

「そうだけどどうした？」

「リコナって高所恐怖症だよな……飛行機で大丈夫なのか」
俺は疑問をぶつける。

「そのことなら大丈夫ですよ。出てきてワタツコ」

リコナはモンスターボールを投げ、ワタツコを出しだっこする。

「飛行機に乗る直前にワタツコの眠り粉を使って私を眠らすの」

「リコナが眠った後は、僕はまずワタツコをボールに戻して、飛行機の席までリコナをおんぶして連れていくという方法を使っているんだ」

リコナとカズが説明をする。

「結構手間がかかるな（つかおんぶすんの恥ずかしくねえのか？）」

「おっとそろそろハウエン地方行きの飛行機の出発時間だ。じゃあなリュウガ！元気でな」

「さよなら、リュウガ君」

そう言ってカズとリコナは手をふりながら走りだした。マアリ、カズ、リコナはそれぞれの目標に走っていつてるのに俺は何をやっているんだろ……。結局みんなと別れちゃったし、しばらくは俺1人か……。なんだか心に穴があいたような感覚だ。…ハァ…（ため息）

そう思い俺は家に帰るため歩きだした。

すると

ー トウルルルルルル トウルルルルルルッー

電話だ：しかもキリコさんからだ。

「もしもし」

「もしもしリュウガ君。依頼がきたから来てー。詳しくはこっちで説明するから、じゃあね」

ー ツー ツー ツー ー

電話がきれた。

依頼か：なんか久しぶりのような感じだな。よし、家に帰って準備してからキリコさんがいるコガネ特別宅配センターに行くか。

俺は、コガネ空港に停車していたバスに乗った。

そーいやゴウはどうしているんだろ？

まあ電話でもしてみるか。

第19話：別れ：それぞれの目標へ（後書き）

説明不足でしたがゴウは基本的に4人（リュウガ、マアリ、カズ、リコナ）とは仲がよいです。

マアリとカズは仲が悪いですけどね。

第20話：ゴウの勝利宣言！

（ゴウ視点）

（前書き）

ゴウ「今回、そして次回も俺視点…作者さんよ……この恩は、多分忘れない」

リュウガ「多分はねえだろ」

マアリ「久しぶりね、ゴウ」

ゴウ「久しぶりだぜ、マアリちゃん。アイドルの仕事はどうだい？」

マアリ「順調よ」

リュウガ「お前ら…本編では会話すらしてないよな。ここで会話していいのかよ」

ゴウ&マアリ「大丈夫でしょ」

リュウガ「いいのかよ」

マアリ「それでは20話、ゴウ視点で始まりまーす」

ゴウ「よろしくだぜ」

第20話：ゴウの勝利宣言！（ゴウ視点）

ーチョウジタウンー

朝8時頃

「よっし！ 準備完了だぜ。とっととヤナギのじいさんを倒して7つ目のバッジ、ゲットしてやるぜええ！！」

俺は右の拳をグーにし、おもいつきり腕を上げた。俺の名はゴウ。年齢は15歳だ。もうすぐで16になるけどな。

それよりやっと出番だぜ！ 4話以来だ！

あつと：こんな説明してる暇はない。とっとと、このポケモンセンターの宿泊施設から出てチョウジジムにレッツゴーだ。最初挑んだ時はヤナギのじいさんに完敗だったけど……でもそれにめげず、いかりの湖で特訓したんだ（ついでに自分の筋トレも）

ちなみにいかりの湖とは、チョウジタウンの北にあるジョウト地方で一番大きくて美しい（？）湖だ。ここにはポケモントレーナーが多くいるので特訓するにはうってつけだぜ。

ヤナギじいさんよ……待っている！ 次は完璧なる、いや完全なる勝利でバッジをゲットしてやるぜ！

ーピリリリリリー ピリリリリリー

俺のポケギアがなった。自分で言うのもなんだが変な着信音だぜ。それより誰だ？

「もしもし」

『よう、ゴウ元気か？』

なんだよりユウガかよ。

「元氣100倍だぜ」

『わかった。そんじゃ切るぞ』

「ああわかった。それじゃ元気でなく……ってポケイ！ なんじやそりゃ！？　つか何故電話してきた！」

俺はリュウガにノリツツコミをした。つか俺……こんなキャラだっけ……

『元気にやってるか調べるためだ。それにお前がいない間にいろいろ厄介だった。アカネの野郎とバトったり、マアリがシンオウから、カズトリコナがハウエンから戻ってきて一緒に遊んだり……ハア……』
リュウガが電話ごしにため息をする。マジで大変そうだな……。

「つかお前仕事は？」

『最近暇なんだよ。正社員なら“届ける”仕事がなくても平日は会社にはいかなきゃならねえが、俺はバイトに近い扱いだから、“届ける”っていう仕事だけだからな。でも今日、キリコさんから連絡あったから暇じゃねえけど』

「なら電話してくんなよ！　つかそんなの辞めてとっととポケモントレーナーに戻れよ！」

俺は強い口調で言う。

『いずれな。じゃあな筋肉バカ』

「誰が筋肉バカだって……つか電話切れたぁー！」

あの野郎！　次あったら締めてやる。そうだ、速くチョウジジムに行かなければ――

つーことでレッツゴーだー！　ヤナギのじいさんをぎっくり腰にする勢いでぶったおしてやらぁー！！

俺は心の中で闘志(?)を燃やしながら、ダッシュでポケモンセンターをでていった。

ーチョウジジムー

「オラァー！ ヤナギのじいさん！ バッジをゲットしにきたぜ！」
俺はチョウジジムの扉をおもいつきり開け、威勢よく言葉を放った。

が…

「あのおーチャレンジャーですよ。ヤナギさんは今散歩に行つてますが…。」

「さ、散歩！？」

受付のお姉さんが少々焦り、苦笑いをしながら丁寧に説明をしてくれた。

朝っぱらから散歩なんで…俺じいちゃんと同じじゃねえーか！ クソオあのジジィ…いやあのじいさん！

「あのおーあともう少しで戻って来ると思ふのですが…お待ちになるなら、こちらのソファーでお待ちください。よろしいでしょうか？」

受付のお姉さんが言った。

「わかった。ゆっくりくつろぎながら待ってるぜ」
俺がそう言う…

「その必要はない！」

「ゲェ：ヤナギのジジ：いやヤナギのじいさん。いつの間に」
突然後ろからヤナギのじいさんが出現：いや現れた。

この人がチョウジジムジムリーダーのヤナギ。『冬のヤナギ』という異名を持つ。しかもトレーナー歴40年のベテランだ。

話を戻すがジジイって言いかけちったよ：聞こえてない：よな：なんかいやな汗が出てきたよ。

「何か言ったか？　いつぞやの若僧？」

俺の顔を睨みながらヤナギのじいさんが言った。

ヤバイ聞こえてたのか…。

「いや、何でもありませんことよ（何か話し方がおかしいぞ、俺！）」

ヤバイよ…、受付のお姉さんもヤナギのじいさんも変な目で見てるよ。この空気、CH^{チェンジ}ANGEしなくては…。

「ようヤナギのじいさん！　1度目は負けたが：しっかぁーし！
今度は貴方が負けるばんだ。いかりの湖での特訓の成果：見してやるぜ！」

俺はヤナギのじいさんに向かって指を差し、勝利宣言をした。

勝利宣言したからには、負けは：多分、許されない。多分だが…

「フツ：若僧、私に勝てるのか？」

ヤナギのじいさんは不思議な笑みをこぼした。

「そうじゃなきゃ言わないさ」

俺は自信満々に言った。

「先にバトルフィールドへ向かっておれ。私は準備をしてくる」
ヤナギのじいさんはそう言い、ジムの奥にある扉を開け入っていった。

「あのおうバトルフィールドにご案内いたしますか？」

受付のお姉さんが微笑みながら言ってきた。

「場所はわかってるから大丈夫だ」

まあ一度ここに来てるしな。

俺はバトルフィールドに向かった。

バトルフィールドに到着。このジムのバトルフィールドはプールになっている。プールにはブイが浮いており、相手側のフィールドに2つ、俺側のフィールドに2つ、真ん中には少し大きなブイが1つ、合計5つのブイがある。

ここは氷タイプポケモンを主に使ってくる。

さてどういう戦略でいくか考えるか……

〈5分経過〉

「遅いな、まあ仕方がないか。相手はじいさんだしな。気長に待つか」

さてと準備体操するか。まあ結局はポケモンがバトルするんだからやる意味はないがな。

〈10分経過〉

「準備体操終わっちゃったぜ。まあやったのはラジオ体操だが…ラジオ体操第二もやるか」

く15分経過く

「ああ暇だく。はくやくく　こくいこくい　ヤナギくジジイく♪」
俺はリズム良く歌いだした。本当に遅いなく

「呼んだか若僧」

「ギエエー！ー！！」

後ろからヤナギのじいさんが出現…いや現れた。俺は驚きのあまり
奇声をあげ、ついでに変なポーズまでもとってしまった。

「お化けがでたわけでもないのになんじゃ？」

「い、いや何でもないぜい…」

まるで気配がない。おおっと…落ち着け、俺の心臓…、別に幽霊と
かお化けとか化け物とか出たわけじゃないんだ。まだ心臓がバクバ
クしてるぜ。

「速くバトルを始めるぞ若僧」

うお……いつの間にか相手側のバトルフィールドに移動してる。しかも審判もいやがる。瞬間移動でも使ったのか？

「これよりチャレンジャーゴウVSジムリーダーヤナギによるジム戦をはじめます。使用ポケモンは2体。なおポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます」
審判が言った。

「負けねえぜ、ヤナギのじいさん！」

「相変わらず威勢だけはいいのお若僧」

「ヤナギのじいさんよ。若僧はやめてくれないか？ 俺にはゴウという立派な名前があるんだぜ」

「私に勝てたら考えてやろう。『冬のヤナギ』と呼ばれる、その実力みせてやろうかのお」

「約束だぜ！ いくぜ！」

「試合開始」

審判がそう言うと、俺とヤナギのじいさんは同時にバトルフィールドにモンスターボールを投げた。

第20話：ゴウの勝利宣言！

（ゴウ視点）

（後書き）

次回もひきつづきゴウ視点です。

第21話：負けないぜ！ ゴウVSヤナギ （ゴウ視点）（前書き）

リュウガ「今回でゴウ視点が終わりだ」

ゴウ「あゝもう少し今のままでいたいぜ」

マアリ「ゴウなんてまだマシよ。私視点なんか1回しかやってないのよ、ヒロインなのに」

リュウガ「正確には『ヒロイン的存在』だな」

マアリ「リュウガのバーカ！ アホー！」

リュウガ「俺はバカでもアホでもねえ！」

ゴウ「口喧嘩はよせよ。まったく…まあとりあえずはじまりだぜ」

第21話..負けないぜ! ゴウVSヤナギ (ゴウ視点)

俺はヤナギのじいさんは同時にバトルフィールドにボールを投げた。俺はオーダイルを出した。オーダイルはブイのほうに着地する。こいつは俺の最初に捕まえたポケモンであり一番の相棒だ。更に俺のバトルスタイルは超攻撃型! しかもオーダイルは攻撃技しか覚えていないぜ。

一方ヤナギのじいさんはジュゴンを出した。ジュゴンは水タイプと氷タイプの2種類のタイプをもっている。一度バトルしたからわかるが、このジュゴンは超やっかいだぜ。いろいろ小細工を仕掛けてきやがる。

「試合開始!」
審判が言った。

「ジュゴン、氷の礫つぶてからアクアジェットじゃ」

ジュゴンは素早く氷の塊を放ち、更にアクアジェットでオーダイルに突っ込んできた。

「切り裂く攻撃だ。氷の礫を粉々にしろ!」

ジュゴンの出した氷の礫を粉々にして防ぐことができたが、それにきをとられすぎて、アクアジェットがオーダイルの腹部にヒットして、吹っ飛ばされてしまい水中におちてしまった。

だけどオーダイルは水タイプなので、アクアジェットをくらっても効果はいまひとつだぜ。それにアイツは頑丈だからあれぐらいの攻撃は屁でもねえぜ。

「吹雪じゃ」

「ヤバッ、速くブイあがれ!」

吹雪で俺側のフィールドのプールの表面が凍ってきた。オーダイルはプールから出て、ブイに着地しようとする。

「甘いな、着地地点に冷凍ビーム」

「地面にハイドロポンプだ！」

ハイドロポンプを地面に放った勢いで体をそらし、なんとか冷凍ビームを避けた。

全く：危ないぜ。よし、こちらからも攻撃だ！

「反撃だぜ！　ハイドロポンプ！」

「波乗り、そして冷凍ビームじゃ」

ジュゴンは尻尾をプールにおもいきり叩きつけ、波を発生させた。更に波を冷凍ビームで凍らせ、氷の壁をつくりハイドロポンプを防ぎやがった。

だが相手は氷の壁によって視界がとざされてるはず！　チャンスだぜ！

「よっしゃー！　氷の壁に突っ込めえー！　メガトンパンチだー！」

メガトンパンチで氷の壁をぶっこわしたが、やられたぜ……ジュゴンの姿がない、水中に逃げやがった。

「甘いな、今じゃ！　冷凍ビーム」

「しまった！？　オーダイル！　その場から逃げろ！」

ジュゴンはオーダイルの背後に現れた。

その場から逃げようとしたが……指示が遅れた……やられたぜ、オーダイルが氷状態……いや氷の像になっちゃった。

「くっそー　これじゃオーダイルが動けない！　ヤバイぜ、ヤバイぜ！」

俺はめちゃくちゃ焦る。

「若僧がなかなかだったが……終わりじゃ、ジュゴン、角ドリル！」
ヤバイぜ、角ドリルは命中率が低い技で、隙もデカイ。だがそれに当たってしまうと、そのポケモンは1発KOになる。つまり角ドリルは当たれば一撃でポケモンを戦闘不能にする技だ。ヤバイぜ、もうジュゴンがこっちにきてる！

「ギャアー！ すいません、すいません。神さまあゝ（泣）
もう悪いことはしません。ですからこの愚かな私とオーダイルを助
けてくださーい……………（自分の両手を握り神様にお
祈り中）」

なぐんて言うんでも思ったか！！ オーダイル！ ばかぢからだ！

氷をぶっこわせ！」

「なんじゃと！？」

オーダイルの身体から赤いオーラを放ち、凄まじい力を発揮して、
強引に氷を砕いた。こういう演技や人を騙したりするのはリュウガ
の十八番だが……悪いがその戦法、使わせてもらったぜ。

「いくぜ！ 角ドリルを避けて、噛み砕く攻撃だ！」

ガブリイ！

「ジュ、ジュゴン!?」

角ドリルを避け、ジュゴンの首を噛みつきその場から逃げなくした。
「噛み砕きながら連続で切り裂く攻撃攻撃だぜ！」

ジュシヤヤア ジュシヤヤア ジュシヤヤア!

「ジュ：ジュゴオオ」

切り裂く音とともにジュゴンは苦しい表現で叫ぶ。

なんかジュゴン可哀想に見えるが……まあとりあえず形勢逆転だぜ!

「若僧には負けん! 吹雪じゃ!」

さすが『冬のヤナギ』という異名をもつ男。この状態でも諦めず、
冷静に指示をだしている。だがこれで終わりだぜ!

「吹雪を発動する前に顔面にメガトンパンチをくらわせえ!」

バゴオオオオ！

「ジュゴオオオオオ！」

顔を殴った鈍い音とともにジュゴンは苦しそうに叫びながら、吹っ飛び壁に激突した。

これでTHE ENDだぜ！

「とどめだ！ フルパワーではかぢからだ！」

オーダイルから赤いオーラが纏^{まと}い、壁に激突しているジュゴンに凄まじいパワーで攻撃し、とどめをさした。ジュゴンは目をまわし気絶している。だがちよつとやりすぎたか、ジュゴンの身体のあちこちから出血している。

ジュゴン…御愁傷様だ。つーことでこれぞ完全なる勝利だぜええ！！

「オラァ！ 勝ったぜ！ つーことでバッジをよこせええ！」

「……………」

あれ？　なんだこの沈黙は？

「何を言っている？　若僧が」

「へえ？」

何故かヤナギのじいさんが呆れた表現だ。

あれ…俺なんかしたっけ？

「あの…使用ポケモンは2体ですので、まだ終わっていませんが…
…」

せようとしている。

防ぎたいが、近づくと確実に氷の像とかわしてしまうから接近できないぜ。なら

「ゴリキー、気合いだめからビルドアップだ！」

「リキイイイ！」

気合いをため更に、ゴリキーの身体がムキムキになり、肉体を強化した。ちなみにビルドアップは自分の攻撃力と防御力を上げる技である。そうしているうちに、さっきまでプールだったフィールドが凍りつき、氷のフィールドとなった。

こうなったら完全に俺のほうに不利だぜ。だが

「ゴリキー！ 滑りながらメガトンキックだ！」

ゴリキーはスライディングをしながらメガトンキックの体勢にはいる。まともに氷の上を歩いたり走ったりしたら、転ぶ可能性が高い。無茶かもしれないが、滑るしか方法がないぜ。いきやがれえ！

「甘いな、避けるんじゃ」

イノムはゴリキーの攻撃をいとも簡単に避けた。

やっぱり無茶だったか？

「とりあえず体勢を立て直せ」

俺はそう言ったがゴリキーは滑って体勢を立て直せてない。

このままじゃ壁に衝突しちゃうぜ。どうすれば……こうなったら、もうこれしかない！

「すまんゴリキー……これしか方法がなかった。ビルドアップで

防御力を上げて、耐えてくれ」

とりあえず両手を合わせてゴリキーに謝る。

マジでゴメン……。

「リキイ……（泣）」

ゴリキーが泣きそうになりながら叫んだ。

ズガーーン

ゴリキーは壁に激突した。

だ、大丈夫であってくれと俺は祈る。

「今じゃ、ゴリキーに向かって突進じゃ」

壁にぶつかってしまったゴリキーにイノムーが突っ込んできた。

本当に大丈夫であってくれよ、ゴリキー！

「受けとめろ！　そこからリベンジ」

突進してきたイノムーを受けきった。

その後イノムーにアッパーをくらわし、上空にぶっ飛ばした。

よし無事だったか。

「イノムー！」

ヤナギのじいさんの叫びとともに、イノムーは空中で体勢を立て直そうとしている。

そうはさせないぜ！

「ゴリキージャンプだ。そして地獄ぐるまだぜ」

ゴリキーがジャンプ使用とした瞬間

ツルツ ドテツ……

ゴリキーが……ズツコけた……。

っておーい！ 確かに氷の上だから滑りやすいのはわかる！
だ
が肝心なところでそれはないだろ！

「隙ありじゃ吹雪じゃ」

しまった！ あの状態（転んでいる状態）じゃ避けられない！

「ノー！ ゴリキー！」

俺は頭を抱えて大声で叫んだ。吹雪が命中してしまいゴリキーは
氷の像になってしまった。

「これで終わりじゃ、突進じゃ」

「戻れゴリキー！」

間一髪でゴリキーをボールに戻した。

「フツ、懸命な判断だな」

ヤナギのじいさんが呟く。

つかこのバトル、いろいろやらかしすぎだろ。むしろ笑いが入って
ないか？ 一応真剣なバトルをしてるはずなんだがな……。

「チャレンジャーのゴウさん」

審判が話をかけてきた。

なんだよ、いろいろ考えてるのに！

「どうした？」

「はやくポケモンを出さないと試合放棄になります…」

「それは困る！　ちよつとまってくれ、今だす！」

俺は慌ててボールを投げオーダイルを出す。

「試合再開」

「先手必勝だぜ。オーダイル！　地震だ」

バトルフィールドに大きく揺れ、氷っていたプールの表面が割れ、イノムーが水面に落下しそうになる。

よし！　イノムーは氷タイプの他に地面タイプももっている。なので水面に落下すれば、苦手な水に入ることになる。

「下に向かって吹雪じゃ」

なんとか水面に落下しないように、水を凍らし落下を防ぐ。

ここしかチャンスはないぜ！

「ハイドロポンプだ」

「守るじゃ」

イノムーの周辺に青白いバリアをだし、ハイドロポンプを防いだ。まだだ！　オーダイルの攻撃はまだ終わらないぜ。

「オーダイル、超高速でイノムー突っ込め！　切り裂く攻撃」

オーダイルはものすごいスピードで、氷の上を滑りながらイノムーに接近する。

このスピードなら避けられないぜ。

「もう一度守るじゃ」

しかし守るは発動しなかった。守るは連続でだと失敗しやすい技だ。イノムー切り裂くがヒットする。

「まだまだあ！　連続で切り裂く攻撃だ！」

「リフレクターじゃ」

切り裂くがイノムーに連続でヒットする。しかしリフレクターは物理攻撃を半減させる技だ。イノムーは余裕の表情だ。

「捨て身タツクルじゃ」

くそ：オーダイルは捨て身タツクルをくらってしまい吹っ飛ばされる。

「大丈夫か？ オーダイル！？」

俺がそう言うのとオーダイルは軽く頷く。

まだ大丈夫そうだぜ。

「前よりはマシになったな、若僧が」

ヤナギのじいさんがいきなり言ってきた。

「当たり前だぜ。今度こそバツジをゲットするからな」

俺はすかさず言い返す。

「フッ、若僧が」

「若僧言うな！ オーダイル、ハイドロポンプだ」

「吹雪じゃ」

お互いの技がぶつかり合い、氷の柱ができた。

「メガトンパンチだ。氷の柱をぶっこわせ！」

氷の柱をぶっこわし、氷の柱の破片を相手のほうにとばす。

「ストーンエッジじゃ」

イノムーのまわりに数十個のどがった岩が出現し、それをオーダイルのほうに放つ。氷の柱の破片を防いだにもかかわらず、相手の技は勢いが衰えてない。

ヤバイぜ、どうする………ちょっと賭けになるがこうなったら

「オーダイル突っ込め！」

「！？」

オーダイルは驚き、一瞬『ハア？』っていう表情になるが、俺の顔を見た後、迷わずイノムー目掛けて突っ込む。ストーンエッジを当たりながらも、イノムーに向かって接近する。

オーダイル：少し痛いかもしれないが、耐えてくれ。

「至近距離でハイドロポンプだ」

「甘いな、捨て身タツクルじゃ」

ハイドロポンプを放つ前にイノムーの捨て身タックルが当たってしまった。

しかしこれが狙いだ。

「イノムーの足元にメガトンパンチだ！」

「何!？」

イノムーの足元の氷を割り、水中に落とした。作戦成功だぜ!

「くっ：はやく陸にあがれ！」

イノムーが水中から出ようとしてるが、そうはさせないぜ。これで本当に終わりだ!

「アイアンテールでとどめをさせ」

水中から出ようとしている隙だらけイノムーにどどめをさした。

「イノムーー!」

ヤナギじいさんが叫ぶが、すでにイノムーは水に浮き、目をまわし気絶している。

「イノムー戦闘不能、よって勝者、チャレンジャーゴウ!」
審判が大声で言った。

「よっしゃー!」

俺は喜びのあまりに跳びはねながら、大声で叫んだ。

「オーダーイルー!」

勝ったのが嬉しいのかオーダーイルは両手を上げ叫ぶ。

そうだ：オーダーイルに謝らなければ。

「オーダーイル、ごめんな無茶させちゃってな」

俺はオーダーイルに謝るがオーダーイルは顔を横にふる。『それくらい大丈夫だ』っていう表情をした。

「サンキューなオーダーイル、休んでいてくれ」

オーダーイルをボールに戻す。

「ごくろうじやったイノムー」

ヤナギのじいさんもイノムーをボールに戻した。

「見事な戦いっぷりじゃったぞ。久しぶりに面白いバトルじゃったよ」

本当に面白いバトルだったのかヤナギのじいさんが微笑んだ。

「俺もだぜ楽しかったぜ」

「フツ：受けとれ、これがアイスバッジじゃ」

ヤナギのじいさんは俺にバッジを差し出した。俺はそれを受けとる。

「ありがとな。ヤナギじいさん、また機会があればバトルしようぜ」

「ゴウよ、次は負けんぞ」

「あ：今俺の名前で読んだ。つーことは俺の実力を認めたってことか？」

「いい気なるな、若僧が」

「若僧に戻すな！ 名前で読んでくれよ」

「黙れ、若僧が！ 次はフスベシティじゃな」

「そうなるな」

「あそのジムリーダーは私よりも手強いが、今のお前さんならきつと勝てる。応援してるぞ」

「ああ絶対に負けないぜ。じゃあなヤナギのじいさん」

「じゃあな若僧が」

俺はヤナギじいさんと別れ、チョウジジムを後にした。

今思えばかなりの激闘だったな。今日はポケモンセンターでポケモンを回復して、明日フスベシティに向けて出発だぜ。そうときまればポケモンセンターまでダッシュだぜ。

俺は全力疾走でポケモンセンターに向かった。

第21話：負けないぜ！ ゴウVSヤナギ （ゴウ視点）（後書き）

この世界の携帯電話とポケギアの違いを説明します。『そんなもん見なくていい』という人はスルーしてください。

携帯電話

- ・月の料金を払う
- ・電話ができる（電話番号を登録した人なら誰からかかってきたかわかる）
- ・メールができる（リュウガはこの機能は使っていない、つか用事があるならほぼ電話）
- ・インターネットが見れる

他にも機能はありますが、ほぼ現実にある携帯電話と変わりませenne（へーへ；）

ポケギア

- ・携帯電話とは違い、月の料金を払わなくてよい
- ・ラジオがきける
- ・マップ（地図）が見れる
- ・電話ができる（だけど誰から、かかってきたかはわからない）
- ・メールができる（これはオリジナルです）
- ・インターネットは見れない

こんなもんですかね。何か忘れていた場合は追加したいと思います。

第22話：ブレイドブラザーズ（前書き）

リュウガ「やっと俺視点に戻るぜ」

マアリ「私ってしばらく出番なさそうね」

ハビト（作者）「大丈夫だよ。マアリはストーリーの後半あたりから活躍する予定だから」

マアリ「ありがとー、作者さん」

リュウガ「でも作者……最近ネタぎれで苦しんでるんだろ」

マアリ「そうなの!？」

ハビト（作者）「マジでそうです。正直最終話まで書けるかな……」

リュウガ「ダメだな」

マアリ「と、とりあえず22話はじめます」

第22話：ブレイドブラザーズ

エンジュシティ

ここ、エンジュシティは古い建造物が多く、ジョウトで一番歴史のある都市である。ここは、カネの塔（現：焼けた塔）と鈴の塔や、舞妓はん（さん）の踊り場や、歴史の古いお寺が多くあり、観光スポット多く、観光客もかなり多い……らしい。

余談だが焼けた塔、鈴の塔には古い伝説が多く残されていたりする。

「やっとなつたな、ヘルガー」

「ヘル」

ヘルガーが返事をする。

今回は2つ連続で依頼がはいった。1つめの依頼は、最近ニュースでも報道されているエンジュシティのポケモン像窃盗事件の犯人を捕まえて、盗まれたポケモン像を届けてほしいという依頼……。簡単にいえば犯人を捕まえろ！ ってことだ。

このことをきいた瞬間依頼人に『警察に頼みやがれ！！』とツツコミたくなった。

が…

ぶっちゃけ依頼人はジュンサーさんだけだな。つか警察じゃない。どうでもいいけど最近、何でも屋になってきているような気が…届け屋の糞もねえな。とりあえず依頼人のジュンサーさんのところへ行く……

交番

俺は交番にきたのでとりあえず中に入る。ちなみにヘルガーは外で待っている。

しかしジュンサーさんが若い男性の人と会話をしていた。取り込み中のような。

「ジュンサーさん。それなら速く僕を呼んでくださいよ」

「だってマツバ君はジムリーダーでしょ。忙しいじゃない。それにちゃんと助っ人は呼んだから」

助っ人って俺のことか！ まあ俺が来たことは気付かれてなさそうだし、もう少し静かにして会話をきいてるか。

「とりあえずジムのほうは弟子達にまかせているから大丈夫ですから、それに助っ人っていつてもたいしたことないんですよ。その件については僕がなんとかしますよ」

若い男性の人が言った。つかその助っ人が後ろにいて、その会話をきいてるのだが？ それに誰が『たいしたことないんですよ』だよ

！ まあ自分で言うのもなんだが当たってると思うがな。このまま言われっぱなしも趣味じゃねえし、会話に混ざるか。

「誰がたいしたことねえって？ そのお兄さんよ」

「うお！？ つか誰？」

若い男性の人が驚きなが言った。

「俺の名はリュウガ。そのジュンサーさんに頼まれてきた者だ」

「僕の名はマツバ。こうみえて、エンジュジムのジムリーダーだよろしく」

この人がジムリーダー？ 強そうではあるがあまりジムリーダーには見えねえな。でもポケモントレーナーを続けていたらバトルしたんだろうな。

「あなたが届け屋からきたリユウガ君!？」
ジュンサーさんが驚きながら言った。

「とりあえずジュンサーさん、何故俺を呼んだんスか？」
何故届け屋に依頼を頼んだんだ？ という今思っている最大の疑問をぶつけた。

「えっと確か私がエンジュシティの仏像窃盗事件の件を話しをして、警察だけの力じゃ犯人を捕まえられないから届け屋（コガネ特別宅配センター）のほうにも協力してほしいと電話したら、電話でた相手の人が『あ、大丈夫ですよ。うちには優秀なポケモントレーナーがいますよ』って言ったからそれで……」

これでわかった。電話の相手の人……多分、いや……ぜつつつたいにキリコさんだ……。あの人はなんでどんな依頼でもOKするんだよ……。つか届け屋は犯人探なんてやらんわ！

「…ハア……」

俺は少し呆れはてながらため息をつく。

「とにかく協力して犯人を捕まえましょう」

ジュンサーさんが言った。確かにそうするしかねえか。

「ジュンサーさん、この事件について詳しく説明してくれないですか？」

「ええ、今までに3件事件が発生していますが、いずれも重要文化財に指定されているポケモンの像のみが窃盗されています。これが盗まれたポケモン像の写真です」

机の引き出しを開け、盗まれたポケモン像の写真を出した。

「こ、これは…」

俺は少し驚いた。何故ならこのポケモンの像は……。

「これは100年以上前からあったといわれている。左から、雷鳴寺にあるライコウ像、炎流寺にまるエンテイ像、水連寺にあるスイクン像だ。いずれも大きさは50センチぐらいの物だ。歴史のある、しかも貴重な伝説のポケモンの像を盗むなんて…許せん!」

マツバさんは右の拳を強く握りしめ、少し怒り口調で言った。

「マツバ君は代々鈴の塔を守る一族の末裔で、エンジュに伝わる伝説のポケモン達や、ここの歴史について詳しく知っているのよ」
ジュンサーさんが自慢気に説明する。

なるほど、それならマツバさんが怒る理由がわかるが、まだ納得がいかねえことがある。

「何か手がかりはないのか? 誰が犯人とかは?」

「犯人なら目星がついてるわ。“ブレイドブラザーズ”……最近世間を賑わせている5人組で、金さえ渡せば何でも盗んでしまう窃盗集団よ」

ブレイドブラザーズ……何かそこらへんガキがつけそうな名前だな。

「後、もっている情報だとその5人組はまだ子供なのよ」

「こ、子供だと…」

俺は冷静に言い返すが内心驚いている。まさか全員子供だなんて普通は思わないからな。でも何故子供が窃盗しなければならないんだろう?

「でも子供だからといって窃盗が許されるわけじゃないよ」

マツバさんはキツパリ言った。それはそうだな。少し考えすぎか…。

「マツバ君のいうとおりだわ」

「しかし手がかりがないよな。どうするんだ?」

俺は腕を組みながら言った。

「確かにリュウガ君のいうとおり、手がかりがないわ」

「確かに手がかりがない。でも予想だけど次に盗む物は大体目星が付いた」

マツバさんが冷静に言った。でもなぜ目星が付いた? エンテイ像、

ライコウ像、スイクン像が盗まれた以外何もわからないはずだよ……。

「多分だけど次は盗まれるのは、“エンジュ文化博物館”にある“ホウオウ像”だ」

「マツバさん、何故わかったんですか？」

「それは…」

「プルプルプルプル プルプルプルプル」

机にあった電話が鳴った。

「もしもしジュンサーですが……え、何ですって!？」

「「どうしたんですか!」」

俺とマツバさんが同時に言った。

「博物館に泥棒が入ったわ。多分ブレイドブラザーズよ…」

ジュンサーのそう言った瞬間、俺の脳内に衝撃が走った。クソ…遅かったか…。

「ジュンサーさん、リュウガ君! エンジュ文化博物館に行こう。」

「私は警察署に連絡してから行くわ」

ジュンサーさんが焦った口調で言った。

「いくぞ、ヘルガー!」

「ヘルウ!」

俺とヘルガー、そしてマツバさんはエンジュ文化博物館へと向かった。

間に合ってくれと祈りながら…。

第22話：ブレイドブラザーズ（後書き）

この話は大幅に修正するかもしれません。どうも最近ネタが思いつかなくて……しかも忙しいし…更新できないかも（一・一；）

第23話：エンジュの伝説（前書き）

マアリ「なんか久しぶりの更新ね」

リュウガ「作者、更新はやくしろー！」

マアリ「それでは23話はじめまーす」

リュウガ「まだ言いたいこと言ってねえけど」

マアリ「気にしなーい、気にしなーい！」

第23話：エンジュの伝説

エンジュ文化博物館

俺達がここ——エンジュ文化博物館に着いた時には、すでに警察署の刑事や鑑識の人が博物館周辺を取り囲んで捜査をしていた。そのため博物館内には立ち入り禁止状態で中には入れない状況らしい。

「っ…疲れた…」

「リュウガ君、大丈夫？」

マツバさんは元気そうだ。俺は…正直全然大丈夫じゃねえよ。つか交番からここまで20分ぐらいかかったし、しかも走ってだ。汗で服がグショグショだし、バスとかタクシーを使いやがれよ。……体力がもたんわ…。とりあえず持っていたバックからタオルを出し顔の汗をふきながら

「ああ…大丈夫じゃねえ…」
と答えた。

「喋る余裕があるなら大丈夫だ。しかし君のヘルガーは体力があるね。僕もさすがに疲れたよ」

おいおい…それ本当かよ…。全然疲れている素振り見してねえぞ。

「ヘルウウウ！」

「お前は元気だな」

ヘルガーは普通に元気そうだ。さすがポケモンだな。それとも俺が体力がねえのか？

キキイイイ（ブレーキの音）

「あ、マツバ君、リュウガ君」

ジュンサーさんがバイクに乗って格好よくやってきた。

ああ、免許もってねえけど、バイク運転したいな。：バレたら完全に無免許で、この人に御用になるがな：っていつてる場合じゃねえ！

「ジュンサーさん、これじゃ博物館の中に入れないんですけどどうすればいいですか？」

「僕はこの街のジムリーダーという立場ですので警察と一緒に調査することはできますが、リュウガ君は部外者扱いなので入れないんですよ。なんとかありませんか？」

マツバさん、本当のことだが、部外者って：ストレートに言うなよ。
「んゝゝ……」

ジュンサーさんが目を瞑り、首を傾げ、腕をくみ考えている。

「とりあえず、リュウガ君が入れるかきいてみる。あと何か手がかりがあるかどうか、事件の詳しい詳細もきいてくるわ。」

そう言ってジュンサーさんは走って博物館へ入っていつ：

「ああー！ー！？」

ドテッ

ジュンサーさんの声が裏返った。何もない場所なはず……なのに何故にそこで転けた！？ 周りにいた刑事や鑑識の人の視線が一斉にジュンサーさんのほうへ向けられた。まああんな変な叫び声をだし

たんだ。そりゃそうなるな。

「あ……は、恥ずかしいー！」

ジュンサーさんが赤面になり、超スピードで博物館に走っていった。バイクで登場した時は格好よかったんだけどな……。

「大丈夫か？ あの人……」

「警察なんだし心配することはないだろう」
全く安心できないんだが……。そう言えば

「マツバさん。何故あの時、ホウオウ像が盗まれることがわかったんだ？」

俺はさっきまで疑問に思っていたことを言う。

「それは、ライコウ、エンテイ、スイクンとホウオウの関係についてだ」

マツバさんは腕をくみ静かに呟いた。

「関係？ どういう意味だ？」

俺はライコウ、エンテイ、スイクン、そしてホウオウについてはほとんど何も知らない。知っていることは、この4体は伝説のポケモンということぐらいだしな。

「ライコウ、エンテイ、スイクンはホウオウを主とし、ホウオウを守護するポケモン。簡単に言えばこの3体はホウオウのボディガード的な存在なんだ」

マツバさんは腕をくみ、とても真剣な表情で語っている。

なるほど……ライコウ、エンテイ、スイクンはホウオウに深い関わりがある。それなら3体の像が盗まれたあとで、ホウオウ像を盗むと

予想できるな。

「この後も話が続けるのだがきくか？」

まだ何かあんのか。とりあえず

「ああ、一応きいとく」

と言っておく。マツバさんが真剣に語っているせいも、正直エンジュの伝説について少し興味がでてきたしな。特にホウオウについては……。

「約150年前、カネの塔、（現…焼けた塔）に雷が落ちたんだ。それにより大規模な火事がおこり……そしてそこにいた名も無きポケモンが3体死んでしまった。しかし数年後……見たことがない、ある3体のポケモンが目撃されるようになった。

ここからは推測になるが3体の主であるホウオウがその3体を哀れんでエンテイ、ライコウ、スイクンとして蘇生させた——それが僕やミナキ、そしてポケモンの伝説に詳しい学者たちが出した今の答えだ。でもさっき言ったとおり推測なんだけどね。

でもこれ以外もエンジュの伝説は沢山あるんだよ」

すげえな。そんな伝説があったのか……それにまだ伝説があるのかよ。そういや……

「ミナキって誰だ？」

「ミナキは僕の友人なんだ。エンジュだけじゃなく、各地のポケモン伝説を調査や研究をしていて、数年前からスイクンを捕まえるために、いろいろな街や村を旅してまわっているんだ」

……スイクンを捕まえるとか、なんて……無謀なチャレンジなんだ。

「つか伝説のポケモンのスイクンを捕まえるなんて無謀じゃねえか？」

俺は正直に思っていたことをぶっちゃけた。

「僕もそう思うことは何度かあったけど、でも彼は彼なりに頑張っているんだ。それに何度かスイクンを目撃したってきいてるし」

「それはすごいな。でも捕まえてはないんだな」

「伝説のポケモンだからな。そう簡単にはいかないだろう」

まあ確かにそう簡単に捕まったんじゃない、伝説もくそもねえな。それより

「ホウオウってどんなポケモンなんだ？」

俺は腕をくみながらマツバさんに質問する。

「ホウオウ……か」

マツバはいきなり天を仰ぎだした。マツバさんの顔が哀しそうな表情になってきた。まるで何かを遠く見つめているような……何故だかはわからんが……。

「マツバさん？」

「あ、ゴメン。ホウオウは、七色に輝く翼を持ち、世界中を飛び回っているポケモンなんだ。ホウオウもいくつかの伝説があって……例えば、生命の炎を司るとか、見たものは永遠の幸せが約束されるのか……」 “正しき善の心を持つトレーナーの前に姿を現し、その者の進む道を導かせる”……とかね」

何故かわからんが最後の言葉だけ哀しい表情から一転、不思議な笑みを浮かべながら言った。

「なんなんだ？ 『正しき善のなんたら』って一体どういう意味だ？」

俺は何故かマツバさんが放った最後の言葉だけ疑問に思った。

「フフッ、リュウガ君、真に受けなくていいよ。それは僕が勝手に考えた空想みたいなものだよ。他の2つは伝説として残っているけどね」

マツバさんが微笑みながら言った。いや……本当にそうなのか……。何故か……何故だかはわからんが、やはり最後に言った言葉だけが何か……何が引っ掛かる。もしかしたら空想ではないのか？ それとも俺の考えすぎか？

すると

「リュウガ君、ジュンサーさんが戻ってきたみたいだ」

マツバさんが博物館の入り口の方角に指を差した。その方向にはジュンサーさんがいてこっちに歩いてきてた。

「あ、リュウガ君、なんとか調査はできるようになったわよ。けどちょっと問題があって……」

おいおい、問題ってなんだよ！ 変な問題じゃねえよな……。

「なんすか？ 問題って」

心で思っていたことを言いたかったが、普通にジュンサーに質問する。

「まあ率直に言うとか、リュウガ君はマツバさんの一番弟子ってことで調査に協力できるようになったの。だからよろしくね」

「「ええ！？」」

俺とマツバさんが同時に驚く。

おい！ なんでそうなる！ そしてそうなった過程を教えてください！

「まあ、仕方がないな。よろしくなリュウガ君」

正直『嫌です』と言いたい。

「あ……ああ、よろしくお願いしま……す」と答えた。

「そういえばジュンサーさん。詳しい詳細もきいてくると言っていましたか、どうでしたか？」

マツバさんがジュンサーさんに質問する。

「それはこの博物館の事件現場である、4階の特別展示室についてから説明するわ」

ジュンサーさんはそう言い博物館のほうへ歩いて行く。俺とヘルガー、マツバさんもジュンサーさんの後へついていく。

「言い忘れたけど、ここ一応博物館だからヘルガーはしまってるね。特別展示室についたらだしていいから」

なんでそうなる！ と心の中でツツコんだ俺だった。

第23話：エンジュの伝説（後書き）

今回のエンジュの伝説はマンガやゲームを参考に書いています。若干作者のオリジナルも入っていますが、何か不振な点があってもあまり気にしないでくださいね。

更新についてですがやっぱり遅くなります。すいません。m（

）m

第24話：ネイティの特殊能力！？ 時空の断片発動！（前書き）

マアリ「作者さん（怒）」

リュウガ「おい！ クソ作者」

ハビト「お、お二人さん：顔が怖いよ、僕：何かした（汗）」

リュウガ「自分の胸にそのきたねえ手をぶち当てて考えやがれ！
ヘルガー！ クソ作者に向かってオーバーヒート！！」

ヘルガー「ヘルウウウウウウ！！」

ハビト「ノウエアアアアア○×△#£！！ 熱い！ 熱い！
死ぬウウウ！！」

リュウガ「チッ、生きてやがる」

ハビト「もう……死にかけて……ま……バタッ」

マアリ「リュウガ、少しやりすぎよ」

リュウガ「そうか？」

マアリ「仕方ないわね。ハピナス、卵産み」

ハピナス「ハッピーー」

ハビト「ふつつつかあああつ！！」

リュウガ「卵産みって人間を回復できたっけか？ それにここでマアリの手持ちのポケモンあかしたけどいいのかよ」

ハビト「気にしない気にしない」

リュウガ「さてと、とりあえず殺られたくなかったら更新が遅れた理由を話せ！」

ハビト「そ、それは…」

マアリ「続きは次回の「前書き」で。それでは24話の始まり」

第24話…ネイティの特殊能力!? 時空の断片発動!

ジュンサーさんに言われたとおり、一旦ヘルガーをモンスターボールに戻し、博物館内に入った。

この博物館は5階だてで、1階は主にお土産コーナーになっており、怒りまんじゅうや、モーモーミルクが入ったモーモーミルクッキーなどがお土産として売っている。

2階は歴史展示室、3階は美術展示室になっており、エンジュの文化、歴史についての資料や昔の工芸品や昔の有名な人が書いたであろうポケモンの絵や、アンノーンの文字で書いてある石板、ポケモンの像などが主に飾ってある

5階は会場となっているが今はほとんど使われていない。

そして：4階、ここがホウオウ像があった通称“特別展示室”だ。ここ行く前にあるのぼり階段には『関係者及び会員以外立入禁止』の札がかけてあり一般人は立ち入ることができない。

特別展示室は2、3階にあったものよりも、更に希少価値がある資料や工芸品が飾ってある。ジュンサーにきいたが、一応会員制らしいがこの館長曰く、信用している人意外は何があっても絶対にいれないらしい……。

今回はさすがに緊急事態らしく仕方なく、警察に調査してもらっているらしい。なのでホウオウ像の盗まれた場所の写真を撮ったり、犯人の痕跡がないか鑑識の人が調査をしている。とりあえずボールに戻していたヘルガーをだす。

「すげえな…ここやつ全部売ったら一生遊んで暮らせるんだろうな」

「ヘルウ！」

「リュウガ君、絶対に盗んだりはするなよ！」

マツバさんが少し強い口調で言った。

「俺はブレイドなんたらじゃないんですからやりませんよ」

「“ブレイドブラザーズ”だよ。名前ぐらいは覚えろよ」

人の名前とかもなんだけど、名前覚えるのは苦手なんだよな…。

「もしリュウガ君が盗んだら場合は私達警察が全力で捕まえるから！」

ジュンサーさん、別に盗むつもりはないが、正直さっきのあんたの転けた姿を見て、一瞬警察は大したことねえなって思ったよ。

「あの、ジュンサーさん、事件現場についたということで事件の詳しい詳細を教えてほしいんですけど」

マツバさんが言った。

「あ、ちよつと待っててね。すいませーん、とみざわ富沢さん。来てくださーい」

「事件の説明きいてねかよ」

俺はジュンサーさんにきこえないよう小声で呟く。

「あ、はい何でしょうか？ ジュンサーさん」

体型はポッチャリしていて、作業着を着ていて、眼鏡をかけた男の人、富沢さんがきた。

「事件の詳細のご説明お願いします」

「あ、事件の説明ですね。わかりました。発生時刻はおおよそ午前10時30分から11時にかけてでしょう。本来なら盗人は深夜の時間によく現れるものですが、どうやら今日は休館日で人があまりいない状態でしたので、そこを狙われたみたいですね」

「10時30分から11時ぐらいか。この間の時間帯は俺とヘルガーが交番にきたところか」

「あれ？ こちらのお方は？」

富沢さんがジュンサーさんに向かって言った。

「彼はリュウガ君といって、そちらにいるジムリーダーのマツバさ

んの1番弟子なんです」

ジュンサーさんがすらすらと答える。

「よろしく願います。リュウガ君も頭下げて！」

「いたあ、よ、よろしく願います……す」

富沢さんに向けてマツバさんが頭を下げた後、俺の頭を掴み無理矢理俺の頭を下げた。

マツバさん、力強すぎだろ！

「はい、こちらこそよろしく願います」

俺達に向かって会釈をした。

この人、俺とは違って礼儀正しいな。ああ、いい忘れてたが俺は普段礼儀正しくないからな、普段はな。もちろん仕事してつときは真面目君なつもりだ。つかこんなことしてる場合じゃねえ！

「率直に言うが富沢さん。犯人の痕跡はあるんすか？」

「ちよっとリュウガ君！」

俺は富沢に率直に言った。俺がそう言ったからかマツバさんが少し怒鳴った口調で言った。

まあ1番弟子がこんなでしゃばったことを言ったんだから怒鳴られるのは当然か。

富沢さんは眉間にしわをよせ、腕を組んで少しの時間何かを考えた後、目を開け、口を開いた。

「大変申しにくいのですが……残念ながらほとんど手掛かりになる痕跡が今のところ見つかってはいません」
なんだそりゃ！

「そいつらを……ブレイドブラザーズの臭いをおったり、監視カメラで見るなり方法があるんじゃないかねえのか！」

「それが……臭いのほうは全て消されているんです」

「ハア!？」

「やはりか」

「前と一緒ね」

上から俺、マツバさん、ジュンサーの順番に言った。

「マツバさん、ジュンサーさん、なんかこのこと（臭いが消されること）について納得されてるように見えるが……まさか、雷鳴寺、炎流寺、水連寺の時もそうだったのか？」

「そうなるな」

とマツバさんが

「……………」

汗をたらし、微妙にひきつった笑顔をでこつちを見ているジュンサーさん。

ハア…（ため息）

「あのお、言い忘れてましたが監視カメラも全て破壊されてえ……………」

……………。警察ってこんなにも……こんなにも……頼りねえのかよ……
「つか何故に臭いすら残ってねえ！　そして何故監視カメラが破壊されてるんだよ」

俺は富沢さんに疑問をぶつけるが

「目上の人なんだから敬語つかえよ。それでも1番弟子か！」

ボガア！

「いっでええ！　（つか　マツバさん！　これ演技だよねえ！　かなり痛いんですけど）」

マツバさんが俺の頭（つむじ付近）をおもいっきりグーで殴った。

「まったく……リュウガ君ったら……」

黙れ！　ジュンサーさん

「ええ、別に敬語じゃなくても構いませんよ」

富沢さん、あなた……優しすぎ。

「すみません」

俺は富沢さんに謝る。

「いいですよ。とりあえず話を戻しますが、まず臭いを消した原因がこの煙玉^{けむりだま}、我々は通称“スカタンボール”と読んでいます。このボールは地面に叩きつけると煙が立ち込めますがそれだけではありません。このボールは煙と同時にとても強烈な臭いを発生させます。そのせいで臭いが消されたのでしよう。

今は窓を開けかんきをしたので臭いがありませんが、ついさっきまではガスマスクや酸素マスクがなければ非常に苦しい状態でしたからですねえ。ええ、ちなみにこのスカタンボールは通常の煙玉にスカタンクの煙幕という技の成分と、尻尾のさきからでる酷い臭いの液体の成分を混合させたものですね。多分ブレイドブラザーズはこの煙玉を数十個は持っていたでしょう。ちなみにこれがサンプルのものです。くれぐれも落としたりしないように！」

箱から直径10センチぐらいの黒くて丸いボールを出して、俺に差し出した。なんか：普通に強烈な臭いがするんですけど……つか：触りたくねえよ！　そして富沢さんに一言言いたいことがある……。

話しなげえよ！ 絶対読者の皆さん飽きてるよ、そして何だよスカタンボールって……ネーミングセンスなさすぎだろ！ ……と

「ちなみに監視カメラの破壊については推測ですが、煙玉で視界がみえない状態で破壊したんだとすれば、“見破る”や“ミラクルアイ”を覚えたポケモンならば破壊は可能だと思います」

「ハア、駄目だな」

「結局手掛かり……なしか…」

「そうね」

マツバさんが呟いた後、ジュンサーが言った。

二人とも暗い表情である。

「ヘルガー、何か犯人らしき臭いは残っているか？」

「……………」

黙って首を横にふるヘルガー。

駄目だな……。

「ハア……タイムマシンとかないのかしら……。それで過去に行
つてくい止めることができれば……」

ジュンサーさん、あなた警察でしょ！ ついに現実逃避かよ……。

「タイムマシンなんて、未来からきた青いタヌキ型ロボットぐら
いしかもってねえよ」

「正確には猫型ロボットですがね」

富沢さん、そこツツコムところですか？ 確かにあれは猫型ロボッ

トだけど……ん……ちよつと待てよ！？

「ジュンサーさん！ さっき何て言いました？」

俺は強い口調で言う。

「え、ええ、確か……『タイムマシンとかないのかしら……。それ
で過去に行つてくい止めることができれば……』って言ったような」

「ありがとうございます」

「何か方法があるのか」

マツバさんが言った。

「ああ、出番だ、ネイティ！」

ボールからネイティを出した

ジュンサーさんの言葉であることを思い出したことがある。それは
ネイティがアカネのピッピを倒したあと見ていた“何か”

その後マアリはこう言った。『私にはこの先の未来を見てたように
見えたの』と……。

つまりネイティは過去や未来を見ることができかもしれない。

そもそもネイティの進化形ネイティオは過去や未来を見ることがで
きるらしく、なら進化前のネイティでもできる可能性があると推測
できる。

「ネイティ、10時30分から11時頃に、ここで起こった出来事
を見ることができるか？」

「ネー！」

ネイティが返事をした後、突然目が青白く光った。

こいつ…本当に過去や未来を垣間見ることができるのか？

すると

ズ……ズズズッ！

「あーうざったい！ もうガスマスクはずすわ！ どうせあの超く
せえ煙玉も持ってないし――

――私もガスマスクはずそつと。ここが特別展示室ね――

――オイラもはずしますか――

――僕もはずします――

――……――

「！？ なんだこの映像は……」

「へ…ヘルウ！？」

「この映像…：脳に直接送り込まれている…！？ まさかこれはネ
イティが見ているもの？」

「私にも見える…：まさかこの5人ってブレイドブラザーズ！？」

「見える？ 何がでしょうか」

富沢さんには送られてないんだ……。お気の毒だな。

「つかネイティってこんな能力をもっていたのかよ」

「リュウガ君のネイティがこんなことができるなんて……伝説のポケモンなら未しも普通のポケモンだぞ……ネイティはいつもこの“時空の断片”を見ているのか？」

“時空の断片”か……もし数秒後の未来の映像を見ながらバトルしたら……相手の出方もわかるし、ある意味最強だな。

「おい沙耶（や）はやく監視カメラを破壊してくれ。今言ったとおりもう煙玉はないんだ。さすがに見られたら不味い！——
——わかったわ。キル……ブツン——

あれ映像が消え……！？

「おいネイティ！ 大丈夫か！？」

ネイティが突然倒れてしまった。まさか自分が見てる映像を俺達の脳に直接送っていたから、かなりの負担がかかっていたのだろう。

「この状態じゃ無理だ。ネイティを休ましたほうがいい」

「でもこのままじゃ……正直ネイティに頼るしか、手掛かりがないわ」

どうすればいい……。確かにポケモンセンターにでも行って休まसानければ、でもジュンサーさんの言う通りネイティがいなければ多分ブレイドブラザーズの手掛かりはない……。ド畜生が……。

「ネ……イ……」

フラフラになりながらもネイティが立ち上がる。下手したらまた倒れてしまいそうだ。

「ネイティ、いいから休んどけ。すぐにポケモンセンターにつれて

いく！」

俺はいそいでモンスターボールに戻そうとするが：

『だ、大丈夫よ…だから…もう少し…まって、今何とかするから…』
！？　なんだ今声は？

「ネイティィィィィィィィ！」

「なっ…」

「これはまさか…」

「ま、眩しいわ」

「非常に眩しいです」

叫び声とともに眩い^{まやゆ}光りを放ち、そしてネイティの身体全体が光り輝いた。

第24話：ネイティの特殊能力！？ 時空の断片発動！（後書き）

ネイティの特殊技（オリジナル技）“時空の断片”を説明します。

この技は自分が垣間見ている過去や未来の映像を他人の脳に送り、見せる技です。

もちろんかなりエネルギーが消費するのであまり使えないですが…まあバトルでこの技を使用しないかもしれませんが（^| ^;）

ちなみにこの技の名前は半分ぐらい適当に考えました。おかしいかもしれませんがご了承くださいm（| |）m

第25話：進化の光（前書き）

リュウガ「25話だ。つーことで遅れた理由を教えろ！」

ハビト（作者）「それは…」

マアリ「次は助けないわよ」

ハビト「んにゅー」

リュウガ「お前はユウナか！（ちなみにk a r y uさんの小説に出てくるキャラクターだ）次、変なこといたらどうなるかわかるよな？」

ハビト「……………」

マアリ「話さないと、次は本当に命がないかもねー」

ハビト「わかりました。更新が遅れている理由は2つあります。まず電池パックが膨張しちゃって電池がすぐきれるんです。だから外出しながら携帯をいじるわけにはいかないんですよ（へーへ；）」

リュウガ「携帯ショップにいけ！」

ハビト「んなのわかってるわ！ もうすぐ行く！ あと2つ目の理由は……実は学生じゃないんです」

マアリ「それってまさか」

ハビト「それはご想像で」

リュウガ「……………なら小説書くな！」

ハビト「……………。すいません。ていうか！ 本当はこの小説30話ぐらいで終わらせる予定だったんだけど、全然終わらないよ（泣）」

マアリ「でもどういう結末にするかは決まっているんでしょ」

ハビト「まあね」

リュウガ「つか俺『後書き』に行くからよろしく」

ハビト「ええ！？」

マアリ「そういうことで25話はじまります」

第25話：進化の光

ネイティが光り輝いたと同時に徐々に：徐々にだが身体大きくなり

身体を纏っていた光りが消え、そして

「クワーーーー！ ネイティイイイオ！」

ネイティとは違い、身体が一段とでかくなり、体長は1、5メートルぐらいはあろう。トーテムポールみたいな形をした、精霊ポケモン：ネイティオ……。

「し、進化しやがった！？」

「このどたんばで進化か！？ 面白くなってきたな」

ネイティが進化したせいかな、冷静そうなイメージがあつたマツバさんが若干興奮ぎみだ。

「これが精霊ポケモンのネイティオ、とても不思議なポケモンね」

「まさかポケモンの進化を間近に見られるとは……光栄です」

ジュンサーさんは進化したネイティオの光景を不思議そうな目をして見て……そして富沢さんはそれを見て感動している。

「進化したっていうことは身体能力、体の大きさ、そしてネイティ
：いやネイティオが持っている特殊能力も桁違いにパワーアップし
ているだろう」

「つーことは、“時空の断片”も今以上に持続して使えるというこ
とか」

「時空の断片？ 確か僕が呟いたこと……それってネイティオの過
去や未来を他人に映像化して見せる技のことかい？」

「そうだが」

やっぱり少し変な名前か？

「僕的には名前があまりよくないような気がするが」

「名前の意味はわからないけど、私は別にいいと思うわ」

ジュンサーさん、それは誉めてんの？ けなしてんの？

「それよりネイティオ、もう一度時空の断片を使えるか？」

「……………」

俺がそう言うのとネイティオは黙ってコクリと首を縦にふる。そして
ネイティオの目が徐々に：青い白く光る。

そして

ズ…ズズズツ……キュイイーン！

キュイイーンという効果音とともに映像が直接脳へ送られてき
た。

—わかったわ。キルリア、念力よ—
—キル—

「!？　どこから現れた？」

突然沙耶と言われている少女の前にポケモンがあらわれた

「レポートか」

マツバさんが呟いた。

ズガー—ン

念力で監視カメラが破壊されてしまった。

—これでいいわね、ヤイバ兄^{にい}—
—サンキューな沙耶—

ヤイバ兄と呼ばれている少年の特徴は、俺と同じぐらいの年齢で黒髪で（俺から見て左）の頬に十文字の傷跡が残って、若干目付きが悪い。

一方、沙耶と呼ばれている奴の特徴は、見た目は9〜11歳ぐらい

の少女で、茶髪のセミロングである。普通に見ればどこにでもいそうな少女だ。

―オイラは来たのはいいけど、あまりやくにたたなかったよ…ゴメンよ―

―それは、僕も同じだよ―

二人の少年がヤイバに向かって謝る。

―ケン、トウ…そんなことはない！ お前達がしっかりと煙玉を的確なポイントで使ったおかげでばれずにこれたんだ。自信をもて自信を―

ヤイバはニコツって笑い、ケンという少年の頭を右手で、トウという少年の頭を左手で撫でた。

この光景を見るととてもじゃねえが泥棒をする奴らには見えない。

ケンという少年は、見た目は12、13歳ぐらいで、水色っぽい髪の色をしていて、そのうえに青色の帽子をかぶっている。

トウという奴の見た目は、ケンと同じぐ年は12、13歳ぐらいの少年に見える。黒髪で少し髪が長く、丸いメガネをかけている。

―そうよ、ケン兄とトウ兄は煙玉で私達を監視カメラに映らないようにして……―

―キルリアはサイコパワーで自分の周りに薄いバリアをはって煙玉の臭い成分を吸わないようにして、“マジカルリーフ”で的確に監

視カメラを破壊しただろ―
―なっ…ヤイバ兄っ―

マジカルリーフ…確か必ず命中させる技か。

「そうだったのか」

悔しそうに呟くマツバさん。

「富沢さんの言ったこと…外れたな」

「す、すいません」

別に謝らんでもいいんだが…。

―……………―

こいつだけ何も喋らないな。ちなみにこいつの特徴は、見た目は10、11歳ぐらいで、白い髪ロングヘアで青く透き通るような瞳をしていて、そして…何故かわからないがとても哀しそうな表現をしている少女だ。

―さて…ここに長居するわけにはいかない。沙耶、そのハウオウ像を―

―わかってるわ―

大きさは2メートル近くあるであろう、金色に輝いているハウオウ像がとても頑丈そうなケースに入っている。しかし、この状況でどうやってハウオウ像を盗んだんだ？ まあもうそろそろわかることだが…。

―キルリア、テレポ―トでホウオウ像を―
―キルウ―

シュン…

「何…」

「!？　ホウオウ像が…消えたわ」

ジュンサーさんがビックリしながら言った

『シュン…』という効果音とともにホウオウ像が消えてしまった。

「いや、違う」

マツバさんが冷静に言った。

シュン…

今度は『シュン…』という効果音とともに、沙耶の前にホウオウ像が現れた。

「…………。ポケモンを犯罪のために使うなんて…」
ジュンサーさんが呟いた。

—ありがとう、キルリア—

ブーーーーー！ ブーーーーー！

—ホウオウ像がケースから捕ったから警報器が作動したみたいだ。
出てこいスカタンク、臭いガスで俺らの臭いを消せ！—

ヤイバが焦りながら言った。

—ブアーーーー—

スカタンクというポケモンの口から黒いガスが出た。

—……………—

バタッ

—おい、イシト！ 大丈夫か？ 頼む死なないでくれえええ！—
—だ、だいじょうぶ？ 生きてる？ 生きていたら返事をして

――（泣）――

ケンとトウが焦りながら言った。

いや…多分スカタンクとかいう奴の臭いガスでも吸って気絶したんだろ！ 慌てすぎだろ……。そしてお前…イシトって名前か。つかお前一切役に立ってねえよ。来た意味ねえだろ！ と心の中でツツコミまくる。

「ハア…こんな連中を捕まえられねえとは、警察ってだめだな」

「……………」

俺が言ったことにショックだったのか、ジュンサーさんと富沢さん黙ってしまった。

「リュウガ君いいすぎだ！」

ボカツ！

「いてえ…」

マツバさんがまた俺の頭をグーで殴った。

ああいでえ！！（怒） 加減しろこの野郎……なんては言えねえよな…。ハア……。

…………だ、大丈夫…………――

イシト……お前喋れんのかよ！

―は…はやく、テレポートで、ポケモンの気配がする…―

「!？ ポケモンの気配？」

「ど…どういう意味？」

ジュンサーさんが驚いている。

「ポケモン気配か…。生まれつきそういう能力をもつ者がいるとわね……。小さい頃に僕の知り合いにもポケモンと会話をでき、操る能力をもつ者もいたな」

マツバさんが天井の方向を向き呟いた。

そんな能力を持った奴らがいるのか…。それにポケモンを操る能力を持つ奴なんて…。本当にいるのか？ マツバさんが嘘をついてるのか？ いやマツバさんの目を見るがあれば嘘を言っている目じゃねえな。

―ちっ、沙耶！ はやくテレポートを！―

―わかってるわ。キルリア、38番道路にある基地にテレポートを……ブツン―

バタッ

クソッ…やはり相当なエネルギーを使うのか、ネイティオはバタッ

と倒れてしまった。

「ご苦労さん、ネイティオ……ボールで休んでいてくれ。これで奴らのだいたいの場所はわかった」

ネイティオをボールに戻す。

「しかし、38番道路にある基地があるのはわかったけど、細かい場所はわからないし、探すとしても時間がかかるぞ」

「そのことについては目星がつかしました」

お、ほぼ空気状態に近かった富沢さんが喋った。

「富沢さん、今度はネイティオの見てた未来の映像が送られたみたいですね」

「ええ、マツバさん。今度はしっかりと送られた見たいです。それでは話を戻しますが、多分ジュンサーさんは分かるかと思われますが4年前にポケモン像や仏像を盗む事件十数件がありまして、そこでその人達が基地として残ってた小屋がまだ残っているなら、そこを基地として使っている可能性があります」

さすが鑑識だな。

「え……そんな事件ありましたか？」

「「……………」」」

この場に変な空気（性格には沈黙）が流れた。俺は……いやマツバさんも富沢さんもか。呆れて何も言えず固まっている状態だ。ジュンサーさん、あなた……警察ですよ？

すると

「グルルル、ヘルウウウ！」
「どうした！？ ヘルガー！」

突然ヘルガーが走りだし特別展示室の入口の扉に向かって走りだした。

「とりあえず落ち着——」

キキィ！

ヘルガーが突然急停止し、走りのを辞めてしまった。

「行きなり止まんなよ！」

「ヘルウウ??？」

ん？ 何故かヘルガー疑問符を浮かべている。ヘルガーの様子がおかしい？ いや、ヘルガーはそんな意味不明な行動をする奴じゃねえのは昔から知っている（だが、美人で可愛い人間の女が近くを通ったりすると意味不明な行動を起こすけどそれはいいとして）

つーことは考えられることは、ここに何者かがいた。

しかし博物館内に入ったなら普通は嗅覚がいいヘルガーは必ず気づくはず……。っていうことは……いきなりここに現れた？ ……

まさか“テレポート”か？ つまりテレポートでここにきて俺達のことを見ていたのか？ それでヘルガーがここにいた奴を察知した。ヘルガーにばれたからテレポートで何処かへ移動した。

まあ予想だがこうしか考えられない。それにテレポートを使うポケ

モン……、まさかあのネイティオが見せた映像にいた沙耶という少女のキルリア？

「ヘルガーここにいた奴って1人か？」

「ヘルルル」

首を横にふる。つーことは

「2人か？」

「ヘルウ」

今度はコクツと頷いた。
つまりここにいた奴は

キルリアと…

沙耶という少女

かもしれない。でももしそいつらが見てたとすればヤバいな。はやくあいつらの基地に行かなければ。

「富沢さん。あいつらの基地がわかるみたいなことを言ってたよな？」

「はい」

「速くいかねえとヤバいかもしれねえ」

とりあえず俺が予想したことをマツバさん、ジュンサーさん、富沢さんに説明した。

「確かにそうかもしれないな」

「でもあくまで予想でしょ？ そんなにいそがなくてもいいんじゃない？」

ジュンサーさん、あなた本当に警察かよ……。

「まだこの場を離れるわけにはいきませんがしかたありません。私も案内人として行かせてもらいます。ジュンサーさんは他の警察官の人に連絡してください。私達は38番道路で待っています」

「はい、わかりました」

そう言いジュンサーさんは走ってこの場を離れた。

さすがにまた転けねえよな……。若干心配だな。

「それでは私達は行きま——」

「ヘルウウウウウ！」

「どうしたヘルガー！」

ヘルガーが突然叫んだ。

今度はいったいなんだ。

「!? 富沢さん避けて、出てこい！ ゲンガー！ 富沢さんを——」

何かに気づいたかマツバさんが叫びだし、ボールからゲンガーをだした。

しかし

「あああああああああ！！！」

バタッ

「と、富沢さん！」

「ちっ！間に合わなかった…」

叫び声とともに富沢さんが倒れてしまった。そして富沢さんの方向をみると

「あれはキルリア！」

その場にはキルリアがいた。キルリアがいるということは

「催眠術よ、ただ眠らしただけ」

「お前は……」

マツバさんが悔しそうにそう言い自分の唇を噛み締める。

「クソッ…厄介なことになっちまったな」

そこにはブレイドブラザースの1人、沙耶がいた。

第25話：進化の光（後書き）

ハビト「何の用？ リュウガ」

リュウガ「とりあえずキルリアとスカタンクっていうポケモンを教えろ。俺はハウエンとシンオウのポケモンはわかんねえし」

ハビト「君、携帯もってるんだから自分で調べろ」

リュウガ「結局そうかよ……あとなんか特殊能力を持った奴がいるな。つか俺ってなんか特殊能力あんの？」

ハビト「確かに特殊能力をもつ者ができましたね。多分今後もでてくるかもね。あとリュウガ、君は普通の人間だから特殊能力はないよ」

リュウガ「……。結局かよ」

ハビト「まあそういうことだ。他に質問は？」

リュウガ「キャラクター紹介とかはやらねえのか？」

ハビト「暇があったらやる」

リュウガ「そうかよ……俺もう眠いから帰るわ、んじやな」

ハビト「それではまた次回」

第26話：脱出不可能？　そして…封印していたリュウガの過去（前書き）

ハビト「どうも、新しい環境に慣れない、暇がない、携帯がヤバイ、スランプの4連チャンで更新が遅くなっているハビトです」

マアリ「大変だね……」

リュウガ「なんかそこまで言われたら何も言い返せないのだが（汗）」

マアリ「今回の話って、この題名だと“封印していたリュウガの過去”って書いてあるけど、アカネちゃんのことではないよね」

ハビト「そうですよ。ちなみにこの話でその過去の一部を見せます……てかマアリはその現場にいたんだよね。なんのことはわかるよね」

マアリ「うん、わかるよ。でも正直これは、リュウガの過去の中でもかなりのの——」

ハビト「ネタバレ禁止!」

リュウガ「何故だ?」

ハビト「ここじゃあかしちゃダメだよ。面白くないし……。それにこの過去はリュウガだけじゃなく今後のヘルガーにも重要な鍵になるからね」

リュウガ「そうかよ」

マアリ「そういうことで、26話始まります」

第26話：脱出不可能？　そして…封印していたリュウガの過去

「大丈夫かー！　富沢！」

「なんだあの少女は！」

「うわああああ！」

富沢さん以外にこの特別展示室を調査していた鑑識の人達が冷静さを失ったか、いきなり騒ぎだした。そして3番目に言った奴が何故か変にウゼエのは気のせいかな。

「ちっ、クソ野郎が」

「悔しがっている暇はないよ、リュウガ君。ゲンガー、富沢さんを安全なところに。鑑識の皆さんはここから逃げて、他の警察の人に助けを求めるよう連絡してください」

マツバさんが冷静に対応する。まず眠っている富沢さんを、ゲンガーのサイコキネシスで俺達の近くの場所に移動させた。

それと同時に鑑識の人達が扉のほうへ逃げていく。よしこれでなんとか――

バーーン！

「いた……なんだ、何かにぶつかったような」

「これは……透明の壁？」

「うわああああ！　僕の顔面があああ！　鼻血がああああ！」

透明な壁？　どういう意味だ？

冷静に考えろ……つか三番に言った奴がくそウゼエ！

「その透明の壁の向こうをよく見なさい」

沙耶が言った通り、壁の向こうを全員で凝視する。

するとある1体のポケモンがそこに立っていた、そいつは：

「バリヤードか…」

マツバさんが呟く。

「そうよ、この透明な壁は向こうにいるバリヤードが“バリアー”
という技を使って作りだしているもの」

なるほどそういうことか。

「ならばっこわすだけだ。ヘルガー、火炎放射」

扉を塞いでいる透明な壁に火炎放射を放つが…

…壁が壊れねえ！

バリアー

「無駄よ…この透明な壁は何重に重ねて頑丈にしているの、生半かな攻撃じゃ壊れないわ。それにこの透明な壁はこの特別展示室全体にかけているから、あっちにいるバリヤードを倒さないかぎり脱出不可能よ。脱出しようなんて思わないことね」

そうかい、それなら火炎放射より強力な技をぶつけるだけだ。

「ヘルガー、その壁に超フルパワーでオーバーヒートだ」

「へエエエー！ルウウウウウー！」

火炎放射より更に強力なオーバーヒートを扉の方向の透明な壁にぶ
つぱなした（放った）。そのせいか、強力な爆発が起り爆煙が発生
する。これであの壁をぶっこわすことができたか？ そう思ってい
ると徐々に煙が晴れ見えてきた。

「だから無駄って……!? 嘘……ヒビが!?!」

「ちっ、ヒビが入っただけか」

沙耶は透明な壁にヒビが入ったことに驚き、俺は壊せなかったせいか少し悔しがりながら言う。

「悔しがることはないよりユウガ君、ヒビが割れたということは、もうすぐで壊すことができるはずだ。ゲンガー、気合い玉だ!」

「ゲェーンガー!」

ゲンガーの掌からオレンジ色の球状のエネルギーが現れ、それをヒビが割れた透明な壁の方に放った。そして、俺はそれを見てあることを閃いた。それは…

「威力は弱くなるが仕方ねえ、オーバーヒートだ。ゲンガーが放った気合い玉にぶつけろ」

「ヘールウウウウー!」

さっきより若干威力は低いけど、まだ火炎放射よりは強力だ。しかもオーバーヒートが気合い玉にぶつけて、気合い玉とオーバーヒートとが交わり、合体した。

「こ、これは…」

沙耶が驚きの表情を見せる。

「しいていうなら“炎の気合い玉”だ」

「考えたねリユウガ君、これならいける」

「させない! サイコキネシスで止めて!」

キルリアのサイコキネシスで炎の気合い玉の勢いを殺そうとしてるんだろうが、威力が強力すぎたのか止めることができねえみたいだ。そのままいきやがれえええ!!

ズガーーン!

爆煙が発生し、まだよく見えない…。

「いったか」

「そろそろ煙が晴れるよ」

マツバさんの言うとおりで徐々に煙が晴れてきた。

すると

「よし、鑑識の皆さんはやく逃げて」

「ヘルガー、バリアードに向かって火炎放射」

扉を封鎖していた透明な壁に人が通れるぐらいの穴があいた。そのおかげでバリアードを防ぐそのところの壁がなくなり、そこに火炎放射をくらわした。その後、扉のほうへ向かって鑑識の人達が逃げ出す。

「そうはさせないわ。サイコキネシス」

「それはこっちのセリフだよ。こっちもサイコキネシスだ」

ゲンガーとキルリアが放ったサイコキネシスどうしが相殺し、打ち消しあった。よしこれで逃げ……

「あ…」

「ちくしょう」

「うわあああああああ！」

逃げ出すため走っていた鑑識の人達が、透明な壁にあいた穴を通ろうとした瞬間、自分達がいた特別展示室のほうへふっとばされてしまった。

「残念ね、サイコキネシスを指示したのはキルリアだけじゃなくてよ」

つーことはバリヤード！

「バリ バリー！」

バリヤードが扉のところへ立っていた。クソ、火炎放射だけじゃ倒れなかったか……迂濶^{うかつ}だった。クソ野郎が！

「鑑識の皆さん、大丈夫ですか！」

マツバさんが心配そうに叫ぶが、全員応答がない、どうやら全員気絶した、いや……1人だけ気絶していない奴がいた。さっきから何かと変にウゼエ奴だ

「くっ…まさかこんな、ところで……娘を…娘を頼……」

バタッ

ここですったことを言おう。

お前の娘なんてしるかボケ！　そしてお前は永遠に気絶してろ！

「ゲンガー、この人達を」

「ゲェー」

サイコキネシスで富沢さんが寝ている近くに鑑識の人達を移す。くそ…もしネイティオが倒れていなかったらテレポートでこの人達を安全なところに移動させて、俺達もこんなところ脱出してんのにな。仕方がないけどな、ネイティオは頑張ったからな。その分俺達が頑張るしかねえ。

「バリエード、壁を修復して」

「バリ」

沙耶が指示すると、あっという間に壁が修復されてしまった。くそ、させるか！

「ヘルガー、もう一度オーバー」

「やめるんだ。リュウガ君、ヘルガーはオーバーヒートを2度も使っているし、その技は使えば使うほど威力が下がる技だ。それにヘルガー自身にも負担が――」

「うるせえ！　あんなガキなんかに思い通りにされてたま――」

「いい加減しろ！　リュウガ君！　もっと冷静に物事を考えるんだ！　そんなんじゃないの少女の思い通りだよ！！」

普段冷静なマツバさんが俺に怒鳴った。俺はマツバさんに怒鳴られたあと、顔面に目が覚めるほどの一発をにくらった感覚になっていた。その後で俺は何故か――あの自分の中で封印していた記憶を思い出してしまっていた――

《——戦闘不能!? いや違うこれは……》

審判が焦った表情になる。

《ミント…ねえミント、起きてよ……ねえミント……お願いだよ…
ミントオオオ!》

その少女は黒焦げになっているミントと言われているポケモンを抱き抱え泣き叫んだ。

《速くジョーイさんをこのままじゃ——が》

《ミントオオオ! 起きてよー! 目を覚ましてー!》

俺はその光景を黙って見ているしかなかった。これは俺と……デルビルが…やってしまったことなのか

《……………》

そんな、俺はポケモンを……ポケモンを!?!?》

そうか……そうだ……俺は、あの10歳の時を境さかいにあの普段冷静さを意識してして物事を考えるようにと——そしてその後14歳の時のアカネ戦も冷静さを失ったせいで負けてしまい絶対に冷静さを失ってはいけない、と覚悟をきめたのに——俺は……

「すまない、マツバさん。俺は……」

「大丈夫だよ。それにあの少女らを倒すことができれば、あの壁は消える。そんな難しく考えるなよ、君らしくないよ」

さっきとは表情が一変してマツバさんの表情が優しい笑顔になり、俺の左肩をポンツとたたいた。その言葉はとても温かく、俺の心を覆っていた靄もやがその言葉で全て消えてしまったようだった。マツバさんはとても頼りになる人と同時に尊敬する人にもなった。俺もこうなりてえなと心から思った瞬間だった。

「マツバさん、あいつらを捕まえて、速くポケモンの像を奪還しよう」

「そうだね」

「話は終わった？」

沙耶がこっちに向かって言った。

「ああ、終わったぜ。覚悟しておけよ、お前なんてとっとと捕まえてやるよ」

「リュウガ君の言うとおりで。それに1つ質問がある。何故君はここに戻ってきた？」

マツバさんが言った。

「……いや、マツバさん、多分教えねえと思うよ。つか教えたらバカだろ」

「一応きいただけだよ。答えないのくらいはわかるよ。それに少し考えがある、ちょっとみみかして――」

俺とマツバさんは相手にきこえないようにひそひそと話す。

「そんなの教えわけないわ……。それにこそそ何喋っているのよ」

「ええ！？ ヘルガーがそんなこと」

「できればゲンガーがここでその2つの技を使用するからあとは作戦通りで」

「りよ…了解、ヘルガーわかったか？」

「ヘルー」

「さっさからこそそと……キルリア、そこの2人にサイコキネシス！」

「ヘルガー！ 俺とマツバさんを守ってくれ」

俺とマツバさんの変わりにヘルガーがサイコキネシスを受ける。だけれどヘルガーは悪タイプなのでエスパークタイプのサイコキネシスは効果がない。

「いきなり攻撃しやがって、このクソ女が。まあいいがお前ききてえことがある。お前ら…気配や臭いを消してどこに“隠れていた”俺は沙耶に向かって質問する。そして質問と同時にヘルガーに火炎放射を放つ準備をするようアイコンタクトをとる。

「……。仕方ない、そのことについては教えてあげるわ。これはキルリアの能力の1つ“サイコハイド”よ」

「「サイコハイド？」」

俺とマツバさんが同時に言った。サイコハイド……きいたことねえな。

「キルリアのサイコパワーで私達の姿や臭いを消し、隠れることができる技よ。でもこの技は結構集中力があるの……それにキルリアだけじゃなく私にもその技をかけなければいけないから、連続10分から20分が限界……」

「つまり限界がきたから技が解けてしまい、リュウガ君のヘルガーに感知されたということだね。それにこれは予想だがバリヤードもサイコハイド同等、もしくは近い能力をもっていて、何処かに隠れていた。そうだね？」

「……まあ、そうなるわね」

さすがマツバさんだな。だてにジムリーダーをやってるわけではねえな。つかバリヤードもか……。ヘルガーが気づかないわけだな。さてと、そろそろ作戦開始とするか…。

「しかし何故お前らがこんな盗人的なことをやっていやがる？　それとお前…何歳だ？　実はその容姿で18歳てきなパターンとかはねえ——」

「んなわけないでしょ！！　私は10歳よ！」

沙耶が大声で叫ぶ。

「んなの見ればわかる」

「なんで質問したの！？　あんたバカなの！？」

「（ああ、怒ってるな。もう少し挑発してみるか）バカにバカとは言われたくねえよ。とりあえずめんどくせえからとっとと警察どもに捕れ！　そして速くポケモン像を返せ、この糞ドチビ女」

「……………（怒）」

ブチッ

なんか変な効果音とともに、沙耶の表情が一変して笑顔になった。しかし裏腹に両手の拳を振るわさせている。多分……内心キレてるんだろうな。あんなに挑発したしな。しかもキルリアは沙耶を見るなり、汗をたらし、少し困った表情になっている。

「キルリア……この人らを殺すつもりで殺りなさい」

「キ……キル……」

沙耶……キャラ変わりすぎだろ。キルリアが困っているぞ。

「くらいなさい！ サイコー——キルリア！？」

突然キルリアの背後からゲンガーが現れ、キルリアに攻撃した。

「“かげうち”さ」

マツバさんが口元に怪しげな笑みをうかべた。かげうちは、自分の影を伸ばして相手の背後をつく先制攻撃技だ。いまのはあきらかに不意打ちだな。

「っ……あなたジムリーダーよね？ 卑怯じゃない！」

「卑怯？ これが僕のバトルスタイルでね」

「ならキルリア——！？」

「キル——！」

「よくやった。ヘルガー」

マツバさんと沙耶が話し合いをしている隙に、沙耶にさとられないようヘルガーに火炎放射を支持をして、キルリアにくらわしたのだ。

「先に言っておくが、これが俺のバトルスタイルだ」

さっきからあの10歳の女にやられっぱなしだったが、もうこれで終わりだ。ここからは反撃開始だ！

第26話：脱出不可能？　そして…封印していたリュウガの過去（後書き）

これでリュウガが過去に何をしたかわかったかもしれませんね。

あとこの話ででてきたオリジナル技を紹介します。

サイコハイド

使用者…キルリア

サイコのパワーで自分の姿、臭いを消してしまい、他人に気づかれないようにする技です。この技の使用者の近くにいればその人にもこの技をかけることができるが、そのぶんエネルギーの消費は激しい。でも熱感知や赤外線とかを使えばわかつちやいます（笑）
一応姿と臭いを消す技なので……

第27話：反撃開始！（前書き）

リュウガ「ああ、更新遅いな」

マアリ「確かにね。でも仕方ないよー、最近本当にヤバいみたいだしねー」

リュウガ「だから今回は『前書き』にきてないのか？」

マアリ「それはわからないねー。あと『今回はこれを発表して』とハビちゃんからメモもらったよー」

リュウガ「どれ…メインキャラ5人の身長…どうでもよくねか？」

マアリ「確かにそうかもね。でも発表しまーす。えーと

リュウガが175cm

私が162cm

ゴウ君が178cm

カズが169cm

リコナちゃんが149cm

だっぺー」

リュウガ「リコナ…小せえな」

マアリ「リコナちゃんは可愛いから大丈夫。でも、詳しいキャラクター紹介をやるみたいなのをハビちゃんが言っていたしー、詳しくはそっちのほうでやると思うからー」

リュウガ「奴なら、やるかどうかかわからんがな」

マアリ「それでは127話始まり〜んにゅ〜」

リュウガ「『んにゅ〜』使いすぎだろ。それユウナのやつなのに…」

第27話：反撃開始！

よし、火炎放射命中。これであのキルリアの野郎を……

「残念ね」

「ちっ！」

そこには火炎放射をくらったはずのキルリアが立っていた。しかも無傷で……

「リュウガ君、ヘルガーの特性って“貫い火”かい？」

「ああ、そうだが」

「やはりか…キルリア無傷の理由、それは特性の“トレース”のせいだよ」

トレース…確か相手と同じ特性になることができるんだったな。

貫い火は炎のタイプの技を無効化し、吸収して、炎タイプの技を強くする効果がある。つまり今のキルリアには炎タイプ技が通じないか……ああ、クソめんどうだ。

「さすが、ジムリーダーね。ヘルガーの特性が早起きだったら危なかったわ。でも特性は貫い火だったわ。キルリアには炎タイプの技はきかないわよ」

んなことは、わかってる。なら炎タイプ以外技を使うまでだ。

「ヘルガー、スモッグだ」

「ヘルウウウウ」

ヘルガーの口から出た黒い毒性のガスをキルリアのほうへ放つ。

「キルリア、テレポート」

シュン…

『シュン…』という効果音とともにキルリアがどこかへ消えてしまった。

でもこういうパターンは、相手の隙をつくためだいたい背後に現れる場合が多い。

「ヘルガー、背後を警戒しつつ、火炎放射を放つ準備をしろ！」

「ヘルー」

ヘルガーが返事をする。よし、これでいつ背後に現れても対処できる。

「残・念・ね。現れるところは――」

シュン…

「ゲンガーの後ろよ。くらいなさい、サイコキネシス！」

これはヤベエかもな。大丈夫か？ マツバさん。

「何！？　しまっ……」

なんて言うと思ったかい？　ふいうちだ！」

ゲンガーが瞬時にキルリアの背後に移動して攻撃をくらわし、キルリアをぶっ飛ばした。

確かふいうちは、相手が使う技が攻撃技だった場合、相手より先に攻撃することができる先制攻撃技だったな。

「攻撃をする隙は与えないよ。シャドーボール」

ゲンガーの右の掌てのひらと左の掌の間から黒く渦巻く球状のエネルギー

が現れ、キルリアの方向へ放つ。

「こっちも、シャドーボールよ」

キルリアも負けじとシャドーボールを放ち、シャドーボール同士がぶつかり合った。

「ヘルガー、ゲンガーが使ったふいうちとシャドーボール、ちゃんと頭にインプットしたか？」

「ヘルー」

ヘルガーが返事をする。

俺とヘルガーが喋っているうちに、シャドーボール同士が相殺して、煙が発生した。

「リュウガ君！」

「ああ、わかつている。かぎわけるから——」

「そうはさせない！ ヘルガーにマジカルリーフ！」

沙耶が大声で言ったせいで、俺の声がかき消された。ヘルガーに俺の指示がきこえたか心配だな。

「煙が晴れてきたね」

「ああ」

マツバさんの言うとおりで煙が晴れてきた。

するとそこには……

「良くやった、ヘルガー」

「ヘルウウウ！」

「キ、キルリア！？」

沙耶が焦った口調でそう言い、キルリアの近くにいく。そこにはヘルガーがその場に立ち、キルリアが床に倒れてた。

「キ…キル」

キルリアは『大丈夫』と言ったのだろうか？ フラフラになりながらも立とうとする。まあポケモンの言葉なんてわからねえがな。

「“ふいうち” 成功だね」

「ああ、まさかマツバさんの言うとおりになるとはな」

多分言っている意味がわからんだろう。

前回、マツバさんこそ話をした内容を言おう。

「できればあの沙耶という少女に挑発してくれないかい？」

「何故に？」

「相手はなかなかの腕はあるが、まだ子供だ。挑発なんて造作もないだろ。冷静さを失わせて、隙をつくためさ。あと君のヘルガーってふいうちやシャドーボールという技って覚えている？」

「いや、覚えさせてはないはずだが」

「そうか…ならヘルガーにその2つの技を頭にインプットするように指示してくれないか。もし僕の勘があたっていればヘルガーの基本能力が高く、それにこの2つの技を習得できるレベルまで達していると思う。多分、見ただけヘルガーは2つの技を使用できるだろう」

「ええ！？ ヘルガーがそんなこと」

「できればゲンガーがここでその2つの技を使用するからあとは作戦通りで」

「りよ…了解、ヘルガーわかったか？」

「ヘルー」

まあこんな感じの会話だ。

「…………。その2人！ 1VS2なんて大人げないわよ。1VS1で勝負しなさい！」

沙耶がしかめっ面で叫んだ。

「盗人の分際で勝負もクソもあるかよ、アホ。この——」

「わかったよ。大人2人が子供1人を相手にするのはフェアじゃないからね。ということでリュウガ君よろしく」

「マツバさん…まだ言いたいこと言ってねえ、つか俺は16歳だよ。大人じゃねえし！」

と小声でマツバさんにツツコミをいれる。

「気にしないでくれ。それにこれなら周りの展示物を破壊しようとしてもゲンガーのサイコキネシスで防ぐことができるからな」

マツバさんが沙耶にきこえないよう小声で——。

「今よ、キルリア、シャドーボール」

「ちっ、ヘルガー！ よけろ」

「へ、ヘルー」

なんとか間一髪シャドーボールを避けたヘルガー。人が話し中にやりやがって…。

「ヘルガー！ スモッグからかぎ分ける。そしてキルリアに突っ込

め。噛みつく攻撃！」

本来攻撃技であるスモッグを使ってヘルガーの姿を隠し、相手に見えなくさせ、かき分けるで相手の位置を感知。そして噛みつくで奇襲をかける。

「サイコキネシスでスモッグを払い、そのままヘルガーに10万ボルト！」

ヤベエ。スモッグが払われてヘルガーの姿が……さらに10万ボルトかよ。

クソ、ちょっと賭けになるがしかたねえか……。まあ失敗したら、許るしてくれ、ヘルガー。

「とりあえず、突っ込め！」

「へ……ヘル!？」

ものすごく『テメエバカだろ!』といったげそうな表情をしながらもキルリアの放った10万ボルトに勇敢にも突っ込む。

「ヘルウウ！」

「!？」

苦しそうな表情をしながらだが、10万ボルトをくらいながらキルリアに接近する。沙耶も若干ながら驚いてる素振りを見せる。

「10万ボルトで体内にある電気を牙に集中しろ! 雷の牙！」

「技（10万ボルト）を出すのをやめて! キルリア避けて」

遅いぜ! 後は雷の牙が発動するかだ。

「ヘル……！」

「キ、キル……！」

沙耶の指示が遅れたか、雷が牙に纏った噛みつく攻撃……雷の牙が右腕に命中する。よし……成功だぜ。

右腕を噛まれたキルリアは、雷の牙により痺れながら悲痛に叫ぶ。まあ10万ボルトをくらいながらの雷の牙だからかなりのダメージだろうな。

つかその前に、こいつ……普通に雷の牙を使いやがったよ。適当に思い付いたこと言っただけなんだけどな。まあいい

「そのままぶん投げろ」

噛みついてるキルリアをぶん投げ床に叩きつけた。

まだ相手は体勢を立て直していない。よし、ふいうちが成功したなら

「とどめだ。ヘルガー、シャドーボール」

口元に黒く渦巻いた球状のエネルギーが形成され、それをキルリアの方向へ放つ。

よし成功……ん!?

ヘルガーが放ったシャドーボールは徐々に勢いがなくなり、小さくなり……キルリアに到達する前に消滅しやがった。

「……………」

「失敗かよ!」

「シャドーボールはまだはやかったかな……」

おいおい……まあとどめはさせなかったものの、雷の牙の追加効果でキルリアは麻痺状態で動けなくなっている。

「これで終わりだよ」

「つーことだ。何故ここにきたか目的を話しやがれ」

「フフッ」

俺は強い口調で言う。しかし沙耶は何故か口元に手を近づけ薄ら笑いをする。

何故だ? 何故この状態で笑っていやがる……キルリアは動けないはずだし……何をたくらんでいやがる。

するとキルリアに近づき

「これかしかないけど、食べて」

キルリアに木の実を2つ与えた。するとキルリア身体の傷が少し回復し、ついでに麻痺状態が治ったのだ。

「黄金の実と、麻痺治しの実か」

マツバさんが呟いた。

黄金の実はポケモンの体力を回復させる木の実で、麻痺治しの実
は名前通り、麻痺状態を回復させる木の実だ。

「フフフフツ」

今度は、いきなり薄気味悪く笑った。

つか何がおかしい。ついに頭までバグったかアイツ…

「そんなに、笑っていられる状態かな？」

マツバさんが冷静に言った。

「いや頭がおかしくなったんだろう。可哀想な奴だな」

「誰が可哀想な奴よ！　ただあなた達がキルリアの必殺技で倒されることを思うとつい笑っちゃって」

俺達が倒される？　確かに今は1対1で勝負してるが、事実上はマツバさんがてをだしてないだけで2対1だぞ。つかマツバさんなんてジムリーダーだぞ。そう簡単には負けはしねえだろうし……

まさか…

「お前、本当に頭が——」

「だから違うわよ！？」　仕方ないわ。これから見せてあげる。キルリアの必殺技…キルリア、準備はいい？」

「キル—」

キルリア目を瞑り、両手を胸にあてる。

「ゲンガー、油断するな」

「ヘルガーも気を付けろ！」

ヘルガーとゲンガーは戦闘体勢にはいる。

「キルウウウ！」

キルリアが突然目をキリツつと開き、そして叫ぶ。
いったいどんな技がきやがる！

「いくわよ、キルリア“サイコフューー”」

バシッ！

「「「!」?」」」

突然、人が現れ沙耶の右腕を掴む。そいつの周りには、ヨルノズクとユンゲラーもいる。

しかもそいつには見覚えがある。

確かネイティオの時空の断片で見せてくれた時にでてきた……確かポケモンの気配がわかる少女……

「イ、イシト!」?

突然イシトが現れた。いきなり現れたせいか沙耶も驚きながら言った。

キルリアの必殺技にイシトの登場。もしキルリアの必殺技とやらがとんでもない技なら……それにイシトも……これは油断できねえぞ……。

第27話：反撃開始！（後書き）

最近本当にヤバいハビトです。キャラクター紹介はもう少し話が進んだらやります。でもこの調子じゃヤバいですけどね……（一・一；）

あああああ！ 学生に戻りたいよー！

第28話：人質（前書き）

ハビト「更新〜♪」

リュウガ「なにが更新だ！ お前2ヶ月何してやがった！」

ハビト「い、いやあ…」

ゴウ「言わないと殺るぜ」

ハビト「マアリ…助けて…」

マアリ「大丈夫♪お墓参りならするから」

ハビト「イヤアアア！」

リュウガ「ヘルガー、雷の牙」

ゴウ「オーダイル、馬鹿力だぜ！」

ヘルガー「ヘルウウウ！」

オーダイル「オーードーイルー！！！」

ハビト「ギャアアア！ し、痺れ、イヤアアアアア」

マアリ「久しぶりの更新だけど、とりあえず28話始まり」

第28話..人質

「イシト…なんでここに!?!」

慌ただしい口調で言う沙耶。

確かに何故ここに……………?

確か部屋全体にバリアがはってあるしな…。見たところユンゲラーがいるってことはポケモンの気配とやら感じて、感じた場所をユンゲラーに指示し、レポートでここにきたって感じだな。つかこれしか考えられないが……。

「ただ…キルリアの気配が…弱くな…ったから……この…戦いを…止めに……」

なんだ? 沙耶に加勢しにきたわけじゃねえのか。

「大丈夫よ。今あの2人を倒すわ! キルリアの必殺技で」

「ダメだよ……それを使って…2人を倒す…前に……キルリアが倒れたら……」

「っ! 大丈夫よ」

若干言葉を詰まらせる。

「たく…何が大丈夫だよ。なんならその必殺技を使えよ。まあ使ったとしても無意味だろうがな」

俺は沙耶に挑発する。

例えヘルガーやマツバさんのゲンガーがキルリアの必殺技で倒されたとしても、俺にはまだオオタチやポツタイシやエアームドが手持ちに残っているし、マツバさんもジムリーダーだし、まだ手持ちのポケモンはいるだろう。

それに、沙耶は見たところキルリアとバリヤード以外に手持ちのポケモンはいなさうだな。

「うるさいわよ! いくわよ! キルリア、サイコフューー!」

.....。

あれ、沙耶の動きが…いや違う。

「ユンゲラーの“金縛り”か」

マツバさんがボソツと呟いた。それをきいて俺はユンゲラーの方向を見る。

「……………」

ユンゲラーは黙って沙耶の方向を向き何かを念じていた。

「○×△£%#!」

金縛りをくらっている状態で必死に抵抗し、もがいている沙耶。

『放して！ 金縛りをといて！』とでも言っているのだろう。わかんねえけど。

「んっっ……………はぁー！ ……何すんのよ！ イシト！」

「だって……………仕方ない…よ…こう…やって…とめ…るしか……………それに…大丈夫……………ユンゲラー…例の人を…テレポート…」

シュン

『シュン』という音とともにウンゲラーの目の前に人が現れ、空中から床にストンと落ちる。しかもその人とは――

「ちっ！」

「くっ…そんな！」

俺は舌打ちをし、マツバさんは眉間にしわをよせ、右の拳を握りしめている。

そう…その人とは…。

「「ジョーイさん!？」」

床にはジョーイさんが倒れていた。眠らされてるのか、それでも気絶してるのかピクリとも動かない。

これはかなりヤバイ状況だ。まずはジョーイさんの状態もだが…

「これは、つまり人質ってこと？」

マツバさんが少し慌ただしい口調で言った。さすがにこの状況のせいか…冷静なマツバさんも苦い表情をして、少し歯をくいしばっているように見える。

「察しがいいわね。そうよ! そうよね? イシト」

「……………」

黙って首をコクツと縦にふる。

沙耶…そこはお前が答えるところじゃ…………つか

「お前が威張るなよ。クソチビ女が! ととっとジョーイさんを解放しやがれ」

「フフッ、果たしてそんなこと言っている余裕があるかしら? キルリア」

沙耶が指をパチツと鳴らすと、キルリアがジョーイさん向かってサイコキネシスを使い、空中に浮かばせる。

「この人がどうなってもいいのか・し・ら・ね」

口元に不適な笑みを浮かべ言う沙耶。

クソ野郎が…こうなったら手の出しようがねえ。どうする…………。

「くっ…」

マツバさんも悔しそうな表情になる。

「フフッ、手段がないみたいね」

「この人は……預かるよ……行くよ……ユンゲラー……ヨルノズク」

「ちっ、マツバさん……なんとかなんねえのか！ このままじゃ……」

「わかってる……わかっているがジョーイさんが人質に捕られているし、それに……」

俺とマツバさんで奴らにきこえないよう、小声で話す。

「じゃあね」

沙耶がこちらの方を向いて口元に笑みを浮かべ、軽く手をふってきた。

余裕ぶっこきやがって……。

「ユンゲラー………」

イシトがそう言い、自分の後方にいるユンゲラーの方へ視線を向ける。

その時……

「今だ！」

！？

マツバさんの掛け声とともに、キルリアの影からゲンガーがでてきた。かげうちだ。

「あっ！」

沙耶も急なことのようで反応出ていない。

まったく…マツバさんはイシトが隙を見せた瞬間を狙っていたのか。さっきまでの表情は演技か。敵を騙すならまず味方からってか？でもこれで――

！？　なんだと…

「ギ…ギェ…」

キルリアの背後をついたゲンガーの動きが突如とまる。

「何！？」

さすがにマツバさんも驚く。

「僕が…ユンゲラーに…言ったのは…サイコキネシス…、あなたが…狙っ…て…いたのは…わかって…いた…僕は…ポケモンの気配が…わかるんだ…つまり…ゲンガーが…何を…するかも…感知…できる」

「ぎ、残念ね！」

沙耶の口調が若干慌ただしい。

ちっ…イシトがいなかったら、いやあの能力がなかったら…。

「……………」

マツバさんが目を瞑り顔を下の方に向ける。これは演技ではない。本当に打つ手がなくなってしまったんだ。

クソ…本当にこのままじゃ、ジョーイさんが人質にとられ…ポケモン像を取り返すことができない！！

諦めるしか…

『オオタチ、ポツタイシ、エアームド、の技を――イシトに』

声…きいたことが……!?!? まさかネイティオ!?!?

俺は腰のベルトについている、ネイティオが入っているモンスターボールを見る。

『早くしないと……手遅れに』

ガタガタガタガタ

声が聞こえた後、ネイティオが入っているモンスターボールが激しく揺れる。

「だけど下手したらイシトが死ぬかもしれねえぞ」

『大丈夫：それに早くもう時間がない』

「ぐずぐずはしてらんねえし、やるか！」

「リュウガ君？」

マツバさんが俺に話し掛ける。まあ一人でブツブツ喋ってるようにきこえて疑問を感じ話し掛けたのだろう。実際にネイティオの声はきこえていないしな。

俺は右手でモンスターボールを2つ、左手でボールを2つ、計4つ取り出し、ボールの開閉スイッチを自分太ももにぶつけ、ボールをコンパクトのサイズから普通の状態に戻し、ボールを投げオオタチ、ポッタイシ、エアームド、そしてネイティオを出す。

「ネ…ネイ」

さつき時空の断片を使ったせいか、やはりネイティオは苦しそうだ。

「何をする気！？」

「……………」

沙耶とイシトが身構える。

「こうするつもりだ。オオタチは捨て身タックル、エアームドはブレイブバード、ポッタイシはドリルアクアジェットだ！

死なない程度に：（小声）ネイティオは休んでろ」

オオタチ、エアームド、ポッタイシがそれぞれの技でイシトに向かって攻撃する。

本当は人相手に攻撃なんて、トレーナーとしては禁止行為であるが、どうせ俺はトレーナーじゃねえし、状況的には：仕方がねえ！！

「いやややあ！ こっちくるわよ！ イシト！」

「沙耶：ジョーイ：さんを」

「あ、え、そうね、キルリア、この人を」

三体の攻撃を防ぐためサイコキネシスでジョーイを盾にして防ごうとしている。

お前ら、人のこといえねえが人として最悪だ！ ヤベエ…このま

まじやジョーイさんが。

「攻撃をやめ——」

『大丈夫よ、攻撃を辞めないで』

「……わかった」

『いくわよ』

ネイティオはフラフラしながら何かを唱えているのか？ 目を瞑りだす。

「！？ ネイティオの……気配が……ウンゲラー……テレポート、シヤドー……ボール」

シュン

ネイティオに気づいたのか？ ユンゲラーがネイティオに攻撃を仕掛ける。

「ネイイイ！」

「しまっ…ネイティオ!？」

シヤドーボールがネイティオにヒットし、そのまま倒れてしまった。

「残念ね」

「……逃げるよ……」

「へえ？ どういう意味……ええ!？」

攻撃を防ぐために盾にしようとしていたジョーイさんが消えたのに氣いたようだ。

ネイティオはウンゲラーの攻撃をくらう瞬間、テレポートでジョーイさんを俺達のいる場所に移動したのだ。

「シャー！」

「エアアアア！」

「ポター！」

もう既にオオタチ、エアームド、ポッタイシはイシト達に接近していた。これでもう逃げられない。

「ウンゲラー……ヨルノズク……サイコキネシス」

サイコキネシスで3匹の攻撃の勢いを止めようとする。

そのせいで3匹の攻撃が少し……ほんの少しだが止まってしまう。

「逃げるよ……テレポートを……」

「……っ……わかったわ。キルリア、テレポートを」

「逃がすかヘルガー、火炎放射」

しかし……

「次に会ったら容赦しないわよ」

シュン

ヘルガーの火炎放射が届く前に、キルリアのテレポートで沙耶やイシトやそのポケモン達が消えてしまった。

そして……

「タチャーーー！」

「エアアアア！」

「ポタアアア！」

ズガアーン!!

「……………」

状況を説明しよう。キルリアがレポートを使ったせいで、沙耶やイシトやそのポケモン達がその場から消えた。そのせいか……いや、当然だがサイコネシスを使用したウンゲラーとヨルノズクがレポートによってその場から移動したのでサイコネシスの効果はなくなり……そのまま床に激突した3匹である。

「タチチチャー!!」

「ボダアア!!」

オオタチとポツタイシはそのまま床に顔面をぶつけ、両手で顔を押さえつけゴロゴロと転がっている。

すげえ痛そうだな。つかさすがにオーバーリアクションに見えなくもねえぞお前ら……。

「…ッ」

エアームドは顔を右の翼で軽くさすっている。見たところオオタチとポツタイシほどは大丈夫そうだな。まあ鋼タイプだしな。

「タチチチャー!!」

「ボダアア!!」

……………。

まだ顔面を押さえつけゴロゴロと転がっている2匹……。しばらく放っておくか。

「マツバさん、あいつらに逃げられる前にジョーイさんや富沢さん達を起こしてここを出ようぜ」

富沢さんは起こさないと、奴らの基地とやらの場所が特定できね

えしな。

「…………。どうやらそうはさせてくれないみたいだね」

マツバさんは部屋全体を見た後、頭を右手でかき、苦い表情をす
る。

どういう意味だ？

「ゲンガー、シャドーボール」

「ギエエ」

マツバさんがそういうと、ゲンガーは両手の掌の間に黒く渦巻く
エネルギーを形成し、それを天井に向かって放った。

つかそんなことしたら天井が崩れ落ち…………ん？ 天井が崩れ落ち
ない…………まさかこれは…。

「どうやらバリエードのバリアーの効果が残っているみたいだね」

「いや、でも確かバリエードは沙耶やイシト達と移動したはずだよ
な」

俺はマツバさんに疑問をぶつける。

「バリエードがまだ近くににいるのかもしれないし、遠くからでも技
を持続することができるのかもしれないが、何にしろ僕達は閉じ込
められたというわけだ」

「ちっ」

俺は舌打ちをする。クソ…悔しがってる暇はねえか。

この状況を打破するには、この技の使用者のバリエードを倒すか、
バリアーを破壊するかだが……

「マツバさんはどうしますか？」

「バリアーが解けるまで待つ方法があるけど、正直いつ解けるかは
わからない。

今はゲンガーを使ってバリアーをすり抜けて、外にでてバリエード
を捜すよう命令しているが、遠くにいる場合はそう見つからないだ
ろう。これも下手をすれば時間がかかるし、見つからないかもしれ
ない。つまりバリアーを破壊するしかないね」

そうか、ゲンガーはゴーストタイプだから、バリアーをすり抜け

たりできるのか。

しかしこの状況はどうすればいい。クソ…冷静に考えやが…!?

いてえ…クソ…頭痛が…

《ミント…ねえミント、起きてよ……ねえミント……お願いだよ…
ミントオオオ!》

《ミントオオオ! 起きてよー! 目を覚ましてー!》

「ハア…ハア…くっ…」

クソ、嫌な記憶を思いだしちゃった。頭がいてえ

「大丈夫かい！？ 顔色が悪いよ」

「ヘル？」

マツバさんが心配そうに言った。ヘルガーも俺を気にかけてるみたいだ。

「ああ、大丈夫だ」

あんまり大丈夫じゃねえがおかげでこの状況を打破する方法を思いついた…：がこの方法は正直いや…絶対に使いたくねえが…：

なぜなら…

「心の準備をしろヘルガー、6年ぶりにアノ技をつかうぞ」

「ヘルウウウ！！」

ヘルガーの目付きが変わり真剣な表情をする。

この状態の火炎放射によって

「“オーバーヒート状態”だ」

「グルルルルウ　ヘルウウウ! !」

ミント……いやチコリータを……アミンという少女の大切なポケモンを“殺す”ことになってしまったのだから……。

第28話：人質（後書き）

正直いつ更新できるかわかりませんが…。

楽しみにしていた人がいれば申し訳ないです。

第29話：オーバーヒート状態発動！（前書き）

リュウガ「相変わらず更新おせえ」

ハビト「久しぶりにちゃんとした休みだったんだよ。だから更新できたのさ」

マアリ「そうなのー？」

ハビト「うん：最近は残業ばっかだし、土曜もあまり休みがなく、日曜は大抵同期の人達と半強制的に遊びに誘われるし……」

リュウガ「んなリアルな話はどうでもいい！」

マアリ「今回はオーバーヒート状態炸裂。はたして脱出できたのか？ 29話、はじまりはじまり」

第29話：オーバーヒート状態発動！

（6年前）

ウバメの森付近

「火炎放射！」

「デルウウウ！！」

灼熱の赤いオーラに包まれたデルビルが岩に向かって火炎放射を放つ。岩は火炎放射の熱で赤くなりそして砕ける。

ここはウバメの森。木や草などに火炎放射なんか放ったら、ウバメの森が火の海になるしな。

「す、すげえ威力だぜ…。しかもまだその状態、通称“オーバーヒート状態”はまだ本気じゃないしな！これならポケモンリーグ制覇も夢じゃないぜ」

ゴウが大声で発言する。

「まあ“この状態”が使えればな。この状態になるまでにはかなり時間がかかるし、相手も待ってくれるわけじゃないし、シングルバトルじゃ滅多に使えないがな」

「そうだけだよ。つーかこの状態言うな！ちゃんとこの俺、ゴウ様が命名したオーバーヒート状態っていう名前があるんだぜ！」

あー、うるさいなー！

「オーバーヒートって炎タイプの最強技の1つだろ？なんでオーバーヒート状態なんだ？」

俺はゴウに疑問をぶつけた。

「よくぞきいたぜ、リュウガ。意味は2つ。1つはデルビルの特性貫い火で炎を吸収し、灼熱の赤いオーラに包まれた状態……つまり

デルビルの身体が過熱している状態だぜ。そして2つは炎の最強技の1つ、オーバーヒート以上の威力の炎を放つことができること――」

故に、“オーバーヒート状態”

「ヘルウウウ」

ヘルガーの口から黒いガス状煙が出て、ヘルガー自身を覆ってしまふ。

「スモッグ？ いやそれとは違う……」

腕をくみボソツと呟くマツバさん。

「火炎放射！」

ヘルガーが地面に火炎放射を放つと一瞬にしてヘルガーを覆っていたガスに燃え移り、爆発が発生。展示物……いや建物自体が振動し、

ヘルガーのあたり一面が炎に包まれた。

「オオタチ水の波動、ポッタイシは水鉄砲」

「タチャア！」

「ポター！」

転がるのをやめ、すぐさま炎の消化のため技を繰り返す。

炎と水の接触のせいあたり一面が白い蒸気に包まれる。

そして白い蒸気が次第に消えていくと、そこには灼熱の赤いオーラに包まれたヘルガーの姿があった。

マツバさんはヘルガーを一目見たあとに静かに口を開ける。

「オーバーヒート状態……か。ヘルガーが放ったのはスモッグと違い発火性の強いガス。それを身体に纏い火炎放射で発火し爆発・燃焼させ強制的に特性の貫い火を発動させる……差し詰めそんなところか？」

「！？ ……まさか一目見ただけで、そこまでわかるとはな」

さすがにジムリーダーといったところか。ポケモンバトルの知識だけはすげえな。

「一応専門職だからね。ポケモンのことならだいたいわかるさ」

……心を読まれた……？

まあいいや、マツバさんの言う通り、今ヘルガーが出した黒いガス状の煙は発火性の強い燃焼ガスで、通称“フレアスモッグ”（ゴウ命名）という技だ。

この技は俺のヘルガーの特殊技で、ヘルガーが自身も負担がかかり連発はできないが、オーバーヒート状態になるには必要不可欠だ。しかもこの状態は……まだ……あの時の禍々（まがまが）しく、炎を吸収しすぎて、加減ができなくなってしまい……そして……ミント……チコリータを……誤って殺ってしまった状態……じゃあなさそうだが……クソ、思い出すだけで頭がいてえ！

「大丈夫か？」

俺はヘルガーに確認をとる。一応大丈夫だとは思うが、万が一にそなえてな。

「ヘルウウウ！」

よし、大丈夫そうだな。

「オオタチ、ポツタイシ準備いいか？」

こっちも周りに炎が燃え移らないよう、水タイプの技をだせるように指示する。

「マツバさん」

「わかつているさ、ムウマ！」

ボールをなげムウマを出す。

「ムウマも炎が広がらないよう、サイコキネシスで勢いを止めるように準備を」

「ムウ」

よし

「いくぜヘルガー！ 火炎放射！」

ヘルガーが大きく息を吸い…

「ヘー！ルウウー！」

大声で叫び火炎放射を放つ。その威力は通常の火炎放射の数倍、オーバーヒートを超える破壊力。それがバリアーに当たり凄まじい爆発・音・爆煙・を生み出した。爆発の影響で体重の軽いオオタチとポツタイシが吹っ飛ばされてしまう。

「ちっ…」

「ムウマ、サイコキネシス」

「ムウ」

吹っ飛ばされたオオタチとポツタイシの勢いを空中で止める。

「もういいぞ」

マツバさんが素晴らしいサイコキネシスを解く。オオタチとポツタ

イシが普通に空中から地上に着地すると思いきや…

ズガア

「タチヤアアアー！！」

「ポツダアアアー！！」

見事に顔面をコンクリートの床に激突させ顔から着地……またまた顔を両手で押さえつけゴロゴロと転がる。

「……………」

もう呆れてなんのコメントもできん。

こいつらは放っておいて、そろそろ煙が晴れはじめたな。

……………あ、ヤベエ…奇跡的に建物に燃え移ってはいないものの、扉が完全に壊れ、扉周辺に黒い焦げ目がある。それだけならまだ良かったが、扉の近くにあった展示物はあんまり無事じゃねえ……。少なくとも、扉の右側と左側にあったピジョットの像の頭の部分が少し溶けてしまった。

完全に器物破損だな…ヤベエ、どうしようかこれ……

とりあえず

「これを破壊したのは奴らってことにしとこうか、マツバさん」

俺はキツパリと言ったが…

「それは駄目だよ。あとで館長に謝っておきなよ」

と冷静にマツバさんに答えられた。

結局そうなるか…。つかこれをやったのは最終的にはヘルガーだよな。ヘルガーの方を見ると

「ヘルー？」

オーバーヒート状態が解けたヘルガーが、ものすごく『俺は何を

やってねえ』的な表現をする。

この野郎…、お前も館長と一緒に謝るんだよ！

「それより、ジョーイさん達を起こそう。じゃないとあの少女達の基地の場所もわからないしね」

「ああ、そうですね。ヘルガー、吠える！」

「ヘルウウウ！！！」

建物内に響くぐらいの声で叫ぶヘルガーだが…鑑識の人達は起きたが、ジョーイさんと富沢さんは起きる気配がまるでない。

ジョーイさんや富沢さんの体を揺すったり、近くで声をかけたりしたが何故か起きる気配すらない。

「どうやらキルリアの催眠術が強く効いてるみたいだね。これじゃそう簡単には起きないぞ」

確かにそうだな。なら…

「富沢さんに雷の牙」

ヘルガーが富沢さんに噛みついた瞬間……

「ギャアアアア○×△#☆@！！！」

富沢さんの身体が痙攣^{けいれん}し建物内に悲痛な叫びが響いた。

まあこうなるのはわかってはいたんだが……。

途中でマツバが止めに入ったおかげか、富沢さんは特に外傷もなく目を覚ました。

ちなみにジョーイさんはムウマや帰ってきたゲンガーの催眠術をつかい、キルリアの強い催眠術を解きなんとか目を覚ました。

「なんか身体が痺れるんですが……」
「それはリュウガ君が――」

その後俺は富沢さんに謝ったが、『いいいいいよ』の一言で許してもらえた。

みんな起きたので、一旦俺らは警視庁やポケモンセンターに向かい、準備を済ませ、奴らがいるであろう基地を目指す。
絶対に奴らを捕まえやるぜ！

第29話：オーバーヒート状態発動！（後書き）

今回でた特殊技、オリジナル技の紹介です。

フレアスモッグ

普通のスモッグとはちがい発火性の強い黒いガス状の煙。炎タイプの技を煙に当てると激しく燃焼する。

ヘルガーの肺や胃に負担がかかるため1日に2、3回しか使えないがオーバーヒート状態になるには不可欠である。

オーバーヒート状態

灼熱の赤いオーラを纏った状態。基本炎タイプの技の威力が上昇し、身体能力が上がるわけではないが、この状態の火炎放射は普通の状態のオーバーヒートを超える威力を持つ。ちなみに“灼熱の赤いオーラを纏った状態”はまだ本気のオーバーヒート状態ではない。ちなみに本気のオーバーヒート状態は……ストーリーの後半ぐらいで出る……予定？

それでは、また次回！

第30話：ケンとトウ。ぶつける想い（前書き）

リュウガ「どうやったら更新速くなんだろうか」

マアリ「無理じゃないー？」

リュウガ「確かに無理かもな。あのクソ作者じゃな」

ハビト「だれがクソ作者だよ！」

マアリ「ハビちゃん。いたんだー」

リュウガ「チッ」

ハビト「舌打ちすんなよ。本当に更新遅くてすいませんね。それじゃマアリ」

マアリ「うん。それでは第30話始まりです」

第30話：ケンとトウ。ぶつける想い

37番道路…山奥

俺、マツバさん、ジュンサーさん、富沢さんは今は37番道路の北の方へ進んでいる。ここから西へ行けば38番道路に行けるのだが、ブレイドブラザーズの基地は北方面にあるらしい。

他の警察の人は先にあいつらの基地を囲み、俺らが合流したら攻め込む作戦らしい。敵さんにはポケモンの気配がわかる少女、イシトがいるためヘルガーはボールの中へ閉まっている。ヘルガーを出しっぱじゃ、イシトにかんづかれちまうかな。

ちなみにネイティオはポケモンセンターに置いてきた。完全に回復するまでは今日いっぱいかかってしまいうらしいが、アイツは頑張ってくれたからな。さすがに休ませねえとな。

そして、道なりを歩いてしばらく……

「ああもう！ 疲れたわ！」

中腰をして、額にかいた汗を手でふき、近にあった岩に座りこんでしまったジュンサーさん。

「すいません。皆さん、少し休みます」

それを見てマツバさんは『しょうがないな』と言わんばかりの表情で右手で後頭部をかきながら言った。

ハア…これで休憩、5度目だぞ。どんだけこの人は体力ねえんだよ。それでも警察かよ……。

俺は本気で心の中でジュンサーさんをダメだと思った。

「富沢さん。あいつらの基地まではどれくらいですか？」

俺は富沢さんにきく。すると富沢さんはメガネをピカーン！ と

光らせ、鞆からコンパクトサイズのノートパソコンを取りだしそれを左手で持ち……。大きく息を吸った。

「いきますよ……スウウウウ……ハアアアアアアー！」

途中キーボードのボタンからバキッって言う破損したような音がきこえたが……まあ、気のせいだ。いや気のせいにする。

つか雄叫びいらんだろ。野生のコラツタの集団が驚いて鳴きながら走り去っていったぞ。おい！

簡単と言うなら前の説明いらねえだろ。つかGWなんならいわれ
てもわかるか！ 太っちよ野郎が…。

「もうそろそろ…のはずなのですが…」

右手で顎に触れ、どこか苦い表情をしながら一人言のようにボソツと言った。

いったいどうしたちゅう話だよ？

「ハア…どうしたんスか？」

俺はため息をした後、富沢さんに質問する。

「おかしいんですよ。先に待っている警察の方々が…いないんですよ」

「「何!？」」

俺とマツバさんが同時に言う。

そういえば、警察どころか誰も見かけねえ。どういうことだ!？

「こ…これは…」

ジュンサーさんがその場に腰をおろし、地面を直視して触れる。するとそこにあったのは人間のサイズではあり得ない大きさの足跡があった。これは確実に大型のポケモンの足跡だ。

何故こんなところに？

「これは見たところ…：：：ガルーラの足跡ですね。ええ」

「ガルーラ？ 37番道路には生息していないはず…。まさか」

そう言った後、マツバさんはその場に座り込んで目を瞑り、人差し指と中指を自分のデコに当てる。周りの空気を感じて、何かを探っているのか？ 俺にはさっぱりわかんねえな。

「ん!？ こっちの方向からかすかに空気が振動した!」

マツバさんが右の方向へ指をさした。

そっちに何かあるのか？ 俺達はマツバさんが指をさした方角へ進んだ。

すると…

「ギアアアアアアア! だ、だ、誰かぁー!」

！？ 声？

「マツバさん、ジュンサーさん、富沢さん！」

「ええ」

「はい」

「わかってるよ、リュウガ君。速く行こう」

俺達は叫び声がきこえた方向へ全力で走った。

「ガルーラ、ピヨピヨパンチッス」

「ガルー！」

「ギャアアアア！」

一人の警官が、遠くの方から吹っ飛ばされ、近くに生えていた樹木にズカンと激突した。

これはヤベエ。下手したら死ぬんじゃないか？

俺達は直ぐ様、警官の方へ走っていき、状態を起こす。

「うう…」

「これは酷いな。はやく病院へ連れていったほうがいい」
マツバさんが険しい表情で言った。

思った以上に傷がひでえ…。何もここまで徹底的にやらんでもいいんじゃないのか。……。

俺は少し歯をくいしばる。

「オイラ達は、お前らくることなんてわかっていたんツスよ」

「えっと、その…、ここまでやるつもりは…」

草の茂みから2人の少年が出てきた。

「お前らは…」

「この少年達は…」

こいつらは…ネイティオの時空の断片で見せてくれた映像にでてきた…確か…。

「「ケンドウ!?!」」

ジュンサーさんとおもいつきりハモってしまった…。

「そうそう、竹刀をもって、メーン、ドウ、コテー……てちゃうわい! オイラこそブレイドブラザー最強の特攻隊ケンで」

「えっと…僕がブレイドブラザーの…策士家…だったかなあ…えっと…」

「「二人合わせて○×△☆#@! ……あれ???」」

そう言った後二人は首を傾げ、頭を疑問符が浮かべる。

つかセリフが噛み合ってねえぞ…お前ら

「トウ、1時間前に考えただろ! 何間違ってるんスカ!」

「え…ええ、ま、間違ったのはケンじゃないか」

「なんだとー!」

「た、助けてー」

……………。

ケンはトウの胸ぐらを掴み、右手の拳をグーにし、殴ろうとしている。

それを見てジュンサーさんが

「コ、コラー! 喧嘩はやめなさい」

とケンとトウの間に入った。

だけど、これで更に悪い方向へといく。

「うるせえツスよ、ババア! 香水くさいっすよ、そんなに自分の加齢臭を消したいんスカ?」

何を言っただか、さすがにあのジュンサーさんでもこんなクソ安い挑発に乗るわけは――

「な、なによー！ まだ下に毛も生えないクソガキがあー！ ぶっ飛ばすわよー！！！」

……………。ダメだ…この人は。

止めに入ったのは良かったが、ケン挑発され自分も喧嘩に入ってしまったジュンサーさん。

それを見て不味いと思ったか今度は富沢が間に入り、ジュンサーさんの両腕を押さえつけた。

正直俺は、この人に呆れて何もやる気がしない状態だ。本当に…「だ・れ・が加齢臭ですってえー！！！！」 まだ私はピチピチの20代前半よ！！ それに富沢さんはなしてー！！！」

腕を押さえつけられてるのを必死で外そうしているのか、じたばたして暴れまくるジュンサーさん。

「ジュンサーさん、相手はまだ子供ですよ。そう怒らないでください。それに女性が下ネタは控えてください。子供に悪影響です」

確かにそうだな…じゃなくて、そうだけど、何を言ってるんですか富沢さんも…。

「それより君達に聞きたいことがある。『お前らくることなんてわかっていた』って言ったよね？ どういうことだい？」

この異様な空気をマツバさんの一言で、緊迫する空気へと移り変わった。

そう言った後のマツバさんは、厳しい表情でケンとトウの方向を睨めつけた。

すげえ威圧感だ。

ジュンサーさんと富沢さん、ケンやトウまでの表情が固まっていた。

するとケンが少し震えながら口を開く。

「沙耶のキルリアのサイコフューチャーでここで起こる未来を垣間見たんスよ」

少しスネた感じで、いつもより声を低く言った。

それより未来を垣間見たたと…。

ということは…。

「マツバさん、こいつは…」

「わかっている。あのキルリアの技、“サイコフューチャー”は少なくとも、君のネイティオの時空の断片と同じような効果はある」
そうマツバさんの言う通り、俺達がここに来るといふ、未来が見えていたのだとしたら…。

「速くいきましょう。じゃないと——」

「ガルーラ！」

「ガルウー」

ガルーラがジュンサーさんの行く手を阻む。

邪魔だな！

「なんで、お前らはこんなことをしゃがるんだ！」

俺は怒鳴った口調で言い放った。

するとケンは歯を食いしばり、トウは下を向き、涙を地面に滴ながら口を開いた。

「オイラ達だって、本当はこんなことしたくない…したくないけど……」

「僕や…グスツ……ケンや沙耶、イシト、そしてヤイバ兄……ブレイドブラザーズが今後生きるか……死ぬかが…かかっているんだ」
「この依頼に成功すれば“あの方”がオイラ達を引き取ってくれるんだ」

「でも失敗したら…あの方に捨てられて…グス…」

「また、あんな…あんな…：苦しくて…：辛い…：惨めな…：生活に逆戻り…：な…」

トウだけではなくケンも下を向き涙を地面に滴ながら言った。

その言葉をききこの場にいるマツバさんやジュンサーさんや富沢さんも驚愕している。

まだこんな10歳ぐらいの子供2人がこんなにも苦しんでいるなんて…：想像もつかなかった。

この子供2人にとってどんなに重くそしてどんなに辛い言葉だったか…：

もしも、俺もこいつらと同じ状況なら…：…。

「だからオイラ達は」

「僕達は…」

「「ここを通すわけにはいかない（のです）」」

そう言うのと、涙を右手でふき、ケンとトウは戦闘モードにきりかわる。

「ガルーラ準備はいいですか？」

「ガルーラー！」

「出てきてストライク」

トウはボールを投げストライクを出した。

「リュウガ君…：彼らの言っていることはわかる。だけど生きるためであろうとやっていることは犯罪なんだ。同情してはならないよ」

「ああ、わかってる」 俺はマツバの言葉に真剣に答えた。

んなことわかってる。俺は今は届け屋だ。依頼されたことはちゃんとこなす。でもそんなことより…：

「なら大丈夫だ。それに今彼らにすべきことは、ここで同情することでも退くことでもない。“救う”ことだ。彼らはまだまだ子供だ。今泥棒だとしてたとしてもこれからの人生…：未来は変えることはできるんだ。そのきっかけを掴むためにも」

「ここで負けるわけにはいかねえな！」

「フッ…それに…」

「それに…?」

一体何だ?

「君の未来もだよ。君は元々はトレーナーだろ? 今は何故届け屋をしているかはわからないけど、博物館にいたとき何かを思いだして悔やんでいたみたいだったからね。あの子達と同じで君も子供だ。何があったかは分からないけどさっきいった通り、未来は変えられるんだ」

確かにそうかもな……だけど俺は…博物館にいたとき思い出したミントを…ポケモンを殺した、過去に…踏ん切りがつくまでまだトレーナーに戻るには……いらない。多分これがトレーナーに戻る自信がないものだから。

それより今は…目の前の敵をぶっ飛ばす。

「行け、オオタチ」

「タチャー!」

オオタチが元気よくボールから出てきた。久しぶりの出番だからかな。

かなり張り切ってみたいで、シャドーボクシングまでして周りに可愛さをアピールしてるよ。

いらねえ動作だな。そういうのは、ポケモンコンテストでやれと心の中で思った。

「行くんだ、ゴース」

「ゴオオオ」

マツバさんは、紫色のガスにつつまれた。黒く丸いポケモン、ゴースを出した。

先ずはこいつらを倒して、速くハウオウの像を取り戻すさなきやな。

第30話：ケンとトウ。ぶつける想い（後書き）

ブレイドブラザーズ ホウオウ像奪還編（22話） 結構続くなあ。
あと4、5話くらいで終わらせたいです。

第31話：リュウガ&マツバVSケン&トウ（前書き）

なんか題名が……。

リュウガ「普通だな」

マアリ「&（アンド）つけてるわりに、ダブルバトルじゃないしねー」

まあね。

話変わるけど最近文章が長くなる。1500〜3000文字ぐらいで1話終わらしたいんだけどなー。

リュウガ「それはお前の腕だ」

リュウガが言ってることあってるかな。反論できないんだよ。

マアリ「なんか長くなりそうだから言うよー。31話始まるよー」

はじまり〜

第31話：リュウガ& マツバVSケン& トウ

「リュウガ君、マツバ君、私達は倒れている警官達を助けに行くわ」
ジュンサーさんは素晴らしい、慌ただしく走っていった。

「私も行きます。この場はよろしくお願いします。では」
富沢さんもその場を去ってしまう。

さて：

「ジュンサーさん達を追いかけなくていいのかい？」

マツバさんがケンとトウに向かって質問をする。

「追いかけたら、あんた達が先に進んじやうじゃないスカ!？」
そりゃそうだろ。

「それに、オイラ達以外にもまだ沙耶やイシト、ヤイバ兄もいるッス。それに沙耶達がジュンサーさん達を野放しにはしないッスよ。きっと今頃倒されている筈ッス！」

「そ、そうだよ。ヤイバ兄ちゃん達は僕達より強いんだからね」
それはヤベエ。速く追いかけねえと：でもこいつらを野放しにはできねえ。

なら：

「速く戦闘^{バトル}を始めようか」

マツバさんの目付きが鋭くなった。これは確実に戦闘モードになったな。

「そうだな。速く来いよ剣道野郎！」

「だからオイラがケンで」

「ぼ、僕がトウだよ」

いやわざと言ったんだがな。つか2度も自己紹介しなくていいんだが：

「いっくッス！ ガルーラ、ゴースにピヨピヨパンチッス」

「避ける、ゴース」

ゴースはガルーラの攻撃をヒラリと右にかわす。

通常ゴースはゴーストタイプなのでノーマルタイプの技が当たらないのだが、このガルーラの特徴：肝っ玉はゴーストタイプでも関係なくノーマルタイプの技を当てることができる。こいつは厄介だな。

「す、隙あります。影分身から高速移動、そして辻斬り」

10数匹に増えたストライクがオオタチを襲おうとしているが、残念ながら無駄だっちゅう話。それにどっかのジムリーダーの息子のストライクより動きが遅え！

「本物に、水の波動」

「タチャー」

「ス、スト!？」

本物であろうストライクに水の波動が命中し、吹っ飛ばされ、そのせいか影分身が消える。

「え：な、なんで」

トウが物凄く慌てている。

「見切りだ。これで本物がどれだかわかったんだよ」

とつとバトルを終わらせねえるか。

「ストライク辻斬……ストライク!？」

ストライクが目を回し、フラフラしている。こいつはどうやら混乱状態みてえだな。運よく水の波動の追加効果がでたみてえだ。よし、一気に畳み掛ける！

「乱れひっかきから捨て身タックルだ」

「タチャー」

ズシャズシャと音をたてながらひっかいたあとで、ストライクから少し後退して捨て身タックルをきめ、吹っ飛ばした。よしこれで……

「ス、スト」

捨て身タックルで吹っ飛ばされた後に直ぐ様体勢を立て直した。

ちっ、捨て身タックルをくらわせたせいか混乱が治りやがった。

だけど……

「こ、混乱が治ったみたいだね。い、いくよストライク、シザー…あれ？ オオタチ…どこ？」

どうやら相手はオオタチを見失ったみたいだな。よし…

「！？　じ、地面に穴？　ス、ストライク下だよ。は、速く飛んで」
気づいたか…だがもう遅い！

「今だ！　穴を掘る攻撃！」

「チャアー」

ストライクの地面の真下から出てきて、そのまま顎あごにアッパーをくわす。

「ス、ストライク」

トウが叫ぶ。

よし、怯んだみてえだ。今がチャンス。

「くらいやがれ！　連続猫の手！」

オオタチの両手が白く光りはじめた。

本来猫の手は自分以外の手持ちのポケモンの技をランダムで1つ使う技。だけど今回ののは、両方の手で同時に猫の手を使う。つまり自分以外の手持ちのポケモンの技をランダムで“2つ”使えんだ。

くらいやがれえ！

「まずは左手だ」

「タチャー」

「え…ええ！？」

トウが驚きだした。オオタチの発動した技は…

「タチャー、タチャー、タチャー、チャアアアア！」

オオタチが騒ぎだした？

いやこれはまさか：ヘルガーの吠える…。

オオタチ：お前が精一杯吠えても、まったく怖くねえぞ。

むしろ可愛さをアピールしてるぞ。それは…。

ハア：駄目だ。これで相手ストライクが怯えたりするはずはねえよな。

「ストオオオオオオオオオオオオオオ！」

「ス、ストライク：し、しっかり：して」

って怯えてるし！ しかも泣きわめいてやがる！　つかそんなにオオタチの吠えるに怯えるもんなのかよ。あれのどこに怯える要素がありやがる。

でも：隙ができたからいいか：別に。

「よし、次は右手だ」

次は何が発動するんだ？

バキッボキイメキメキメギイイ

「うわぁ…」

グロテスクな効果音とともにオオタチの右手が何かの変形し始めた。この光景は何気におぞましい…。

「タチャアアアアアア！」

オオタチも自分の右手を見て、目が飛び出るぐらいに驚いている。しかし徐々に形が形成されて何かの…羽…いや翼っぽくなってきた。

なんだ……。！？ いやこいつは…

「エアームドの翼！」

なんとオオタチの右手がエアームドの右翼に変形した。

つか見た目が物凄くおかしいし！ あの可愛いオオタチの顔、スツと伸びた身体に右腕だけエアームドの翼！

こいつは非常にバランスがわりい！ 悪すぎる！！ 可愛さ台無しだぞあれは……。

まあ、でもエアームドの右翼になったってことは…発動した技は鋼の翼！

「オオタチ、いきやがれえ！」

「タチャアアアアア！」

翼が灰色に光る。絶対に重であろう、エアームドの右翼を精一杯持ち上げ、隙だらけのストライクにくらわし、吹っ飛ばした。

その後オオタチの右手はさっきみたいなグロテスクな効果音はせず、すんなりと元に戻った。

「す、ストライク!?」

トウが近くに駆け寄るが、無論ストライクは目を回し気絶している。

「チャアー」

勝利のピースをするオオタチ。その後に俺の肩の上に乗る。

「オオタチ、ご苦労様だ。さてマツバさんは……」

「くっそおー！ 連続でピヨピヨパンチッス！」

「ゴース避けて」

ゴースはガルーラのピヨピヨをパンチをいとも簡単に避けている。『避けてばかりじゃ、オイラのガルーラには勝てないッスよ』

確かに相手のいう通りだ。さっきからバトルの間もちらほら見てたけど、マツバは攻撃をしないで避けてばかりだ。でもマツバさんのことだから何か考えがあるはずだよな…。

ズシャア…

「グウ…ガ、ガルウ…」

「ガルーラ、どうしたんスカ!?!」

ガルーラが地面に立て膝をついてしまった。よく見ると顔が青ざ

め、具合が悪そうだ。そうかこれは……。

「ゴースの“呪い”か」

「正解だよ。リュウガ君」

やはりただ攻撃をしないで避けていたわけじゃなかったか。確か、呪いはゴーストタイプが使った場合、自分の体力を削って相手に呪いをかける技。呪いで体力を削るために避けていたのか。

呪いか…恐ろしい技だな。

「ど、どういふことっスか？」

ケンが歯をくいしばりながら言った。

「君のガルーラは時間がたつにつれ、呪いの効果により体力が徐々に減っていったのさ。」

「……そうスか、ならガルーラ………覚悟を…決めるッスよ」

「ガ、ガルウ…」

ガルーラがフラフラになりながらも立ち上がる。

「この一撃に、全てをかけるッス。ギガインパー―」

「ごめんね。その攻撃はゴースには届かない。催眠術」

ゴースが目から黄色い輪っかのエネルギーを数個だし、ガルーラのギガインパクトが決まる寸前に催眠術で眠らしてしまったのだ。そのせいかガルーラは地面に倒れこんでしまう。

「呪いを使ったせいで、ゴースの体力も大分減ったしね。回復させて貰うよ。夢喰いだ」

ガルーラの体内のエネルギーが、ゴースの口に入っていく、それをジュースを飲むような感じで、ゴクゴクと音をたて飲んでいる。グロテスクな光景だな…。

「ごちそうさま」

ゴースの夢喰いが終わると同時に、ガルーラが目を回し気絶してしまう。

気絶したのを確認後ゴースをボールに戻した。

「クソ、なんで…なんでスカ!!」

地面を殴り付け、悔しそうに叫んでいるケンに近づくマツバさん。
「君は僕を倒すことで頭がいっぱいで、ガルーラの異変に気づかなかったよね。もし気づいていれば多少の打開策はできたものの…自分の手持ちのポケモンをよく見ず、自分のことしか考えてなかった…それが今回の君の敗因だ」

「く、くそお…ガルーラ…ごめんな」

地面に倒れているガルーラに駆け寄り抱きついて謝る。

「ケン、ぼ、僕も負けちゃった。ゴメン…」

ケンの方を向き頭を下げて謝る。その後でケンとトウはそれぞれガルーラ、ストライクをボールに戻す。

とりあえず片付いたみたいだ。

さて…

「速くいこうぜ。マツバさん」

「いや…待ってリュウガ君」

俺はその場を立ち去ろうとするがマツバさんが止める。
「いったいどうしたっていうんだ？」

「どうしたんスカ？」

俺は思ったことをそのまま言った。

「どうやらあっちから来てくれたみたいだよ」

「え…!!?」

なっ…!!? あ、あぶね——!!

ズシャアアアア

突如、森の奥から半透明の板状のガラスみたいなものがとんできた。それを俺は横に転がり寸前でかわす。

こいつはバリアー……。

「残念…当たらなかったわ」

森の奥から聞き覚えがある声が聞こえた。俺とマツバさんは直ぐ様声が聞こえた方向へ振り向く。

バックにはキルリアとバリヤードもいるが……なんだ？ 空中には数十個はあるであろう半透明の板状の物がフワフワと浮いている。

「なるほど、これはバリヤードのバリアーを大量に作りだし、サイコネシスでバリアーを誘導させ僕達の攻撃を防ぐためのもの…そしてキルリアが両手を胸にあて目を瞑り、集中させているように見える。これは…サイコフューチャーかな？」

「なっ!？」

さすがはジムリーダー。観察力・洞察力ともかなり優れている。沙耶も相当動揺している。そしてケン、トウのほうに視線を向けた。しかも物凄く鋭い目付きで…。

「ケン兄! トウ兄! 私のキルリアのことバラしたわねええええー! ! !」

「「ひい〜」」

怖っ! ケンとトウが身体じゅう震えて、お互いがお互いのことを抱き合っている。相当怖いんだろうな。なんか沙耶の身体じゅうから禍々しい赤い焰が出てるし……。

そういえば俺の知り合いにも沙耶みたいな奴がいたな…。今は13歳ぐらいか…。

俺は沙耶をみて知り合いのことを思い出していた。

「あんた達はヤイバ兄に報告にいきなさい!」

「え…オイラ達はまだ」

「いいから速く行きなさい!!」

そう言うと、バリヤードに指示し空中に浮いているバリアーを1つ、サイコキネシスの力でケンとトウの方向へ投げる。でも軌道的にケンとトウを狙ったというよりは、威嚇射撃に近いようなものだろう。ケンの目の前にバリアーがズシヤァ! と地面に突き刺さる。

「ひ……わ……わかったッスよ……。いくぞトウ!」

「え、待ってよー、一人にしないでー」

ケンとトウが森の奥へと走っていった。

「邪魔者はいなくなったわ」

邪魔者はいなくなったしって……お前10歳だよな? まあいい

「マツバさん、ここは二人の力を会わせてー」

「いや二手にわかれよう」

「え……」

「さっきケンとトウが野放しにはしないと書いていた。それが本当ならジュンサーさん達が危険だ。それにここにはイシトがいない。もしかしたら――」

「ジュンサーさんが襲われている……かもしれないってことか?」

「ご名答よ」

不気味な笑顔をつくりパチパチと手を叩き拍手をする沙耶。

こいつ俺らを舐めきってやがるな。

「時間は無さそうだね。僕がジュンサーさんのところへ行くよ」

そう言ってジュンサーさんの行った方向へ走り出す。

「逃がすと思うかし――」

「オオタチ、水の波動」

ここぞとばかりにキルリアに水の波動で先制する。

「バリヤード、キルリアを攻撃から守って」

空中に浮いているバリアーの1つをサイコキネシスで操りキルリアの目の前に移動させ水の波動を防ぐ。

「お前のあいては俺だ」

「ありがとう、リュウガ君」

マツバさんがそう言って走り森の奥へと姿を消した。

「まあいいわ。あのジムリーダーは厄介だけど、あなた一人ではただの雑魚よ。雑魚…わかる？」

「その言葉そのままオメエに返すぜ。それにんなこと言ってるとお嫁に行けねえぞ。ツンデレ野郎！」

「私はツンデレじゃないわよー！！！」

キレるところそこかよ！

「まあいい、出てこい」

「ギェェア」

ボールを投げ中からエアームドを出した。

「お前が2匹なら俺も2匹でいくぞ」

「それでも私には勝てないわ！」

ほざいてろ。これから俺達の力を見てやるぜ！

今、沙耶との2回目のバトルが始まった。

……つか俺って届け屋だよな。なんでバトルしてるんだ？

勝負と同時に素朴な疑問が浮かんだ俺であった。

第31話：リュウガ&マツバVSケン&トウ（後書き）

沙耶「私、こんなひどい性格じゃないわよ！」

ヤイバ「ハア？　良く言うぜ。笑わせんなよ」

沙耶「ちよっ、ヤイバ兄！」

君たちなんで後書きに……

ヤイバ「んなの関係ねえ。俺の出番まだか！？」

あともう少しだよ。

ヤイバ「本当か、嘘だったらぶっ飛ばすぞ！　オラア」

怖い…。

沙耶「来週は私が主人公よ。見てね」

いや、主人公はリュウガだから。てか君敵だからね。

第32話：リュウガピンチ！？ サイコフューチャーと絶対防衛（前書き）

リュウガ「ちょっと待て！ 題名の『リュウガピンチ』ってどういうことだ！」

え、えっと……

マアリ「リュウガが負けちゃうんじゃない」

リュウガ「おい！ クソ作者！」

に、逃げろ！

マアリ「大丈夫、リュウガは負けないよ……。多分ね（ボソツ）」

リュウガ「なんで最後ボソツって言った。つか待てクソ作者！」

マアリ「お騒がせてすいませーん。それでは32話始まりまーす」

第32話…リュウガピンチ！？ サイコフューチャーと絶対防衛

キルリアの野郎、戦闘が始まる前からだが、ずっと胸に手をあてて目を瞑ってやがる。マツバさんが言ってたが、サイコフューチャーを使うための準備か？ それとももう発動してんのか？

ちなみにバリアーの浮いてる数は16個か……。まあどっちにする攻撃してみなきゃわからねえか。

「先に攻撃すつぞ。オオタチ、キルリアに水の波動」
キルリアに向かって水の波動を放つ。

「そんな直線的な攻撃、きかないわ！ バリヤード、防いで」
空中に浮いているバリアーを1つ右手で操りキルリアに迫る水の波動をいとも簡単に防いだ。

「残念ね、それでも攻撃のつもりかしらね」
相も変わらず嫌らしく俺に挑発してきやがる。
何度も思ってるが、本当にこいつ10歳かよ？

「お前……いや沙耶」

「なによ！ 気安く名前で呼ばないでよ！」
それぐらい別にいいだろ！

「もう一度きくが……お前絶対に10歳じゃねえ——」

「10歳よ！！ 偽ってないわよ！！ なんて偽る必要がある訳！」
ハイパーボイス並の大ききで怒鳴る沙耶。

つかうるさ過ぎて、耳の奥からツーンとくる痛みが……。

「いや…だって性格の悪さのレベルが10歳のそれとは次元が違いすぎだろ」

「失礼ね！ もうあったまにきたー！ バリヤード！ 3連続バリアー投げ！」

空中に浮いているバリアーを3つ、右手のサイコキネシスで操りオオタチがいる方向へ投げてきた。

ここは…。

「エアームド、鉄壁」

鉄壁で防御力が上がったエアームドで3連続バリアー投げを防いだ。

その後でバリアーは光の粒子のなり消えていく。

さすがエアームド、防御力なら手持ち内では1番だかな。余裕の表情だな。

おかげで少しわかったぜ。左手のサイコキネシスでバリアーを空中に浮かせ、右手のサイコキネシスはバリアーを誘導さてるみてえだ。

かなり器用なバリヤードだな。

「まだよ、次は5連続バリアー投げ！」

「チッ……鉄壁だ」

なんとか4つはエアームドのおかげでふせげだけど、1つはオオタチの方向に……クソこのままじゃ……

「クソ、避けるオオタ……なんていうかちゅう話だ！」

「なっ!？」

「瓦割りだ」

「タチャアアア！」

バコン

「……………え…?」

沙耶が驚きの表情から呆れた表情に突如かわる。

それもそのはずだ……何故なら……

[illegible]

そう実は才オタチは……

「な・に・が瓦割りよ！ 覚えてないじゃない！ 何よこの様は！」
 ……。そのとおり…だな。

「クソ、何と無くオオタチは瓦割りを覚えていると思ったんだが……やっぱり駄目か」

「自分の手持ちのポケモンの技を把握できてないなんて…あんたやっぱりバカじゃない！」

「なつ」

「バカのためにもう一度言ってあげるわ。あんたバ・カじゃない」
この野郎、そこまでいうか普通……確かに俺は手持ちのポケモンの技を把握できてねえよ、だけどそれは……ヘルガーだけだかな!

「残念ね。だからあんたは私に――!?」

「バ
リ
イ
イ
イ
ー
ー
！
！」

「え……バ、バリヤード！？」

沙耶が動揺する。バリヤードは吹っ飛ばされそのまま背中から地面に叩き付けられた。

「なっ……」

「残念ね……か、それはこっちの台詞だ。よくやったエアームド」
エアームドがこっちに戻ると、俺の言葉に笑顔で答える。

「さっきまでののはすべて演技？」

沙耶の声が1オクターブ低くなる。

多分悔しがってるんだろうな。歯をくいしばってるみたいだ。散々人をバカ呼ばわりしてこの様だしな。

「当たり前だろうが、ツンデレ野郎！」

そう、全てはバリヤードにエアームドのブレイブバードを決めるためだけの演技……なのだが……

「タチャアアアアアアアアア」

まだ右手を左手で押さえつけ目からハイドロポンプぐらいの勢いで涙を流しながら、地面に転がっている鼬イタチが1匹いるが、こいつのリアクションは本物だがな……つか指示した俺が悪いから言わねえけど、いい加減リアクションやめねえか？

「すまないオオタチ、だからリアクションはもういいから」

「タチャー」

リアクション辞めるの速っ！ 右手でピースしてるよこいつ……。つか右手の腫れ治まってるし。

「キルリア準備はいい？」

「キル」

「何をするきだ、沙耶」

「あなた……いや確か名前は、リュウガだったわね。正直サイコフューチャーを使わなくても倒せると思ってたんだけどね……。あなたは雑魚じゃない……認めるわ。だけどリュウガさん……これから見せてあげるわ。私達の実力ちからを」

沙耶の目付きが変わると同時に、キルリアの目が開いた。
来る…。

「フラッシュよ」

ピカァー！

「く…ま、眩い！」

「タチャァー」

「ギィ…」

キルリアがフラッシュを使った。眩い光が俺達を襲う。

クソ…目を開けてらねえ。

でもなんとかしねえと…

「オオタチ、見破るから高速移動で加速して、キルリアに捨て身タックル」

これで、なんとかキルリアダメージを。

徐々に眩い光が消えていく。しかし俺の目に映った光景は…。

「タツ…チャァ…」

「オオタチ、大丈夫か!？」

そこには身体中がボロボロになって倒れてたオオタチの姿があった。俺は直ぐ様オオタチに近寄る。

「タ…タチャァ…」

フラフラになりながらも必死になって立つオオタチ。

「フフツ、なかなかやるわね。もう倒したと思ってたんだげとね」
クソ…この数秒間に何があった。

俺直ぐ様、確認を取るため沙耶の方向を見る。

ちっ…空中に浮いているバリアーの数が増えている。確かさっき俺に1個、ケンに1個、そして少し前に3個、その後5個投げて、

計10は投げたはず。残りが8個しかなかったのに復活してる。いや24個に増えてやがる。この間にそんなにバリアーを！？

「バリアード、サイコネシスを解いて」

空中に浮いている24個のバリアーが重力によって下に落ち、地面に突き刺さった。

こいつ何をする気でいやがる。

「何故サイコネシスを解いた」

とりあえず俺は時間を稼ぐ。速くサイコフューチャー使われた時の対処を考えねえとな。

「それは時間稼ぎのつもりかしら」

「チッ…」

バレてるか。

「別にいいわよ、サイコフューチャーを使っ
てないときはね、事前に浮かせておいて相手が技を使用して、相手の技が近づいた時にその近くに浮いているバリアーを使って対処しなきゃ間に合わないから空中に浮かべた状態にする必要があるの。だげとねサイコフューチャーで数秒先の未来を見ているから攻撃が何処からくるかわかるのよ。だから空中に浮かせなくても対処できるのよ。分かるかしら？」

「それくらいわかる。俺は別にそこまでバカじゃねえしな」

クソ…となるとどう対処すれば…

「キルリアのサイコフューチャーとバリアードのバリアーを生み出す力、これらを合わせて私は“絶対防御”って読んでの」

「絶対防御だと…」

「そう、攻撃は最大の防御と呼ぶように……“防御は最大の攻撃よ”。キルリア、サイコフューチャー発動よ」

「キル」

キルリアが再び目を瞑った。すると両手の掌の間から淡い水色に光る水晶らしき玉が形成された。

しかし5枚目のバリアーで勢いが止まってしまった。でもあとには下にいるオオタチがまだいるぜ。

「夕チャー!!!」

キルリアに俺がアイコンタクトで指示した捨て身タツクルを決めようとしている。頼むぜこれで…

「残念ね」

「タチャアアアアアアアー！！！」

キルリアに技を決めようとしたその時に、オオタチが何かに当たって跳ね返ってしまった。

オオタチは頭に両手を当て地面に泣きながら転がり込む。

「フフフッ、そこには透明のバリアーをはっておいたのよ。残念ね」
畜生が、この野郎……。未来が見えてるから何でもお見通しかよ。

さすがに他の奴ならこの状態じゃ冷静さを保てるはずはねえな。

普通なら諦めるだろうな、こんなバトルは。だけど俺はまだあきらめねえ。

「オオタチはこっちに一度戻れ。その後で穴を掘る」

俺は1オクターブ低い声で指示をする。

「エアームドは空を飛び、そのまま待機しろ」

「どういづもり？」

首をかしげる沙耶。

「作戦だよ作戦。思い付いたんだよ。お前に勝てる方法がな」

俺は沙耶に向かって余裕の笑みを浮かべる。

「フフフツ、残念ね。それは嘘。本当はこう思ってるんですよ。」

『未来が見ることが出来る者になんて、勝てるわけがない』　つてね。そう言えば動揺を誘えるとも思ってたんでしょ？　　ざ・ん・ね・ん・

ね。私が未来を見て先読みしてる分、リュウガさん……あなたは勝てないわ。バリエード、リュウガさんに5連続バリエー投げよ」

俺に向かってバリアーを5個投げてきた。ウソだろ！？ 手薄になったからってトレーナーに攻撃するとは……クソ……エアームド

は空中に…オオタチは地面の中に…。俺の近くにこいつらはいない。
「ならヘルガーをだしてオーバーヒートでバリアーを焼き払う…
…いや…間に合わねえ。俺がバリアーを避けるか…‥‥駄目だ、沙
耶は未来が見れる。避けた方向にバリアーを投げるよう指示する…
…。クッ…クソ…‥‥畜生…‥‥クソ畜生がああ!!」

「残念ね。ここで終わりよ」

もう抵抗する術もない。多分アレをまともに喰らったらケガじゃ
すまねえな。

俺は静かに目蓋まぶたを閉め…‥‥‥‥

そして…

目を瞑った……。

なんで言うか！

「終わり？ それはこっちの台詞だ。そろそろ演技すんのも疲れたぜ。このツンデレ野郎が！！」

「何を言っているの？ 冗談のつも……え……何…この未来！？
バ、バリヤード！？ バリアーを止めて！！」

もう遅え！ ここから逆転開始だ！

第32話…リュウガピンチ！？ サイコフューチャーと絶対防衛（後書き）

沙耶「何か前より性格、悪くなってるわよ！ どういうわけ？」

いや…それは…。

ヤイバ「作者の隠謀だろ」

沙耶「私は絶対にこんな酷い性格じゃないわよ！ ハビト兄！！」

いや、だから君の兄さんじゃないって！ 君の性格については本当に………すまないと思ってる。

沙耶「ハビト兄！！」

ヤイバ「ケツ、笑わせてくれるぜ。とりあえず待て次回だ」

沙耶「ヤイバ兄！！！！」

第33話：決着？ 悪魔の16歳VS生意気な10歳（前書き）

リュウガ「『悪魔の16歳』っどういうことだよ」

まあ：本編を見ればわかるよ。

マアリ「リュウガ最低ー！」

リュウガ「何が最低なんだよ！」

マアリ「ハビちゃんの言う通り、本編を見ればわかるわよー。と言うことで33話、はっじまるよー」

始まり始まりー。

リュウガ「だから、どういうことだよ！」

第33話：決着？ 悪魔の16歳VS生意気な10歳

俺をバリヤードの5連続バリアー投げが接近してきた。

確かに、アイツは未来を見れるため避けるのは確実に無理。だが……。

「いまだ、オオタチ！」

「タチャー」

俺は言ったと同時に耳を両手でふさいだ。

バオオオオン

耳を貫くような衝撃音とともに、俺の目の前にまで接近してた5連続バリアーが上方向に吹っ飛ぶ。

「な、何？ 何よこの音！？」

「キ、キルー！？」

沙耶もキルリアも衝撃音に耐えられなかったか、両手で耳を塞いでしまう。そのせいかキルリアの両手に形成された淡い水色の水晶のような玉がなくなっている。

多分だがこれがないと、未来を見ることはできないはずだ。

「オオタチ、ストップだー！ 地上に戻ってこい」

俺が大声で叫ぶと同時に、耳を貫くような衝撃音が聞こえなくなる。その後で俺の目の前にある穴をほるで作った穴からオオタチが姿を現した。

「な、なんなのよ！」 沙耶が若干動揺しはじめる。

まあアイツに…沙耶にとっては、予想外のことが起こったのだろ

うな。

さて種明かしといくか。

「教えてやるよ。これはオオタチの“ハイパーボイス”だよ」

「なっ…」

「バカのためにもっと簡単に説明してやろうか？ 音波の力で衝撃を生み出してバリアーを防いだんだよ」

俺は余裕の笑みを見せながら沙耶に挑発をする。

ハイパーボイスはさっき説明した通り、音波の力で衝撃・爆音を生み出して相手にダメージを与える、ノーマルタイプの特殊系の技だ。

そして、キルリアのサイコフューチャーを妨害することもできる。サイコフューチャーはかなりの集中力があると俺は見た。それをハイパーボイスで人体のダメージではなく、聴覚にダメージを……鼓膜に刺激を与えることで集中力をきらしてサイコフューチャー自体をできなくして未来すら見させない、これが俺が思い付いた方法だ。

「キ、キルリア、速くサイコフューチャーを」

キルリアが集中しはじめた。どうやらサイコフューチャーを発動させるのには少し時間がかかるみたいだが、徐々に淡い水色の水晶のような玉が形成しはじめた。

ならそれを防ぐまでだ。

「オオタチ、ハイパーボイス！」

「バリヤード、すべてのバリアーを前方に集中して」

地面に突き刺さっていたすべてのバリアーをサイコキネシスで合体させハイパーボイスの衝撃音防ごうとしている。

これは不味い……音の攻撃だから完璧には防ぐことはできないが和らげることはできる。その証拠にキルリアは集中力をきらさずに淡い水色の水晶を形成し続けている。

それにオオタチのハイパーボイスだって長時間できるわけじゃねえし、息をきらしてしまう。ハイパーボイスのために息継ぎをしな

きやならねえし……

「ちっ……このままじゃ逆転開始どころじゃねえ……負ける」

「残念ね。キルリア、サイコフューチャーよ」

「キルー」

ちっ……サイコフューチャーを発動されちまった！

「タア……チャ……タア……チャ……」

ヤベエ。ついにオオタチが息切れを……これじゃハイパーボイスが……なんてな。

「残念ね、今度こそ終わりよ！」

今度こそ終わり？

「相変わらずお決まりの台詞だな。残念か……まあそれはこっちの台詞だ」

「！？ バリヤード、すべてのバリアーをエアームドに！」

「ギエ！？」

ハイパーボイスを防ぐため合体していたバリアーをサイコキネシスで分解させた10数個のバリアーが空を飛んでいるエアームドに襲いかかった。

「ハハハハハ！ 残念、残念ね。エアームドで何かを企んでいたみたいだけど……え……？」

余裕の笑みから一変表情が曇る沙耶。それもそのはずだよな。

「ギイエ！」

「な……きいて……いない！？」

10数個のバリアーを一気にくらったはずなのに余裕の表情を見せるエアームド。

その後でバリアーが光の粒子となり消えていく。

まあそりゃそうだろうな。

「エアームドの高い防御力＋鉄壁×3回だぞ。んなとてつもなく防御力が上がってる状態で物理系の技をくらわしてもあんまりくらわねえだろ。いくら未来が見えててもな、防ぐことができねえんじや全くの無意味だぞ」

「……………」

凄い血相でこちらを睨んでくる沙耶。あれは相当悔しんでるな。

「さてと、これからお前が見た未来通りのことをするぜ」

俺は指の骨をバキボキとならす。

「え…いや…やめて！ やめなさいよ！」

沙耶が異常な焦りを見せる。

「誰がやめるかよ。さっきからの年上の俺を挑発的かつバカにした発言……………調子にのんじゃねえぞ。きっちり反省しやがれ、クソ10歳が！」

「や、やめなさいって……………」

この時点で沙耶の目には涙が溜まりこぼれそうになっていたが気にしなかった。

俺は両手で両耳を塞ぎ…そして…。

「エアームド、沙耶に向かって金属音！」

キイイイイイイン

「あ、うつ…耳が……………」

「キルー」

沙耶もキルリアも両手で両耳を塞いでいる。

金属音は金属同士を削った時にでる、聴覚を刺激する嫌な音を出す技。本来の効果は相手の特防を下げる技だがこんな感じにも使える。

「さてと、ここまではまだ序ノ口、地獄の時間はこっからだ。覚悟しやがれ。オオタチ、ハイパーボイス！」

バオオオオン キイイイイイン

「イヤアアアアア！　やめてやめてやめてやめてやめてー
ー！　ああああ耳が……耳がちぎれちゃう！」

「キルウウウー」

沙耶もキルリアも両耳を両手で塞いでいるが、それを貫通して聴覚にダメージを与えている。

音波の力で衝撃・爆音を生むハイパーボイスと金属同士を削った時にでる聴覚を刺激する嫌な音を出す金属音が合わさって、これ以上とない卑劣な音を生む。

「ハイパーボイスと金属音の合体技。名付けて“ヘル・ボイス地獄の音声”だ！
くらいやがれええー！！」

「イイイイヤアアア！　やめてえええー！　耳が痛いー！！」
「キルウウウー！」

これで“嫌な音”が合わさればもつと強力だっただろうな。つか正式なバトルじゃ使っては駄目か。トレーナー自体に攻撃してるのと変わらねえしな。

ヘル・ボイス地獄の音声を沙耶の方向に撃っているのだが、俺すら両耳を塞いでも耳が相当痛い。ということは沙耶達のもつと卑劣なことになってるだろうな。

バリヤードについては特性が防音らしく、音の技がくらわなみたいだ。正直これは予想外なことだったが、幸い沙耶とキルリアがあんな状況なのでバリヤードは非常にあたふたしている。

助かったな。

「オオタチ、エアームドストップだー！」

俺の声がヘル・ボイスにかき消されないよう大声で叫んだ。

「キ……キルウ……」

バタッ

「うう…キ、キルリア!？」

耳を塞ぎながら、目を回して気絶するキルリア。
こいつには相当きいたみたいだな。

「あとは、バリヤードだけだ。エアームド、ブレイブ——」

「グスン……」

「え？」

何だ？

「うう…グスン……う、うえくん、も、も…うイヤよおおお!」

さ、沙耶が泣き出した……。

「え、どうした……?」

「あんたの……グスッ…しえいよ…耳はいいし……うう……えぐ
っ……私だって……好きでこんなことやって……るんじゃ…グスッ
…にゃいのよ……バカーーー!! この悪魔!…! うわーーん

！！ ヤイバ兄ー！！ 耳が…えぐっ……耳が痛いよー！！
！ うえーん！！」

え……俺のせい…つか悪魔って俺の事！？

「え…なんか…すまん。だから泣き止んでくれねえか？」

「うわーん（泣）バカーー！」

ついには地面に座り込んで泣きじゃくってしまった10歳。

と言うか俺が泣きそうだよ。

え？ つかこの状況……いったいどうすりゃいいの！？

内心かなり焦っている俺であった。

第33話：決着？ 悪魔の16歳VS生意気な10歳（後書き）

沙耶「うう……耳が痛い……」

ヤイバ「テメエ、どういことだ作者！ クソ笑えねえぞ、おい！」

あの……沙耶ファンがいれば申し訳ないと思います。

ヤイバ「このクズが！ まあいい、リュウガだったかあの卑劣な主人公が！ 沙耶のかたきだ。ぶっ殺す！！」

沙耶「ヤイバ兄、お願いね」

泣き止んでるし！

ヤイバ「ああ、俺があ的主人公をぶっ殺して、主人公の権限を沙耶にわたしてやる」

沙耶「ヤイバ兄、ありがとう」

ヤイバ「当たり前だ。可愛い妹のため……俺は何でも殺ってやる！」

あの……君たち敵キャラだからね。それを忘れないでね。

ヤイバ「ああ！？ なんか言ったか？ クズが！」

怖い……。

沙耶「次回も見てね。今度こそ私が――」

主人公じゃないから！

第34話：迫り来る者（三人称）（前書き）

本当はこの話はヤイバを登場させる予定でしだが……あれからマツバやジュンサーや富沢さんがどうなったかもし書いてくべきかなと思
い……この話を書きました。しかも三人称です。

リュウガ「なんか出番がこないヤイバが可哀想だ」

マアリ「そうだよー」

そうしたら……

リュウガ「それ以上言ったらネタバレだろ」

うっ……。でも皆さんだいたい分かっていると思うから大丈夫。と
いうことでマアリ。

マアリ「うん。今回の話は“三人称”です。それでははじまりま
す」

第34話：迫り来る者（三人称）

「大丈夫ですか？」

「うう……」

ジュンサーが負傷した警察を状態を起こした。出血は少し多いもののそれほど酷い傷ではない。

「ジュンサーさん、これで全員です」

富沢が言った。

「ええ、速く救助隊のところへ……」

「うう…速く…」

苦しそうな声で喋る警察の人。

「喋らないほうがいいわ！ 傷口にひびくわよ」

厳しい表情でジュンサーが言うが、警察の人はそれをきかずに喋りつづける。

「わたしを…わたしを置いてに、逃げて…くださ…い」

「え…？」

警官の言葉に疑問符を浮かべるジュンサー。

そう…まだジュンサーは気づいていなかった。木の影からこちらを監視している人物に――

「ん……君は！？」

その言葉にジュンサーも富沢の目線の先を見るが気づいたころには、その人物の隣にいるポケモン……ユンゲラーが技を放つ準備をしていた。

「サイケ…光線…」

それはジュンサーを目掛けて放たれたものであった。

「キャアアアア!!」
森中にその悲鳴声が響いた。

「ハア…ハア…」

その頃…息を荒々しくして走っている者がいた。

そう…マツバである。

幸いかジュンサーと富沢らしき足跡が微かに残っておりそのあとを追っていた。

だが、もしポケモンの気配を感じとることができる少女、イシトに出会ってしまっているなら——そう考えるとだんだんと足取りが速くなっていた。

『無事でいてよ』と祈りながら……

しかし…

『キャアアアア!!』

「なっ!?!」

この叫び声をきいて事態は一変した。

今の高いトーンは声は確実に女性。それをきいたマツバはすぐさま誰の声かわかってしまった。

「くっ……ジュンサーさん達が危ない!?!」

自分の唇を噛みしめ、声が聴こえた方向へ全力疾走で走る。

「大丈夫ですか!?!」

慌ただしくジュンサーに声をかける富沢。

ジュンサーもサイケ光線を間一髪回避したみたいであり、すぐさま富沢に『大丈夫よ』と返事をした。

「あなたは確か……イシトさんでしたね。この警官を負傷させたのはあなたですか?」

声を低くくして、富沢がイシトに質問するが……

「私に攻撃を放ったのよ。それに近くに誰もいないわ。もうこの子しかないじゃない!」

とイシトの答えを言う前に、ジュンサーさんが怒鳴り口調で言った。

「そうだよ……。これは……。僕達の今後を……左右する……任務……。あなたたちも……。ここで……」

すると、ユンゲラーが攻撃を放つ準備をする。それを見た富沢がベルトからボールを取り出す。

「行ってください。ヤンヤンマ」

ボールからはトンボのような姿をしているポケモンヤンヤンマが出てきた。

「ここはわたしが食い止めます。ジュンサーさんは速くその人と一緒に救助隊がいるところに向かってください」

「…ええ…」

そう言った後、負傷した警官のもとへ行き、ボールからウィンデイを出し、警官とジュンサーを背中に乗せ、救助隊の所へ向かった。

行っただの確認をすると富沢は視線をユンゲラーのほうへ向ける。

相性で見ればヤンヤンマのほうが有利……。だが相手はポケモンの気配を感じとれる…そのポケモンの技を放つ前に溜めるエネルギーでどういった技がくるかもわかってしまう……。つまり攻撃を先読みができるということ。

そういった面では大幅に不利であった。それに富沢はポケモンは持っているものの、ポケモンバトル事態はあまり得意ではない。

富沢はバトルに勝つというより、時間稼ぎをする…そういう意気込みでバトルしようとしているのだ。

「ヤンヤンマ、シグナルビームです」

「チャージ…ビーム…」

お互いの技がぶつかり合い相殺してしまう。

「これは…」

富沢は少し焦っていた。技の威力でみればこちらの方が上。だけど結果は相殺。つまりヤンヤンマよりユンゲラーのほうがレベル高い。それにチャージビームは放った技のエネルギーを少しだけ自分に吸収させ特攻を上げる技。このままでは時間稼ぎにすらならない。

「こうなれば、影分身から高速移動です」

十数匹に増えたヤンヤンマがウンゲラーの周りを囲むようにジグザグに動く。さらにいえばヤンヤンマの特性は加速。高速移動と併用しているので、時間がたつたびにどんどんスピードが上がる。

「これでどうです」

「……………」

イシトは無表情でその光景を見つめている。まるでこんなたいしたことはない…そのような感じで。

富沢もイシトの表現を見て少し腹をたてていた。

「これならどうです。虫のさざめきです」

ウンゲラーを囲んでいるヤンヤンマが一斉に技を放った。もちろん本物は1匹なので本物以外は全部見せかけである。

虫のさざめきは自分の羽で振動で音波を起こして衝撃をあたえる技である。それをくらったウンゲラーは衝撃で吹っ飛ばされる。

「よし、やりました」

「ミラクル…アイ…サイケ…光線

「ヤ…ヤンマアアア」

「え…ヤンヤンマ!？」

十数匹に増えたからヤンヤンマの上から突然現れたウンゲラー。ミラクルアイを使って本物のヤンヤンマを見きわめサイケ光線をくらわせた。

富沢は驚いているだろう。あたったはずなのに…何故だ…と。

なぜなら、虫のさざめきをくらったのはウンゲラーではなく、身代りを使った…いわばウンゲラーの人形……。本物はレポートを使ってヤンヤンマの上へ。

虫のさざめきをくらったウンゲラーの人形は光の粒子となって跡

形もなく消えてしまった。

「これで……」

「ガーディ、火炎放射よ」

「サイケ……光線」

突如、不意を打つように富沢の視線の横から、ユンゲラーを狙って火炎放射が放たれた。それを直ぐ様察知し、サイケ光線で互いの技を相殺しあった。火炎放射をガーディに指示をさせた人はわかるとおり……

「ジュ、ジュンサーさん!？」

そうジュンサーである。

「なんであなたが……、負傷した警官を救助隊のところへ連れていていたはずですよね」

「ええ……、そうよ。だけど富沢さんだけじゃこの子を止められないと思ってね。ウィンディに、私を降ろして負傷した警官を救助隊のところへ連れていくよう頼んだの。それに……」

「それに? なんですか?」

「私達、警察なのに……ほとんどリュウガ君やマツバ君に頼りっきりじゃない!」

全然役にたっていない……そう思っているのだろうか。

泣きそうになりながら、自分の両手の拳に力をいれ震わせている。

「そ、そんなこと……」

「ないわけじゃない!？」 博物館の時だって眠らされて人質にされて迷惑をかけたじゃない!!」

「……」

ついには何も言い返す言葉がなくなってしまったのか黙りしてしまふ。

ジュンサーだけではなく、富沢も自分の事を思い返していた。

正直、ほとんど役にたっていない……そう思っていた。

「だから……。この子のポケモンを倒して身柄を確保するわよ。私達2人で。これ以上足手まといにはなりたくないわよ」

その言葉を聞いた後、富沢はゆっくりと深呼吸をした。

そして…。

「そうですね。ジュンサーさんの言う通りです。いきますよヤンヤンマ」

「ガーディ、準備をして」

「ヤンマー」

「ガウ！」

ヤンヤンマもガーディも戦闘モードにはいる。

それを眉を一つも動かさず見つめているイシト。

「シグナルビームです」

「火炎放射よ」

2匹とも技を放つ準備をしている。

その時である。

「サイコ…キネシス…」

「なっ…え…」

「なんですか…」 ヤンヤンマとガーディの動きが同時にストップしてしまった。

ユンゲラーのサイコキネシスで2匹の動きを静止させたのだ。ヤンヤンマもガーディも必死には抵抗をしているもののサイコキネシスが解ける様子もない。これではどうしようもできない。

「ユンゲラー…準備…して…サイコ…フラッシュャー…」

イシトがそう告げると、ユンゲラーが眩い光を発生させた。

「う…眩しい」

「目が…痛いです…」

数秒たつと徐々にだが眩い光が弱くなってきたが…もうその頃には…。

「ヤ……ヤンヤンマ!？」

「ガーディ!?! しっかりして!」

地面に倒れてこんで目を回している2体のポケモンの姿があった。

「これで……終わり……だよ……。サイケ……光線」

それは明らかに富沢とジュンサーを狙って放ったものであった。

もう駄目だ……。ヤンヤンマとガーディが一瞬にしてやられてしまった。2人にはサイケ光線を避けようという思考はない。

結局足手まといのまま……そう感じてしまったのであろうか……
2人共……地面に座り込んで目を瞑ってしまった――

「ゲンガー、シャドークロー」

サイケ光線をシャドークローでかきけしてしまう。

「えっ……あ、あなたは……」

「マツバ君……」

力が抜けたような声でその名を呼ぶジュンサー。

全力疾走で走ってきたせいかマツバは息が荒々しく、汗もびっしょりである。

一呼吸おいた後……口をゆっくりと開く。

「ジュンサーさん。富沢さん大丈夫かい?」

マツバの問いに、ジュンサーと富沢は黙って頷いた。
「何とか、間に合ったみたいだね…。」

イシト……ここからは僕が相手だ！」

「……………」

今のマツバの言葉には威圧感がたつぷりである。そのせいか、さつきまで眉を一つも動かさなかったイシトの表現が、真剣な表現へ変わっていった。

第34話：迫り来る者（三人称）（後書き）

次回も三人称です。

ヤイバ 「クズがああ！ 出番まだかああ！」

沙耶 「ヤイバ兄、落ち着いて」

……………。

第35話：ジムリーダーの実力 マツバVシイト（三人称）（前書き）

マアリ「なんかーひっさしぶりねー。あれ？ リュウガにゴウ、ハビちゃんはい？」

ゴウ「ハビちゃん？ あの3ヶ月も放置した奴だぜ？ どうだかだぜ！」

リュウガ「まあどうしたか言ってもいいが……R指定もんだぞ」

マアリ「じゃあ……この小説はR指定を設定してないからー、ご想像にお任せというこで……」

ゴウ「35話、始まるぜ！」

第35話：ジムリーダーの実力 マツバVSイシト（三人称）

「いくよ。ゲンガー」

「ユンゲラー：準備…」

ゲンガー、ユンゲラーとも、いつでも攻撃や防御に備えられるよう戦闘体勢に入る。

ジュンサーさんと富沢さんは、息をのみその光景を黙って見守っている。

緊迫した空気の中で先に口を開き、攻撃を仕掛けたのは、マツバさんとゲンガーであった。

「ゲンガー！」

「ケケケ…」

シュン

「えっ…？」

ジュンサーが小さな声で呟いた。

何故なら、マツバさんが言葉を発した瞬間に目の前から姿を消したのだ。そのせいか戸惑いを隠せないジュンサー。

ゲンガーがどこへ消えたか？ それはポケモンの気配を感じることもができるイシトはすでに場所を特定していた。

「いまだ！」

ユンゲラー背後：いやユンゲラーの影から現れたゲンガー。影打ちである。

事情を知らない他人からみれば、攻撃が決まったように見えるがそうはいかない。

「テレポート」

ゲンガーの攻撃が決まる直前にテレポートで姿を消してしまった。何処に現れるのか…？ そう思い周囲を見渡すマツバ。

「ん？ 上だ！？ ゲンガー！」

「遅い……サイケ…光線…」

ゲンガーの真上に現れたユンゲラー。真下にいるゲンガーにサイケ光線を放った。

「ユンゲラーのいる方向へ跳んで」

「ケケケ」

素早い身のこなしでユンゲラーに向かってジャンプするゲンガー。しかし…

「富沢さん。あのままじゃサイケ光線が当たっちゃうわよ！？」

「うっ…うぐ…」

いまいち落ち着きがないジュンサー。確かにこのままだとサイケ光線をくらってしまうのだが……相当慌てているのか、富沢の胸ぐらを掴みブンブンと勢いよく横に振る。富沢が物凄く苦しそうである。

「うぐぐ……ジュ、ジュンサーさん！ あの方はポケモン協会から選ばれたエンジュシティのジムリーダーですよ。考えなしにそんなことをしませんよ」

富沢の言う通りマツバが考えもなしにそんな指示はしない。

「シャドークロード」

右手の爪に紫色に光り、サイケ光線を貫いて、そのままの勢いでユンゲラーに近づいた。

「危ない……速く…リフレクターを…」

「遅い、シャドークロス！」

右手だけではなく、左手の爪の部分も濃い紫色に光らせ、リフレクターが発動する前に、ユンゲラーを十字に切り裂いた。その勢いでユンゲラーは地面へ叩きつけられてしまう。

「…ユンゲラー……大…丈夫…？」

イシトが心配そうな表情でユンゲラーに近づいた。

「…ユ…ン……」

少しふらつきながらも体勢を立て直すユンゲラーだが、効果抜群

のゴースト系の技をくらってしまっているので多少のダメージは計り知れないだろう。

「やったわ！ でも……あの子はポケモンの気配を感じとることができるはず……よね。何でユンゲラーに技を当てることができたのかしら？」

首を傾げるジュンサー。自分達はユンゲラーに1度も技を当てられなかったのに……と思っているのだろう。

「私は……なんとなくですが、当てることができたかが分かりましたよ」

「え!？」

何でわかるの？ と言いたげそうな表情をするジュンサー。

「推測になってしまいうのですが、ポケモンが技を放つためにエネルギーを溜めるの時もそうですが、技を放った時もほんの少しですが隙ができてしまうんです。その間に攻撃をされると、どの技が来るとわかっていたとしても対応が難しくなってしまうのです。そこを狙ったのでしょうか」

富沢さんの力ある発言に、ジュンサーさんは『おーっ』言つて、軽めに数回拍手する。

「その通りです。富沢さん」

マツバさんも富沢を感心するように言った。

富沢さんは少し顔を赤め照れるが、今はそんなことをしている状況じゃないと気付くと、少しづつ表情が引き締まっていく。

「さて……イシト、まだこれ以上僕とバトルを続けるかい？」

イシトもだが、富沢もジュンサーもマツバの発言に疑問符を浮かべる。

「……ユンゲラー……」

イシトがそう言うと、ユンゲラーは戦闘体勢にはいる。

それを見てマツバもゲンガーに指示して戦闘体勢に入らせる。

「そうか、これ以上君と戦いたくはなかったが次で決着をつけさせてもらうよ」

その力あるマツバの言葉に、周囲はまた緊迫した空気につつまれた。

風が吹き、森の木々が揺れる音しかなくなった時に先に口を開いたのは意外にもイシトであった。

「僕も…みんなも……ここで……負ける…わけには…いかない……この…依頼が…成功…すれば……“あの方”に……引き取って……もらえる……から……」

「「あの方……？」」

そう言えば、リュウガとマツバが戦ったケンとトウもそんなことを言っていたなと思い返すマツバと富沢とジュンサー。

「あの方とはいったい何者なんだい？」

「……」

そう言うマツバだが、当然あの方と言われている者の正体を教えるはずもなく、無言を貫くイシト。

「やっぱり教えてくれないか……。ならばバトルに勝ったら教えてもらうよ」

「……いい……よ……。でも……僕も……負けない……負けられない……ユンゲラー……あの技……使うよ」

イシトの指示に頷くと、レポートで上空に移動した。

マツバもゲンガーに警戒するよう指示をする。

「いくよ……サイコ……フラッシュャー……」

「いやあああ」

「ま、眩しいです」

「くっ……」

眩い光がマツバと富沢とジュンサー、そしてゲンガーを襲った。

この技は富沢とジュンサーの手持ちのポケモンを倒した技だ。正直打つ手もなかったのだ。

富沢とジュンサーは光に覆われた中で、マツバの勝利を願うしかなかった。

数秒がたち、光が弱まったのを確認するとジュンサーと富沢は当然ゲンガーの方を直視する。

どうか無事であってくれと願う2人だが…。

「ケケ…」

「なっ…!？」

ジュンサーが驚いた口調で叫んだ。その光景はゲンガーが息を荒くして地面に立て膝をついていたからだ。

まさか…負けた…。脳裏にその言葉だけが走ったが…。

「ユンゲラーの方向を見てください、ジュンサーさん！」

「えっ？」

落胆していたジュンサーがユンゲラーを見ると、驚きの表情に変わった。

「…ユン…ゲラー…」

「○×◇☆@#……」

そこにはわけもわからない言葉を発しながら目を回し、フラフラしているユンゲラーの姿があった。

そう、これは紛れもなく混乱状態である。

「イシトはわかってるけど説明するよ。サイコフラッシュャーという技は、フラッシュで眩い光を出す。だがフラッシュを使うと相手も

見えなくなってしまうからミラクルアイを使って場所を特定する。そして場所が特定したらサイケ光線なりなんでもいいから相手を攻撃する……だろ。ここにくる前にジュンサーさん達に使っただろ？ 遠くからだけど見えていたからね。正直見てなかったら危なかったよ」

あの無表情のイシトが少し驚いた表情へ変わっていった。

「でも……なんでユンゲラーは混乱状態になったのかしら？」

「私も……わかりません」 ジュンサーと富沢が混乱する中でマツバが口を開く。

「それはね、フラッシュを使うと目を眩ますことができるけど、自分も相手ほどではないけど、見えなくなるから相手を見るためミラクルアイを使う。その時に“怪しい光”を使ったのさ」

その説明に納得する2人。それにミラクルアイでゲンガーが怪しい光をみたので通常より更に酷い混乱状態に陥っているユンゲラー。何故かさつきから狂ったようにフラダンスをやったり、コサックダンスをやっている。

「さあ、勝負はついたよ。ポケモン像があるところまで案内してもらうよ」

「……僕は……僕達は……負ける……わけにはいかない……」

イシトが言葉を発した後、自分のベルトからモンスターボールをとりだし投げようとする。

それを見て富沢とジュンサーが止めるべくイシトの方向へ駆け寄ろうとするが……間に合わない。

しかし何者かが目にもとまらぬ速さでイシトに向かい、ボールを投げる前に両腕を掴んだ。

「ケケケ…」

その正体はゲンガーである。イシトと目を合わせながら不適な笑みを浮かべる。

「できればしたくはないけど、これ以上抵抗するようなら、ゲンガーの催眠術で眠ってもらうよ」

「……………わかった……………案内…する…」

ゲンガーがイシトから離れると、マツバはゲンガーをボールに戻す。イシトもウンゲラーをボールにしまつて、右足を前に出し、歩き出そうとした時……

「…………えっ…さ…沙耶…そんな…………」

突然、そう呟き上を向いてブーツとしてしまうイシト。

「えーっと…どうされましたか？」

「富沢さん。騙されないで！ これは演技よ！ きつと隙について逃げるきだわ！！ そうは行かないわよ！！！！」

「ちょっと待ってください！」

若干興奮気味のジュンサーを落ち着かせるマツバ。

その後イシトに、『どうしたんだい』と質問し、問いただせようとする。

するとゆっくりと口を開いた。

「本当は…………案内…しない…つもり……………だけど……………この…ままじゃ……………お願い……………ヤイバ兄…を……………沙耶達を……………」

助けて！」

「「えっ!？」」 まさかのイシトからの予想外の言葉。3人が同時に驚愕した。

敵のはずのイシトからの『助けて』と言う発言。驚かないはずがない。

特にジュンサーさんは開いた口が塞がらない状態である。

「えっ…そ、それはどうゆうことだい？」

少し慌てながらも聞き返すマツバ。いつも冷静な彼もまた驚きを隠せないでいた。

「僕は…ここへ行く前に…聞いて…しまった…。この…依頼が…失敗…したら…あの方が…口…封じのために…始末する……って…」

『口封じ』『始末する』どうも何かが引っ掛かる。

「さっきも言っていたけど“あの方”というのは何者なんだい？」

真剣な表情でマツバが質問をする。

一瞬、ためらうそぶりをみせたが、マツバの表情を見ると、それをやめゆつくりと口を開く。

「あの方は…実は――」

エンジュシティ上空

飛行艇…内部

「目的地までまだか!？」

年齢が50近くで、体型は少し太り気味のスーツ姿の男が不機嫌そうな口調で言った。

「すみません、少々お時間が…」

黒服につつまれた操縦士の人が言った。

「フン、まあいい」

コツコツコツ…

「そう、慌てなくてもいいこと」

後ろから、紫色のマントとサングラスを着け、紫色の髪の毛の女性はその男に近づき不適に笑いながら言った。

「フン、ポケモンハンター風情が! ワシの何が分かるんじゃ」

「ポケモンハンター風情って…、貴方のことなんて何もわからないわよ」

太ったスーツ姿の男が舌打ちし、目を鋭くするが…。

「…フン、まあいい。そういやきいてなかったなあ。貴様がワシについてきたわけをな…アリスよ…」

冷静に紫色の髪をした女性…アリスにそう言い返した。

「たまたまあなたがいる近くで仕事があったからよ。それとただの気まぐれかしら…」

「フン」

鼻で少し笑う。

「あなたもだけど、本職以外に仕事があるのも大変よね。疲れるわ」
自分の左肩を右手で軽く叩く素振りを見せ、そう言い放つアリス。
「いいだろ。この組織に入ってるおかげで本職のほうが上手くいってるのだからな」

不適な笑みをうかべて言う。

「そうだね。でもなんで貴方の趣味なんかはこの組織の人達を使うのかしら」

「念のためじゃ！ それとやつらの失敗した場合の処理を行うため……だったりするがな」

「貴方って、いやらしいわ」

「ほざいてろ。まあ奴らなら失敗することなかろう。フッフッフッ……ハハハハハハハハハハ！ 私のコレクションになるホウオウ像はもう少しじゃ！！」

あの大企業、シルフカンパニーの幹部……そしてロケット団、特殊幹部グラン様がな！！ フハハハハハハハハハハ！！」

飛行艇内に大きな笑い声が響き渡った。

当然、リュウガはまだ……この事実には気付いてはいない。まさかポケモン像ごときにあのポケモン犯罪組織、ロケット団が関連しているということ……。

第35話：ジムリーダーの実力 マツバVSイシト（三人称）（後書き）

あ……た、助け……

バタッ

沙耶「ハビト兄、大丈夫？」

ヤイバ「クズが……。焼却炉に捨てとくか」

沙耶「……じ、今回はヤイバ兄が活躍するわよ。みんな見てね」

ヤイバ「クズが……。やっと出番か……。だが、いつ次回が投稿されっかわかんねえけどまた見ろよ！」

だから、ヤイバは……敵……だからね……。

第36話：これがブレイドブラザーズの結成秘話よ！（前書き）

すみません更新遅れ――

リュウガ「なめんな！」

ゴウ「絞めてやるぜ！！」

ちよつや…め……ギャアアア！！

マアリ「（最近のハビちゃん大丈夫かなー）それでは36話始まり
」

助けてー！

第36話..これがブレイドブラザーズの結成秘話よ！

「は・や・くー、行きなさいよ！」

「いてえよ！ さっきから人の頭をバチバチ叩くんじゃねえよ、クソ10歳が！」

ちなみに今がどういう状態か説明すると…ポケモンの像があるヤイバいる場所へ、沙耶をおんぶして歩いている…状態だ…ハア…かなり不本意なんだよな。こんな生意気なクソ10歳をおんぶするなんてなああ！！

ムカついても仕方ねえ。何故こんな状態になったのかと言うと――

～10分前～

「ヒグ…う…うえーん、ヤイバ兄ー」

「……………」

ど…どうしようか…。

俺の頬や背中、というか身体全体から汗が流れるのが嫌な程に伝わってきやがる。

ああ…なんでこうなんだか…。

それより何とか…しねえと…。

「まあ…な、とりあえず泣きやめよ…な？」

「うう…グスッ…うわあああああん!!!」

泣き止まねえし。仕方ねえ。

俺は背負っていたバックを地面に置き、チャックを開け中からあるものを取り出した。

「ほら、これでもやつから泣きやめ」

渡したのはポケモンチョコレート、略してポケチョコ。ウエハースにチョコを挟んだお菓子である。ウエハースのサクサクした食感と、中にあるミルクチョコレートの甘さが絶妙で、おまけにポケモンシールが1枚同封してあり、子供に人気な商品である……がまあこんなんで泣き止むはずが…。

「んん…にやかにや…おいひいわにえ…」

……。普通に泣き止んだな。さすが10歳…。食べるのはええし。しかも口元にチョコがついてっぞ。言わねえけど。

「ピカチュウか…。まあいいわ」

こいつ内袋を破って、シールまでとりだしてやがるし。

「まあ…泣き止んだところでヤイバ兄とやらのいる場所へ案内してもらおうか」

「うるさいわね！ この悪魔！ 『案内してください。お願いします』でしょ。それが人をお願いする態度かしらね？ わかったなら速くそう言いなさい。このバカ悪……」

「うるせえんだよ！ クソ10歳が!!」

バシイイイ

「キヤア!？」

あ……。さすがに沙耶の態度にイラついたせいか、沙耶の頭部にチョップをくらわしてしまった。ヤベエ……。

「うわああああん! バカー!」

俺は自分の頭部をボリボリとかき、空を見上げながらこう思った。

ああ…早く…コガネシティに帰りてえ……と。

だがさすがにこのまま突っ立って、沙耶の泣きわめいている姿を見たって時間の無駄だし……。ああ! クソめんどくせえ!

「はあ……頼むから…泣き止んでくんねえか……?」

沙耶に向かって弱々しい口調で言った。

すると涙を脱ぐってゆっくりの口を開いた。

しかし沙耶の口から発せられた内容は俺の予想を上回るものであった。

「グス……なっ……ならな、泣き止む……うっ……から……私の…私の!
“下僕”になりなさい!」

……………。はあ?

さすがに俺は自分の耳を疑った。

“下僕”……？

いや、まさか…10歳の分際でそんな発言するわけねえ…よな。

俺はそう自分の心に言い聞かせていたが……

「下僕…。何をそこでボーツとしてるのよ。私はさっきのポケモンバトルで疲れちゃったのよ。もうくたくたよ…。だ・か・らヤイバ兄のところまで案内してあげるからおんぶしなさい」

「……………」

こ、このクソ10歳が！

俺は右の拳を震えるぐらい握り締め、怒りを隠していた。

「黙っていいのかしら？ あなたの目的はポケモンの像を取り返すことでしょうか？」

クソ野郎が……。

こいつをヘルガーの雷の牙で痺れさせたり、オオタチ&エアームドのヘル・ボイスで鼓膜を粉碎したり……とりあえずボコッてポケモン像の場所を吐かせることも考えてはみたんだけどさ……こんなことやった時点でジュンサーさんに捕まるし、しかも相手は10歳

の女だぞ…。

別にいいけど…好感度が下がる!!

「クソ畜生が！」

そして現在にいたるわけだ。

「黙ってないで、何か喋りなさいよ！ このバカ下僕悪魔!!」

いでえ！ 沙耶が俺の右の頬を容赦なくつねってきやがる。

「わかったから、つかいてえから！ 離せ！」

ああ、なんでこんなことしてるんだろうか？

はあ…でもしつかしなんか喋れていわれともな…。

ん…まあ、ちよつとこいつらのことで引っ掛かることがあつからな。きいてみるか。

「ケンって奴が『オイラ達だって、本当はこんなことしたくない』って言ってたんだが、なんで泥棒なんて始めたんだ？」

「う、うるさいわね、下僕の癖に！」

「いべべべべべ!! やべばおお!! (訳..いででで!! やめろー!!)」

両手で俺の左右の頬を同時に引っ張ってきやがった！ このクソチビツンデレ10歳が!!

ああ…痛え…。

やっと放してくれたぜ。まあ泥棒をやってる理由なんて言うはずもねえよなあ…。

クソ…もし次にでもイラッてしたことをやりやがったら読者の皆さんからの好感度が下がろうが、ぜってえヘル・ボイスくらわしてやる…！！

「ねえ」

「ああ…んだよ！」

「泥棒をやってる理由くらいは喋ってもいいわよ」

喋ってもいいんだったらなんであんなこと言って、俺の頬を引っ張ったんだよ！

「知りたくないわけ？」

「もう…別にいい」

俺は呆れ口調で言った。

正直、疲れたし…。

「いいからききなさい！ 下僕の方で私に逆わないでよ！！」

ああ…うるせえ！

「きいてやっから耳元で騒ぐな！」

まったく…めんどくせえ奴だ。ケンもトウもイシトも、そしてヤイバもこいつに苦労してんだろうな。

「泥棒を始めた理由の前にヤイバ兄のことを言うけど、ヤイバ兄ってシンオウ地方出身なの」

シンオウ地方か…。行ったことはねえけど確かマアリがアイドルの活動をしているところだったな。

アイツ、頑張っているかな…。

「ケン兄とトウ兄からきいた話なんだけど——」

お前が直接ヤイバから聞いたわけじゃねえのかよ。

「ヤイバ兄はカンナギタウンっていうところに住んでいたんだけど、13歳の時町の秘宝を盗まれる事件があったらしくってヤイバ兄はその秘宝を取り返すために泥棒と戦って奪い返したのに――」

「そのまま秘宝を持って逃走か？」

「そんなはずあるわけないわよ！　まじめにききなさいよ！！　バカの下僕のためにもう一度言っただけあげるわ！　まじめにききなさい！！」

「……。じゅ……10歳に正された……。文句が何一ついえねえんだが……。っーか」

「ヤイバって何歳だ？」

俺は素朴な疑問を沙耶にぶつける。

「確かね、16歳よ」　えっ……同い年かよ！

「話を戻すわよ。それなのに、町の人達はヤイバ兄を疑っただけじゃないく、町から追い出そうとしたのよ！」

「はあ！？　沙耶の話しが本当なら町の奴らは何故同じ町に住んでいたヤイバを疑うんだ？」

「追い出そうとしたって……ヤイバって町の奴らに恨まれてたのか？」

「元々ヤイバ兄は違う町からきたみたいなのよ。その町ってよそ者が嫌いみたいだったから……。でも一緒に住んでいた義理のお姉さんと長老さんだけはヤイバ兄の味方についたんだけど……。その町に嫌気がさして自分から出ていったのよ。」

もし俺がヤイバの立場でも、んなことされたら出ていって……。だろうな。

「出ていった後はしばらくはシンオウ地方でポケモンリーグを目指して一人旅をしていたのよ。だけど……ホームレス暮らし同然のケンとトウに会ってね。」

最初はみんなと一緒に旅をしてたみたいなんだけど……。ポケモンセンターって身分を証明できる物がなければ泊まらないじゃない」

正確には身分を証明できる物を掲示するうえ、トレーナー登録を

している者だな。

「んじゃあケンとトウは身分証明書を持っていなかったから泊まれなかったのか？」

「そ・う・い・う・こ・と・よ。バカで悪魔な下僕のくせにわかっていないじゃない。」

俺は右手を握り締めこう自分に誓った。

こいつ……いつかぶっ殺す！！！ っとな。

「だからね、ヤイバ兄はポケモンセンターで支給されたご飯をこっそりとケン兄とトウ兄にわけていたんだけど、それがバレちゃってヤイバ兄もポケモンセンター出入り禁止になっちゃって……」

いったん話を途切れさせ、ため息をつく沙耶。

「それでこのままじゃ生きていけないってことになって、泥棒を始めたわけよ。これがブレイドブラザースの結成秘話よ！ わかったかしら」

笑顔かつ自慢気な表情で、誰もいない方向に指を差しながら言い放つ沙耶。

なんかこいつの態度イラつくんだが。ここまでで大分読者の皆様も飽きてるだろうな。「まあ……ある程度はわかった……がお前とイシトについてはなんでブレイドブラザースに入った？」

俺がそう言うと言線を上に向け、手を顎に当て考え始めた。

んな考え込む必要あるのか！？

「……ん……イシトについては私が仲間に入る前にいたけど、入った理由についてはきいていないからわからないわ」

わかんねえのかよ……

「んじゃお前はなんで入ったんだよ」

目を細めて、やる気のない口調で言ったが……沙耶の態度が一変する。

「な……わ、私のことなんて……べ、別に……いいじゃない！！」

顔を赤めて目線をそらす沙耶。

なんだこいつ…。なんで動揺してんだ？ そんな言いたくねえのか？

「ならいい。別にお前に興味ねえし」

こいつのことだ。こう言うのと、こいつは挑発にのって…。

「…なっ…なら…いっ…言っ…てあげるわよ！ わ、笑ったらしょ…承知しないんだから！！」

顔を赤面させ大声で叫ぶ10歳。

ムカつくけど、なんか性格わかりやすいし…こいつちよろいな…。

「私は…ああー！？」

なんだ！？ 沙耶が突然大声をあげる。

そういえばこいつの話にきをとられて気付かなかったが、このあたりだけ公園の広場みたいに樹木がない。

しかも目線の先に小屋が…ん？ 小屋の前にケンとトウ…とその間に誰がいる。まさかあいつは…。

「邪魔！ ときなさい、下僕！」

「ぐはあ…」

このクソ10歳が！ おんぶの状態から、両手を離して、両足の裏を俺の腰に当てそのまま、蹴りとばし、俺はその弾みで地面に倒れ込む。

ああ…くっ…腰いってえ…。沙耶にドロップキックをくらわされたようだ。

「ヤイバ兄ー」

沙耶は大声で叫び、走った勢いのままでケンとトウの間にいる奴に抱きついた。

「なんでアイツが沙耶と一緒にいるっすか！？ まさか…」

「さ、沙耶まで…ま、負けちゃったの？」

驚きを隠せない表情で俺の方向を向くケンと、下をみてガックリとしているトウ。

「沙耶……」

ケンとトウの間にいる奴が小さく呟くと、沙耶の頭を右手で軽くなでて、その後で一步一步……少しずつ俺に近づいてくる。

俺は苦い表情で左手を腰に当て立ち上がる。

（俺から見ても）左の頬に十字の傷、あの目付きの悪さ、人を見下すような冷たい眼光……そして沙耶がこいつのことをヤイバ兄って言っただ……ということは。

「お前が……ヤイバか……！ ポケモンの像は返してもらうぜ！」

俺はベルトについている、ヘルガーが入ったモンスターボールを握りしめ、ヤイバの顔を睨めつけて強く言い放った。

腰の痛みを我慢しながら……。
クソオ………いてえ……。

第36話：これがブレイドブラザーズの結成秘話よ！（後書き）

沙耶「ヤイバ兄、全然活躍しないじゃないのよ！」

ヤイバ「クズが……やっと主人公にあっただけだ」

すみません。その変わり沙耶のブレイドブラザーズの加入の理由を暴露します……か？…。

ヤイバ「俺が次回あたりで喋ってやろうか」

沙耶「やめてー！ ヤイバ兄ー！！」

まあ話すか話さないかはわかりませんが。また次回で。

ヤイバ「ケツ…次回いつ更新すんだか…」

第37話：ヤイバの覚悟（前書き）

マアリ「はりきっていくよー……ってハジちゃんは？」

リュウガ「そーいや俺とゴウでぶっ飛ばした後姿が見えねえな」

マアリ「……………そ、それでは37話はじまり」

第37話：ヤイバの覚悟

俺はヤイバの顔を睨めつける。するとヤイバも俺の顔を睨めつけ返してきた。

そして数秒たった後でゆっくりと口を開いた。
何を言ってきたやがる!?

「クズが……返してもらおうぜとか言ってテメエにポケモンの像を返すと思うか？」

「別に思っちゃいねえよ」

まあそうだろうがな。なら……このまま挑発し冷静さを失わせ、戦闘にもっていけばこっちが多少は有利には働く……か？

いや……そもそもこいつがどれだけ強いかわからない。ただ沙耶の話からすると確実に5人の中では強い！　つか沙耶にも手こずったしな……。マツバさん抜きで戦闘にもっていくのも危険か？　ならここは時間稼ぎをするか？

俺が必死に考えていると、再びヤイバが口を開いた。

「そういや、沙耶……ちょっとこっち来い」

「え……うん……」

ヤイバに手招きをされ、沙耶が駆け足で近く。

するとヤイバが沙耶の顔をじーっと見はじめる。

「……」

見られてるのが恥ずかしい……のか……？　何故かは知らないが徐々に沙耶の頬が赤くなってきた。

そして何かに気づいたのか、ヤイバが姿勢を低くし沙耶と視線を合わせる。

「おい、沙耶……」

「えっ……な、何……？」

「……………なんか口についてっぞ」

「へえ……………」

まぬけ面丸出しで気が抜けたような声をあげる沙耶。

「ああ…さっきこいつにやったチョコだな。まあ気づいたんだが…
…めんどくせえから言わなかったがな」

「こーのーバカ悪魔ー！！」

沙耶の身体全体から紫色の邪気？（殺気？）を出しながら、凄
血相でこちらを睨んできた。

まあ…随分ベタな展開なんだが……。

「あー恐いー恐い（わざと棒読み）」

わかったから速く口を拭け。チビ……」

俺は『チビ』の部分だけわざとボソツて言った。

すると聞こえていたのか…ポケットからハンカチをとりだし速攻
で口元を拭いた後、鬼の形相でこちらを睨んできた。

あーこえーこえー（心の中で棒読み）

「フツ……」

「あー！！ 今私のこと鼻で笑ったでしょ！？ ヤイバ兄のバカア

ア！ もう知らない！」

顔を膨らませ、そっぽむく沙耶。

ガキだな。

「ケツ………ったく…毎回毎回そう怒んなって……」

そう言いながら、沙耶の頭に手をおき、軽くなでなでする。

「ん…もう………いつもそうやって……」

何故か恥ずかしそうな表情をし、顔全体を真っ赤にして目線を下
に向ける。

んーあの表情…そしてさっきまでの言動。

まさか…沙耶はヤイバのことが好き……なのか？

でもヤイバは沙耶のことを本当の妹みたいに扱ってるみたいだし

……。

まあ…知ったところでどうだかって感じだしな…。

「おい沙耶、そういえば…目え充血してねえか？」

「えっ…これは…えっと…その…」

ああ…多分俺が泣かせたせいだな。

ヤイバの何気ない質問に沙耶は何故か目線をそらす。

すると徐々に沙耶はヤイバの視界に自分の顔が映らないように後ろを向き俺を見た。

あ…あのクソチビ…まさか…。

沙耶の表情を見た瞬間、次に沙耶がやろうとしたことがすぐにわかってしまった。

沙耶は不気味なくらいの憎たらしさ全開でニヤツと口元に笑みを浮かべた。

そして次の瞬間……。

「う……う……うわあああん……ヒグ……うえ……うう……あ、アイツが……うっ……わ、私……が……ポケモンの像の……ヒグッ……ありかを……吐かせる……ために……うう……いじわる……したの……うわーん」
バカにでもわかるウソ泣きでヤイバにすがり付く。

やつぱりやりやがった……。

はあ。

「本当か沙耶…」

「う……うう……」

ヤイバの質問に、泣いたふりして何度も何度も頷く。

……たく…。

「ウソ泣き全開で何やってんだよ。バカか？ 演技下手なんだよクソチビ…」

と頭をボリボリとかきながら、呆れ口調で言った。

「誰がチビよ！ このバカ悪魔ー！」

「おい…ウソ泣きはどうしたよ。もう終わりか？ チビ！」

「キーーー！！」

怒りのあまり頭から湯気を出しながらキレる沙耶

「沙耶、落ち着くッス。そんなに怒っていると細胞が死んで身長が伸びなくなるッスよ」

「だゝれゝがゝチビよー！！」

「チビなんて一言も言ってな…：：：ギヤアアアアア…：：：ッス」

「ケ、ケン…：：大丈夫ー！？」

ケンとトウでキレる沙耶を落ち着かせようとしているのはわかったが…：：火に油を注いでるようなもんだぞ、あれは。

沙耶なんてブチギレてケンの頭部をおもいきり噛み付いているし…：。トウなんて止めようとしているのはわかるがオドオドしてるし…：。別に怒るからって身長が伸びなくなるわけじゃねえし…：つかなんだこのミニコントは？

「落ち着け、お前ら！！」

この異様とも言える空気を一掃したのはヤイバだった。

この一言で三人はびびったのか、静かになる。

「たく…：、おいテメー」

「テメーじゃねえ。俺の名前はリュウガだ」

テメー扱いされるのはいやなので一応名乗っておく。

「ならリュウガ…、言っても無駄だろうが、俺らを見逃す気は――」
「ねえよ！」

話の内容は大方わかったのでヤイバが言い終わる前に返答をした。
「ちよっとバカ悪魔ー！ 最後までヤイバ兄の話をききなさいよ！
バカのためにもう一度言ってー」

あー、ぴーちくばーちくうるせえチビが一人いるが、スルーして
と。

「ケツ…クズが。やっぱテメーと闘うしかねえのか？」

「お前が素直にポケモンの像を返せば闘わずにすむんだけどな」
まあ言ったところで返さないだろうけど。

「ケツ…やはり無駄か…。なら覚悟は…：…できてるだろうな」
指をバキバキとならし、鋭い目付きでこちらを威嚇する。

クソ…あっち確実に戦闘モードだな。マツバさん抜きで闘うのは
ヤバイような気がするが、仕方ねえな。

「ああ。かかってこいよヤイバ兄様」

平静を装ってお得意の挑発はしてみるが、内心俺は少し焦っては
いる。

「チツ…調子にのってんじゃねえぞ！！ ゴミクズが！！！！ テメ
ーはケンやトウや沙耶の仇。それにこの依頼が成功すればあの方に
引き取ってもらえんだ。これにはブレイドブラザーズの存続と、俺
らの生活がかかってんだよ。もしこの依頼を失敗したら…：…あの方
に捨てられて…：俺らは今後生きて行ける保証もねえ！ わかるか
！？ 俺らが背負っている覚悟が！！ テメーみてえなゴミクズと
はわけががちげえーんだよ。悪いがテメーを殺す気でやっかんな！
！」

『絶対に負けられねえ』そういう覚悟はひしひしと伝わってきた。
ヤイバは腰に着けているベルトからモンスターボールを取りだし
地面に投げる。

すると、中からはネイティオの時空の断片で見た紫色の体毛につ
つまれた尻尾が前髪のようになっているようなスカンクみたいなポ

ケモン、スカタンクが出てきた。

クソ：言わずともヤイバの目を見ただけでわかる。アイツの覚悟は本当に生半可かなものじゃないって。だから正直こいつにはあまり勝てる気がしない。だから焦ってる。

俺なんかポケモンの像を取り返すという依頼を受けただけで、あいつみたいな覚悟っていうものなんてねえに等しい。

けどアイツらがやっていることは犯罪だし、ポケモンの像を奪われて悲しんでいる人も沢山いるはずだ。

『未来は変えられる』『そのためのきっかけ』：マツバさんが言ってたな。俺はこいつらを救うつもりはないが……今は目の前のことと集中しなきゃな。こいつらに同情したって意味ねえ！

俺は目を閉じて、深呼吸をした後、ベルトからヘルガーが入っているモンスターボールを取りだし地面に投げる。

「出番だ。暴れてこいヘルガー！」

「ヘルウウウウ！！」

待ってましたと言わんばかりに、元気よくボールから出てきた。

「なあ、ヤイバ」

「ああ！？ んだよ！！」

「ケンも沙耶も言ってたけど、“あの方”つーのは何者なんだよ」
まあ、聞いても無駄だとは思うがな。だから沙耶にもきかなかっただけだし。

「笑わすなよ。ゴミクズが…答えるわけねえだろうが…。まあ…でも万が一だ。万が一この俺に勝てたら答えてやらんでもねえがな」

「言ったな。後悔すんなよ」

「フンツ…クズが…その言葉そのまま返してやるぜ」

ヤイバのその発言からは誰も口を開かず無言になった。少しの間静寂な空気が周りを包みこむ。聴こえるのは風で辺りの木々を揺らす音のみだ。

そして風がやみ木々の揺れる音が消える……それがバトルの始まり！

「ヘルガー、火炎放射だ」

「スカタンク、シャドーボール！」

さっきまでの静かさが嘘のようにお互い技がぶつかり合い、衝撃音が辺り一面に響いた。

この勝負……負けるわけにはいかねえ！

第37話：ヤイバの覚悟（後書き）

沙耶「ついに次回は憎きバカ悪魔VSヤイバ兄のバトルよ。きっとヤイバ兄が勝つと思うけど次回も見てね」

ヤイバ「ケツ：沙耶の次回予告はまったくあてにならんから、信用しねえほうがいいぜ」

沙耶「ちよつとヤイバ兄!!」

第38話：実力の違い： リュウガVSヤイバ（前書き）

マアリ「今月（11月）2回目の投稿だよー」

リュウガ「まあ1カ月以上空けねえよりはいい」

マアリ「そうね。速くストーリー進んで、私の出番を増やしてほしいなー」

リュウガ「そうだな。ヒロイン的存在…」

マアリ「なによー。リュウガのバーーーーーカ！」

リュウガ「うるせえ！ そして長えよ！」

マアリ「まったく…。子供ねー（アイリス風）
それじゃー38話、いっくよー」

リュウガ「何故にアイリス風？ とうかこの小説にアイリスでねえだろ」

第38話..実力の違い.. リュウガVSヤイバ

お互いの技が中央でぶつかりあい爆発が起こった。

互角か...!?

「頑張っつてえー! ヤイバ兄ー!! ああ憎きバカ悪魔をボコボコにしてー!」

「頑張るッスー! ヤイバ兄!」

「が...頑張っつて...」

沙耶達がヤイバに向かってエールを贈っている。沙耶に限っては『憎きバカ悪魔をボコボコにしてー!』って...酷くねえか。俺は正しいこと(?)をやっつてんだよね...。

敵側に応援あんのにこっちは応援する人誰もいねえし。

なんか悔しいんだか...

「クソッ、ヘルガー。スカタンク目掛けて突っ込め」

「ヘルウウ」

スカタンクに方向に向かって走り出すヘルガー。さて、相手はどうくるか...。

「煙幕だ!」

「スガアアアー」

スカタンクは口から黒い煙を吐き、辺り一面を覆った。視界を奪って攻撃を防ぐつもりか?

なら...。

「かぎ分けるから火炎...ん!? どうした!?!」

動きがおかしい!? 煙幕の中へ入る直前でヘルガーはキキイイ

! つとブレーキをかけ、足を止めてしまう。

どうしたんだ...?

ん!? な...なんだこの臭いは...く、臭え。どこからきやがる...。

俺は鼻元に右手を当てて臭いを嗅がないように防ぐ。

「ヤイバ……お前、何をした!」

「フンッ……やっと気づいたようだな。これはスカタンクの腹ん中で熟成させたくせえ液だ。これを尻尾から飛ばして煙幕の中にいれた。これでテメエのヘルガーの自慢の嗅覚も使えねえわけだ。ザマアねえな!」

まあ、ヘルガーは人間より遥かに嗅覚が鋭いらしいな。でもいくら強烈な臭いであっても、得意なものであれば平気なわけだし……だけど今回の場合はかなり苦手なようだけだな。ヘルガーの顔がひきつつてる。

これじゃダメか……

「ヘルガー……いったんこっちに戻って……ん?」

なんだ、気のせいかな……。一瞬ヘルガーの足下が少し揺れたような……。まさか……

俺は口元にニヤツと笑みをうかべた。

「ヘルガー、足下に火炎放射だ!」

「ヘルー!」

火炎放射によって地面の色が徐々に赤みをおび、熱せられた。その影響で白い湯気が発生する。

「チッ……」

ヤイバが舌打ちをした。あの様子だとやはりスカタンクは穴を掘るを使ってヘルガーの足下の近くに接近してたようだな。

「クズが……やるじゃねえか……だけど甘え! そのまま穴を掘る攻撃だ」

「何!?」

ヘルガーの足下の地面が激しく揺れる。

あのクソスカンク野郎! あの熱せられた地面から無理矢理地上に出てくるつもりなのか。

「ヘルガー! ストップだ。急いでそこから離れろ!」

「遅え!」

「ヘルウウウ!」

チッ……。スカタンクが地面から出てきてそのままに激突し、ヘルガーはその衝撃で上の方へ程度吹っ飛ばされてしまう。

「ヘルガーー！」

俺は少々焦ったか、大声で叫んでしまった。

畜生が！　ただでさえ防御力が低いのに効果抜群の地面タイプの技をくらっちゃった。

「ヘルウ！」

ヘルガーが歯をくいしばり鋭い目付きでこちらをみる。『こんなもんくらっても平気だ！』『速く反撃の指示をだせ！』と言わんばかりの表情だ。

それに煙幕も徐々にだが晴れてきてヤイバの姿も確認できるようになってきた。

よし……

「ならお前の得意技でいくぞ。フルパワーで火炎放射！」

空中で体勢を立て直し、きれいに地上へ着地する。その後で大きく口を開け火炎放射を繰り出す。

ヘルガーとスカタンクの距離はせいぜい5メートル程度しか離れていない。これなら相手もよけらんねえ！

「ケッ……ならこっちはフルパワーで悪の波動！」

「スカァァ！」

ヘルガーの火炎放射とスカタンクから放たれた黒い螺旋状を描いている光線、悪の波動が両者の間でぶつかり合う。

互角じゃ駄目だ。押しきってくれよ。

俺は心の中でそう強く思ったが……。

「へ……ヘル……ウ」

ヘルガーが苦しそうな声をだす。

嘘だろ……。いつもの7、8割程度の火炎放射と違ってフルパワーだぞ！

押しきるところか押しきられてヘルガーがダメージをくらっちゃう。

「頼むヘルガー、踏ん張ってくれ。相殺でいい！ 少しでもいいから押しきってくれ」

俺は両手を力強く握り叫ぶが……。

「クズが！ 無駄なあがきだ。蹴散らしてやれ」

クソ…威力が一層増して、悪の波動が一回り大きくなる。火炎放射が…押しきられる！？

「ヘルウ！」

くっ…悪の波動を頭部くらって後退してしまうヘルガー。

悪タイプの悪の波動が効果はいまひとつとはいえ、少しヤバいかもな……。

俺は額から流れてきた汗を右手で拭う。

「今よっ！ ヤイバ兄！」

「ああ、わかってらあ！ ゴミクズがくたばりやがれええ！ 捨て身タックル」

沙耶のエールに頷いて答える。

スカタンクが助走をつけ、半透明の白いオーラを纏って物凄い勢いでこちらに向かってくる。

特殊技では負けちまったが、物理技なら…負けねえ！

「向かい打て！ 頭突きだ！」

「ヘルウウウ！」

歯を食いしばり、頭を突きだし勢いをつけスカタンクに向かっていくヘルガー。

そして…

ズガー…ン！

両者の技が中央でぶつかり合い、その衝撃で砂煙が辺り一面を舞う。

頼むぜ…ヘルガー。俺は息をのんで、そう心の中で思い砂煙のほうを見つめる。

徐々にだが砂煙がはれ、ヘルガー達がどうなったかも見えてきた。

「え…嘘でしょ…？」

「マジ…スカ!？」

「そ、そんな…」

「クズ…が…クソ笑えねえぞ……」

上から沙耶、ケン、トウ、ヤイバの順番に驚きの表情でヘルガー達の方角を直視して言った。

俺とヤイバに映った光景…。

それは明らかに威力の高いスカタンクの捨て身タックルを頭突きで互角に渡り合っていたのだ。

ヘルガーは口元に笑みを浮かべ、一方スカタンクは目を大きく開いて焦っているように見える。

もしこっちも捨て身タックルで対抗してたら完全に勝ってたな。

残念ながらヘルガーは覚えてねえけどな。

「よしそのまま押しきれ」

「物理技じゃ…あっちのほうが上か…クズが! ケツ…後退しろ、スカタンク!」

チツ…押しきる前にスカタンクは後退し、一定の距離をとろうとする。

そうはさせるかつつう話だ。

「スカタンクに突っ込め！」

「笑わせんじゃねえ！ させっかよ。悪の波動」

チツ：あの技のぶつかり合いを見て、近距離戦が分が悪いと思っ
たのか、有利な遠距離戦にでも持ち込むつもりなのか？

なら：こっちにも考えがある。

「ヘルガー地面に向かってスモッグだ。なるべく広範囲にな」

「ヘルウウウ」

スモッグを広範囲に出すことにより、煙幕のように視界を奪って
姿を見えなくし、悪の波動をなんとかかわした。

「無駄だクスが！ スカタンク、やれ」

スモッグのせいでヤイバとスカタンクは見えないが、何をやった
かは直ぐにわかった。

「へ：ヘルウウ：ウウ」

なんかヘルガーの悲痛（？）な叫びが聞こえる。

たく：クソヤイバ兄様が…。また腹の中で成熟させたくせえ液だ
ったか…？ あれを飛ばしやがったな。いい加減くせえんだよ！

俺はまた右手を鼻元に当て臭いを防ごうとする。

「ヘルガー、こっちに戻ってこい」

目線を下に向け、ゆっくりと戻ってくる。どうしたと思いヘルガ
ーの顔を見ると、『もうこの臭い嫌だ！』『やめてくれ』と言わん
ばかりの表情だ。

本当にあの臭いがダメらしいな。

「これでヘルガーの得意な嗅覚は使えねえ。ケツ：こんな子供騙し
で俺らに勝とうとしてんのか？ 笑わせんなゴミクスが！」

クソ：。スモッグで見えねえからって人のこと好き勝手言いやが
って。あっちが挑発すんならこっちも挑発で返してやるぜ。

「笑わせんな…？ こっちの作戦にまんまとはまってる分際で何バ
カ言ってるんだ？」

「ん：だとテメェ！ んなハッター俺に通用すっと思ってるのか！

！ ああ！？」

ヤイバの表情は見えないがやや怒り口調のようだな。
まあ今の俺の言葉は、ハツタリ……かもしれないけどな。

「バカ悪魔ー！ 何ふざけたこと言ってるの！ あなたのほうが十分バカーー」

あー毎回毎回うるせえチビだ。とりあえずスルーと。

「何も攻撃を仕掛けるためにスモッグを使ったわけじゃねえよ」
俺は左手で頭部をかきながら言う。

「ああ！？ んだと！？」

「ヤイバ……、今のバトルで確信したよ。スカタンクのレベル、そしてお前のトレーナーとしての力量、確実に俺達の上を行ってる……。だからこそあえてこのまま“何もしねえ！”」

「「「え……？」「」」」

「はあ！？」

あれ……？ 4人同時に驚ろいて……いない？ 見えねえけど、むしろ全員呆れ口調になってるような。

「あ……あなた……何を言っているの？ 何もしないって……バ、バカじゃない！ ていうかバカ悪魔だったわね！」

「確かにバカッスね。わけわかんないッス」

「2人とも。そ、それはいいすぎだよ」

おいお前ら……。スモッグで姿が見えねえからって好き勝手いってんじゃねえよ。

「はあ！？ どうしたクズが？ ついに怖じ気づいたか？」

「ま……そんなところだ。だから俺はここで時間稼ぎでもしてマツバさんやジュンサーさん達が来るのを待とうと思う」

「「「え！？」「」」」

「んだと……」

さっきまで呆れた口調で話していた沙耶、ケン、トウが同時に驚く。ヤイバも沙耶達ほどではないけど少々驚いてはいるみたいだな。「フフフツ…ざ・ん・ね・ん・ね。ジュンサーさん達はもうイシトがやつつけちゃってるわよ。イシトはねえ、ヤイバ兄の次に強いんだよ。私に苦戦していたあなた達が勝てるわけじゃないじゃない」

生意気さ全開の口調で沙耶が言った。まあこいつに苦戦したのは事実だけだな。

たく…相つ変わらず生意気だな…クソチビ…。

「ハア…イシトがヤイバの次に強いなら、マツバさんは俺らのメンバーで1番強いんだぞ。もしもだ。ジュンサーさん達がイシトにやられる前に合流できてたとしたら…逆に危ないのはイシトのほうじゃねえのか？」

俺はいやらしく沙耶に挑発をする。

「な、なな、何よ！ イシトはねえ、ポケモンの気配を感じることができるようだよ。さすがに負けることなんて——」

「沙耶！ ジムリーダーを舐めんな！ 俺だって一時期はシンオウリーグに出るため各地のジムリーダーと闘ったんだ。ケツ…悔しいがそのバカゴミクスとは違ってマツバとやらは相当な実力者だろうな」

誰がバカゴミクスだ。この野郎…。いちいちクスだのゴミクスだのうるせえんだよ。

「もし闘っていたとしたら…残念ながらイシトのほうがヤベェだろうな」

「そ…そんな…」

そんなにシヨックだったのか。弱々しい口調で答える沙耶。

「ケツ…たく…そんな落ち込むじゃねえよ。そのジムリーダーに会っていたらの話だ。それに…もしイシトが負けたとしても、俺がそいつをとっちめればいいんだ。んな不安そうな顔すんじゃないよ。沙耶」

前半はやや口調が悪いも、後半になってから沙耶を元気づかせようとするためか荒々しい口調から一変優しく…そしてどこことなく力強い口調に変化した。

「うん…そうよね…。私…どうかしてたわ」

不安の口調から明るい口調に変わる沙耶。

沙耶を不安にさせれば多少なりともバトルに影響するかなと思ったが、逆に元気づけやがった。本当に沙耶達から信頼されてるんだな。さて…これからどうするか…。

「どっちにしろ今はちやっちゃと目の前のクズを焼却炉に叩き落としてやんねえとな」

「させねえつつう話だよ。ヘルガーもう一回スモッグだ」

スモッグの煙がややはれつつあったのでさらにスモッグを出し姿を見えないようにする。

これで多少は時間稼ぎはできるか…。

「させつかよ…クズ！　んな煙、全部吸い込んでしまえ」

「何!？」

スモッグが徐々に前方方向に吸い込まれていってしまう。

あのクソスカンクが…。

俺は急いでヘルガーにスモッグの指示を出す、スカタンクの吸い込むスピードのほうが速い！

このままじゃ…。

「クズが…残念だったな。これで隠れらんねえ」

「チッ…」

俺は悔しさのあまり舌打ちをする。

クソ…辺り一面を覆っていたスモッグがスカタンクによってすべて吸い込まれてしまった。

そのせいか、スカタンクの腹が風船のようにパンパンに膨れあが

っている。

チッ：これじゃスモッグを使っても、さほど時間稼ぎにならねえ。
「こんだけじゃねえぞ！ その吸い込んだものをあのクスにくれてやれ」

「スカアアアア！」

「おい！ 待て…」

「へ…ヘル！？」

さっき吸い込んだスモッグを勢いよくスカタンクの口の中から出てきやがった。しかも尋常じゃねえスピードでスモッグがこちらへ向かってきやがる。

ヘルガーだけじゃねえ。俺共々巻き込もうってか！？

スモッグはさっきスカタンクが使っていた煙幕とは違って毒性のガスだ。“毒ガス”よりは遥かに毒性は少ないものの大量吸ったら意識を失い…最悪…！！

「残念だ。これが俺とテメエの実力差だ」

ヤイバが勝ち誇ったように言った。

クソッ…ヤイバの野郎…。

ヘルガーは大丈夫だろうが俺が危ねえ！！ 速く…なんとかしねえと…チッ、こういう時こそ冷静に考えろ！！

走って逃げるか？ いや駄目だ。逃げ場はねえし、スモッグが尋常じゃねえくらいに速え！ 全力疾走しても飲みこまれる！

ならマンガみたいなありがちな展開だが、ここでマツバさん達がかつこよく登場。ゲンガーのサイコキネシスでスモッグを吹き飛ばしてくれてそのまま俺達に加勢…………都合が良すぎだ！
んなこと起きるか！！

クソ野郎…打つ手なし…か…。

いや…まだ手がある……な。

だけどこれは普通のポケモンバトルでやったら反則だが……んなこと言ってるんねえ！

俺は腰についているベルトに手を伸ばし、モンスターボールを手にとった。

悔しいがヤイバとの実力差はかなりある。だからこそヤイバの最大の油断…そこを狙うしかねえ。

このバトル…まだまだ終わらせねえぞ！

第38話：実力の違い… リュウガVSヤイバ（後書き）

沙耶「引っ張りすぎ！」

ヤイバ「仕方ねえよ。作者が無能でクズなんだし…」

すみませんね…。無能で…クズで…。

沙耶「あれハビト兄…。生きてたの!？」

ひどくない…。

ヤイバ「まあ…ちゃんと投稿すれば問題ねえ」

沙耶「そうね」

悪いけど更新は未定だよ。

ヤイバ「ケツ…やっぱな」

第39話：最悪の挑発（前書き）

マアリ「やったー、11月3回目の投稿だよー」

リュウガ「じゃねーだろ！ 前の話から1年近く更新されてねえだ
けどろ！ つかよくもまあ更新する気になったな。あのアホ作者…」

マアリ「まあまあ落ち着いてー」

リュウガ「いや、落ち着いてはいるが」

マアリ「ということで39話始まりだよー」

リュウガ「始まなくていいんだが…」

第39話..最悪の挑発

「出てこい！ オオタチ」

「オター！」

両手を広げて元気いっぱいボールから出てくるオオタチ。
しかし…。

「オ…オタ…タチャアアアアア！？」

尋常じゃないスピードで迫るスモッグを見て目を飛び出させ大声をあげる。かなり驚いている様子である。

「タチャアアアア！？」

「！？ ちっ…待て！」

目に涙を浮かべてその場から逃げさっていった。

「逃げんじゃねえ！ ヘルガー、オオタチを捕まえろ！」

「ヘルウ！」

逃げた方向に直ぐ様に回り込んで、オオタチの首根っこを噛みついて逃げるのを阻止した。

「タチャー！ タチャアアー！」

手足をばたばたさせ必死に抵抗をはかっているようだが…。

「はあ…たく、じたばたすんな。落ち着け！」

ボールからでてきていきなりこの光景だしな。逃げたくなんのはわかつけどよ。

「お前が逃げたらヤベエのは俺達だ。こんな時で悪いが力をかしてくれ」

「オ…オタ…」

大量の汗を垂らし、両目を点（・）にして『どうすんの？』って言わんばかりの表情をする。

「簡単だ。向かってくるスモッグにむかってハイパーボイスだ。音波の力で衝撃を生み出して、スモッグを取っ払ってくれ！」

「オ、オター」

口を開け、右手をグーにして左手の手のひらへ、ポンツと叩いた。「オオタチ、感心してる暇はねえぞ。ヘルガー、離してやってくれ」ヘルガーが噛みつくのを辞めて離すと、オオタチはスモッグが向かってくる正面へ移動する。

「頼むぞ。オオタチ！」

俺はそう言いながら両耳に手を当て塞ぐ。ヘルガーも同様に両前足で両耳を塞いだ。

準備はいいな。

俺はオオタチを見て頷くとオオタチも頷き返した。その後大きく息を吸い込んだ。

よし、いけ！

「オタアアアアアア！」

バオオオオオオン！

痛っ……手で塞いでたんだが耳の奥がギンギンしやがる。

でも、音波の力で衝撃を生み出したおかげで、こちらに向かってきていたスモッグを拡散させて取っ払うことができた。

「サンキューな。オオタチ」

「オター」

俺は地面に膝をついてオオタチの頭にポンツつと手をおいた。するとオオタチはこちらを向いてニコツと笑った。

俺は一呼吸し、そのまま立ち上あがろうとした。その時――

ビュウウウウウ！

「っ…」

「ヘルウ」

「オタアアア」

突然左方向から周りの木々が揺れるほどの大きな風が吹いた。それにより土ぼこりがまっしてしまふ。俺は目に入らないよう左腕を目元に当てて防ぐ。

10秒程度たつと風がやんで、土ぼこりも晴れてきた。

たく、強い風だったな。もう少し速く吹いてくれればオオタチださなくてもスモッグを吹き飛ばすことができたかもな。

ジムみたいに屋内で闘うわけじゃねえから風の影響とか天候とかもう少し考えてバトルしねえとな。

「ヘルガー、オオタチ大丈夫か？」

「ヘル」

「オタ！」

二人とも身体中に土埃で汚れてるみたいだが大丈夫だな。

「ケッ、なんだよ今の風！」

「まったくそうよね。服がよこれちやったじゃない」

そう言いながらヤイバと沙耶は服に着いている土埃を手で払って

いる。

「うぎゃーッス！ オイラの帽子があー！ 帽子があー木にー！
！」

「あ、あんな高いところ……。あ、危ないよ」

ケンとトウの方はどうかというと、ケンが被っていた帽子が風で飛ばされて木に引っ掛かったらしい。ケンは必死に木に登って帽子を取ろうとしているようだ。トウは注意しながら見守っているようだが…。

「ぎゃあああッス！ 痛いー！」

「ケ、ケーーン！」

ケンが木に足を滑らせてそのまま地面に落下して背中を打ち付けてしまったようだ。

トウは心配そうな表情でケンの近くに寄る。

な、なんつーか緊張感ねえな。あの2人は。

俺はそう思いつつヤイバの方へ視線を向けた

「ん？ あいつは…」

俺の眉間にシワをよせジツとある方向を見た。

視界に入ったもの——それはいつの間にかに沙耶の隣に立っていたキルリアだ。

おそらく俺達がスモッグにのみこまれそうになった時にボールから出したのだろうが…まさかあのチビ。

「おい沙耶、なんでキルリアだしてんだ。まさかヤイバと2人で俺を倒すこんたんか？」

俺は思っていたことを率直に言った。

「何言ってるのよ。バカ悪魔！ せっかく助けてあげようと思ったのに。ねえキルリア」

「キル」

「は、はあ？」

ど…どういう意味だ。

俺は今の沙耶の回答に少し戸惑っている。

助ける？　なんでだ。俺ら敵同士なはず…。

「ケッ、何難しい顔してんだ？」

「何！？」

「たく…クズだな。テメエがスモッグに飲み込まれて意識を失ったのを確認できたら、キルリアのサイコネシスでスモッグを払おうとしてたんだよ。正直あんなことしたらテメエがくたばりかねねえかな！」

「私達は目的は依頼されたもの盗むこと。ただ一つよ。けして人の命を奪う行為はしないわ！」

「こんなことしても俺らだって命の大切さくれえ知ってたんだよ！」

…ケッ、何言ってるんだか俺らしくねえ」

ポケットに手をいれてソッポ向きながら喋るヤイバ。

相変わらずムカつくヤイバ兄様とクソチビだが…。

どうやら俺は少しこいつらを悪く見すぎてたのかもしれない。スモッグにのみこまれても敵である俺を助けようとしていたみたいだし。本当はこいつらそんな悪い奴らじゃ――

「ケッ、くたばったらくたばったで後始末が面倒なだけだ！　だから大人しく死なねえ程度にくたばれ！　スカタンク、あのクズに悪の波動！」

「って、えっ…ちょ…待っ、うわぁ…て何しやがる！」

当たる寸前で左にステップしてなんとか回避することができた。

「チッ」

「おしいっ」

「『チッ』じゃねえし『おしいっ』てなんだよ。さっきの命の大切がどーたらはどこいったんだよ！」

俺は舌打ちするヤイバと沙耶に突っ込みをいれる。

「あれ？ 『死なない程度にくたばれ』ってヤイバ兄が言ったのきこえなかったのかしら？ さすがバカ悪魔ね」
「やめとけ沙耶。んなクズに言ったところで時間の無駄だ。だから率直に言ってやるよ。とっととその薄汚いねえ顔面を地につけて這いつくばってろ。このクズ！」

ブチッ：

このクソ野郎が！！

さすがの俺も堪忍袋の緒がブチ切れた。

前言撤回だ。ヤイバだけは絶対ブツ飛ばして取っ捕まえてやる！俺は歯をくいしばって右手をギュッと力強く握りしめそう誓った。

「お前調子んじゃないぞ！ そもそもトレーナーに攻撃すんのは反則だろうが！」

「テメエだって1対1のバトルでオオタチだしただろうが！ 人の言えねえだろうがゴミクズが！」

「オターー！ タチタ：タチャアアアアアア！！」

オオタチはヤイバに向かって指を差して叫びだす。いつもヤイバの発言が気に入らなかったのだろう。かなりの興奮状態だ。

「落ちてオオタチ。あんなクソヤイバ兄様にいくら言ったって意

味ねえよ！」

「フン。テメエ：クズの分際で調子に乗ってんじゃねえぞ！ んなガキほざくような悪口で挑発してるつもりかよ。笑わせんなよ！」

「そうよ！ そんなことやっても無駄よ。無駄。それともヤイバ兄に勝てると思ってるの？ フフツ、本当にバカ悪魔ね」

軽く挑発してはみたものの逆にヤイバが挑発して、更に沙耶が（無駄に）追い打ちをかけるように挑発する。

さすがにこんな安い挑発に乗はずねえ：か。

「仕方ねえな：こりゃ。ヘルガー、オオタチちよつと耳貸せ」

「ヘル」

「オター！！」

ヘルガーは普通通り返事をするが、オオタチはかなり力がこもったような返事をする。まだ怒ってるようだな。

俺はヘルガーとオオタチを近くに寄らせて、耳打ちをした。

「――わかったか？ うまくいくかわかんねえけど頼むぜ」

「何考えてつかわからねえが無駄なこととしてんじゃねえぞ！」

相変わらずガンガン挑発してくるヤイバ。

「今のうちにほざくだけほざいてろよ。後悔がねえようにな」

俺は目付きを鋭くしてヤイバに言い放つ。

「んだと：クズ！」

「そういやスモッグと悪魔の波動。計2発だな。お前が俺に攻撃してきたのはな」

「はあ：それがどうした？」

「これで俺たちに攻撃したのはチャラにしてやるよ。ヘルガーシャドーボールだ。ただしあっちのほうにな」

俺は不適な笑みを浮かべある方向に指を差した。ヘルガーもそちらの方向へ向き、口元に黒い円状のエネルギーを形成し発射した。

「まだだ、ヘルガー！」

「ヘルウ！」

俺はもう一発同じ方向へ放つように指示をする。

これで計2発。

「デメエバカか？ どこを――！？ しまつ――！？」
気づいたようだ。だがもう遅い！ 俺の狙いは――

「ジャーンプ！ そして着地！」

「ケン。よ、よかった」

「悪いな、トウ。心配かけて。でもこの通り帽子救出ッスー！ ゴメンな愛しの帽子ちゃーってなんかきてるッスー！」

「えっ……えー！」

ケンは目を飛び出させ迫りくるシャドーボールに指を差しす。トウは両手で自分の頭を押さえて戸惑っていた。

一方、こういうことが起きて一番騒ぎそうな沙耶は意外にも冷静であった。

博物館で沙耶と闘ったからな。やっぱりヘルガーのシャドーボールのことをわかってるな。

「クッ……クズがあー！！ 急げスカタンク！」

挑発して時とはうってかわり、顔色を変え焦った表情で指示を出すヤイバ。

スカタンクは直ぐ様ケンとトウの方へ向かう。

「だっ……ダメー……罨よー！ ヤイバ兄いー！！」

沙耶は目を瞑って大きな声を出して叫ぶ。

そう。沙耶の言う通りこれは罨。

ヤイバを怒らせて冷静さを失わせ、ブレイドブラザーズの絆をぶっこわす、そして俺がこの勝負に勝つためのな！

「スガァ！」

沙耶の叫んだ時にはもうスカタンクはギリギリ追いついて2発の

シャドーボールがケンとトウに当たる前に身をていして防いでいた。

「たっ、助かった……」

「ヤイバ…兄？」

トウが力が抜けたような表情で言う。そしてケンがヤイバの方向を見ると、顔色を変えておそろおそろ声をかけた。

その理由^{わけ}は簡単だ。いつも自分達に優しく接^{むか}していたであろう暖かったヤイバはそこにはいなかったからだ。

「テツツツメエエエエ!!!」

そこにいたのはもう完全に冷静さを失い怒りの感情に満ちあふれてしまったヤイバの姿だった。冷静でいられるはずはないだろう。大切な者達を攻撃し傷つけようとした奴が目の前にいるのだから。

ま、これか狙いなんだけどな。

「さっさと続きやろうぜ」

俺は不適に笑いながら言った。

全てはポケモン像を取り返す為だ。悪いなブレイドブラザーズ。

第39話：最悪の挑発（後書き）

沙耶「更新遅すぎよ！　そして何でヤイバ兄があんなことになるわけ！」

お、落ち着いて。仕方ないよ。成り行きで…。

沙耶「こうなったら、私がなんとかして見せるわ。ヤイバ兄、まってね。私が正気に戻させてあげるんだからー！」

なんかリュウガ…主人公なのに悪役。

沙耶「ということで次回は私視点！　みんな応援よろしくね」

いや普通にリュウガ視点です。無事に更新できれば…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8438f/>

PocketMonsters LINK ～迷える少年～

2011年11月18日05時09分発行